



(一)

紅葉集



淺草郵便局の爲換掛に、柏壁讓といふのがあつた。二十八になるが配耦は無し、両親は無し、厄介は無し、親類は無し、然る家まで無い。これが眞の獨身で、寺島村の植久といふ植木屋の奥座敷に下宿をしてゐた。生若い小官員の中には、鼻下に産毛を生してゐながら、三歳になる兒があるなどは珍らしからぬ例で、それといふのも、年老いた母親があつて、本人は小成に安んじたい氣は無いのだが、親に奉じ、身を養ふ術の無いところから、壯心已まずと雖も五斗米の爲に膝を屈して、何も孝行と、神妙に極めてゐると、親の心は格別で、彼も道樂を始めない内に、早速虫おさへの條を強ひられる。それには色々といはれぬ事情が絡むで、是非に及ばず、一番その女房といふのを持て見ると、有繋に情合で、情は無い。自分が稼人であつて、而して小使帳をつけて見せらるゝ細君なるものが出来た曉には、世所無難とらむと欲すといへども得可けむやで、遠大の志は氣の脱けた原船球のやまになつたふし、名譽は欲しくもなくなるし、女房は可愛くなるし、子供は出来るし、老親は愚痴になるし、唯、欲しいのは金銭で、遂には貯藏銀行の廣告に首を傾けて、一日一錢づゝ無いものにしておけば、月に三十圓

隣の女

の、年には三四六十錢、十年で三十六圓だから、百年なれば三百六十圓、千年の三千六百圓、なるほど大したものだ、と今更のやうに吃驚して、日に一錢づつで三千六百圓は可が、能く考へて見て、千年といふの度吃驚して、それでは日に二錢として、また勘定を爲直すやうな根性にもなる。

嗚呼おもへば、青年の英雄で、所帯持の凡人と成下がらざるは蓋し鮮矣。天下に凡人は多いけれど、生れからの凡人よりも、青年からの凡人よりも、親の脛を咬つてゐた比の有爲多望の士なる今日の凡人が、其過半數を占めてゐるといつて可からう。故に女色が身を祈る弊ならば、所帯は體を擯く支翁とも謂つべしである。短袴弊衣に高履を着けて、斑々たる霜髪、四十にして未だ家を成さざる的老書生を見れば、いふ年をして、行違ふ人は眉を聚めるけれど、實際を謂つたら更に憐むべきは、二十三四の無分別盛で、親睦會の餘波を雷門で外しの、仲見世で喇叭や招猫を買つて歸る男の境涯であらう。

子は三界の首枷、其子の母は一生の絆、我標札をうつたる格子道の借家は、心を繫ぐ獄である。して見れば、男子の蚤婚は自ら好むで、毒薬を飲むやうなもの、島田醫の女房の爲には、日本國中で一日何千人の有爲の男子が愚弱々々になることかと想へば、御同然に憫るべきは虎皮より綿縮緬である。

袴を着けの紋附の羽織で、容貌頗る那勃翁に肖てゐる立派な男が、一生月二十圓ぐらゐに齟齬して、敢なく息は絶えにけりて、それでお仕舞は、少しく臍効無き過ぎるけれど、什麼いふものか、何處の役所でも課長は一人で、下役は大勢ある。粕壁讓は年輩といひ所得といひ、世間で謂ふ、天晴一人前の男であるのに、まだ女房は持たず、所帯には拘はず、然りとば、之を青年の月給取に比して、大いに頼もしく思はれる。定めて志を抱くが爲に身を愛むで、例の毒薬を飲まぬのであらうと推量される、天晴々々。と當事も無く褒めてばかりもおられまい。實際心に期する所あつて、當分書生の生活を甘んじてゐるの歎、但しは深く自ら悔して、私に哲理の研究に耽りつゝあるの歎。それとも、容色好み「むづかしや」で、未だ佳耦を得ざるの歎、筒井筒振分髪の聘定に死別れて、外に見かへる女子は無といふのか歎、或ひは又「と意氣筋」の歎、誠の中の郷、折々御高祖頭巾が訪ねて來るといふやうな寸法歎。知らず粕壁讓の獨身は、善か悪か、邪か正か。まづ平素の行狀が詮議物である。

近いことでもあるから、北廓の方は如何、鷹ヶ河を迷つて繰込むことであらうと想へば、なか／＼以て道徳堅固の甚だしきは、植久夫婦が保證する。第一、局の同僚が、話せない奴だと除けるものにしてゐるのが、何隣の女

より確である。話せない奴だといふ一言の中には、吉原に限らず、總べて女の手に關係せぬ、といふ意味を含蓄してあると解釋して差支あるまい。其實玉顔紅粉粧と摩違つても、曾て賤流をつかつたことのない男である。況んや佇立の回顧の目送の茫然自失などといふ不見識に於てをや。藪蓼を辨ぜずと謂ふのが、世智に味いことの際語なら、粘壁讓は銀杏返と唐人鬚を辨ぜざるものである。

まづ如此色氣が無いから、定めて形にも風にも構ふことではあるまいと思へば、構ふといふ程では無いが、萬更構はぬでもない。勿論襦袢の袖に淺黄縮緬を附けたり、懸物の表装見るやうな帯をするのでは無いけれど、いかにも清楚として、さも身嗜の好さううに見えるほど奇麗にしてある。譬へば花一つ咲かぬ杉の生垣が、刈込まれたばかりで雨に濡れたるかの如く。格別眺にはならぬけれど、見た眼に少しも否がない。けれども美服を着てあるわけではない、敷を持つてある次第でもない、始終同一ものを引張つて、保つだけは保たせて、是非入る時に新しいのを拵へるといつたやうな、極真面目の道樂氣無しで、唯心して薄汚ないのや、汗臭いのなどを用ゐず。亂脈のない風體が大の嫌ひと見えて、いつも出来立の押箱の様に、まぢんと極つてある。

恐らく十六にして衣類を疊覺え、十七にして引駈を知り、十八にして仕立の寸法を書留め、十九二十にして、友切は仕舞つておくべきもの、と心着いたのは此人であらう。

(二)

女色でも無し、衣類でも無し、旨い物食でもするのかと謂へば、さうでも無い。折々は鶏肉、牛肉、乃至は藪蕎麥、小料理屋などへ立入つて、獨酌を極めることばあれど、壹圓と続まつて、飲食に費つた例が寡い。それに又交際の無いといつたら、恐らく此男ほど交際の無いのも希らしい。何が日にも朋友の訊ねて来たこと無し。行たこと無し。それでも正月には年賀の葉書が二三枚来る。それが先づ朋友であらうけれど、みな遠國に在るもので、何年にも姿を見せたことが無い。これだから少しも錢は入らぬ。宿料の五圓といふものを月給から減いて、剩餘は幾許だか知ぬが、其は皆費つて可ものであるのに、道樂は無し、義理は入らぬから、半分は雜費としても、確に半分は手附かすに月越しの、備荒貯蓄として毎月積立てられるに違無い。

尤も土曜日の晩には、折節淺草の寄席へ出掛けることがある。日曜には屹度貸本屋が入りこむ。まづ此二者が目に見えた出錢の口であるが、これしきでは高が知れてゐる。けれども、寄席とは、貸本とは、粕壁譲に於て頗る異しむべき嗜好といはねばならぬ。その寄席といふのは、いかなる種類の藝か、貸本はどんな物を見てもゐるのか、聞きたい。

例の十六にして衣類を疊むといふ人物であるから、總じて物事が綿密で、始末な、生丁目な、奇麗好な。所帯を持つたら、始終格子を拭いたり、庭の草ばかり扱つてゐるやうな想はれる。その通り、居間をば藩割の如く形附けて、手爐に火箸の刺しどころまで、ちやんと極つてゐる。床間であれ、机の上であれ、戸棚の中でも、茶棚でも井然として、何か一個曲つて置いてあるものも無い。いかなる自墮落の先生でも此一間へ入つたが最後、忽ち生丁目電氣を感染して、體が眞四角になつたやうな心地がして、我知らず肩が聳えて、割膝になつて、姑く恐縮して、遂に痺を切らすであらう。

かういふ人に座敷を貸すのは五割の徳だ、と平素喜んでゐる主の植久が名言を曰たことがある。粕壁譲のお座敷の取散らしたのは、近火の時でも無くちや見られない。之を聞いて女房が「縁起でもない。ちつとも見

たかないよ。」と凹ましたやうな。

いかにも近火か煤掃の折などで無ければ、粕壁譲は居間を取散らした事は無いのである。そのくらゐであるから、自身に箒、拂塵を把て、毎日丹念に掃除をする。役所から退けて來れば、まづ靴を下駄箱へ入れて、傘を承塵に掛けて、帽子を帽子掛けに掛けて、棧留革の夾、俗を床の脇に置いて、羽織から袴、帶、衣物、襦袢と脱いで、衣紋竹の不斷着に衣更へて、順々に羽織から疊むで、之を箆筒に仕舞ふ。但し袴は押をおき、襦袢は干すと知るべし。

それから火鉢の前に押直つて、茶道具を取出す。そこで心閑に茶を點じて、塗物の食籠から甘納豆を前後に三匙ほど食べて、其を仕舞つて、茶鉢を片付て、やをら机に打向ひ、本箱から書物をだして、跡を蓋して、頼杖を突て黙讀を始める。此書を何かと思へば、實に愛想が盡る、繪のある小形の貸本である。

繪のあるのも敢て尤むるには足らぬ、貸本と雖も侮るべきではない。けれども小形といふのが稍氣に懸かる。其書の何であるかは、粕壁譲が平素の爲人を傷つける處があるから、徳義上茲に明言することを好まぬ。尙又總に此人に望を繋けて、滔々たる青年官吏中、行年二十八歳未だ妻を迎ず、然も品行を端正にして、勤儉

の美德を養ふのは、想に後來雄飛の^{ゆうひ}大志があるものであらう、とまで提灯を持つたのに、然りとは呆れたものだ。今更^{いまさら}鑿^{うが}違^{ちが}ひの面目ないに就けても、喚^{あひ}書名を明言するに忍びない。然ればといつて、陰蔽^{かくたて}をすれば同罪の汚名も口惜い。已むを得ぬから中間を取つて、作者の名だけを明かすが、狂訓亭^{きやうくんてい}爲永春水^{ためいしゆんすい}！彼座右の書が春水の中本と知れたら、寄席も大方は落語か娘義太夫といふ見當であらう。誰か粕壁讓を話せば奴と謂ふや、このくらゐ話せたら十分である。未だく外に恐ろしく話せる、大した事がある。見よ床間に三管の尺八、繼の七寸は裸で、二管は袋入。白天鷲絨の古びて黄ばむた袋のが貫甫の八寸で、これは年来手馴らしたのであるが、レの調が思はしからぬとかいつて甚く氣にして、然るべきのを一管欲しがつておたが、つい近頃手に入れた古董の九寸は、頗る意を得たさうで、虫の音といふ銘を附けて、一方ならず秘蔵して、糸錦の袋に入れてあるのが其である。

音色といひ、竹の味といひ、申分は無^ないけれど、こゝろ節が無いとやら、竹相が悪いとやら、素人には解らぬ其道の不足を言つてはゐるけれど、兎も角も此位の尺八は稀物と、粕壁家の重寶にしてある。尤も此管を手に入れるには、幾ど一半月の月給を棒に振つたのであるから、大事にするのも無理はない、趙氏連城壁^{てうしれんじやうのたま}、

粕壁月給箱

此に到つて、粕壁讓を觀察した我眼の謬つておたのも益極まれり、と自白せねばならぬ。彼が妻を持たず、錢を費はず、寺島村に閑居して、俗客の往來を謝して、名利の機心を絶つてゐる、其だけは事實であるけれども、その「持たず」「費はず」「閑居」「謝して」「絶つて」とあるのは、決して哲學を研究するの、遠大の志を抱くのと、そんな頼もしい了簡ではないのである。お高祖頭巾が訪ねて来るでも無ければ、振分髪でも亂髪でも何でも無いので、矢張人間並の粕壁讓、何處までも郵便局の爲換掛、そこらが相當の人物である。

唯異つてゐるのは、尺八を朝暮の友どころではない、兄弟分のやうに可愛がつて、天神様に梅の木、爲朝に弓、柳に蹴鞠、松魚に大根おろしの如く、片時も側を離した事の無いほど凝つてゐる。

凝つては思案に能はずとも、下手の横好とも謂ふけれど、なか／＼然うでない。之を素人藝としては餘程黒い方で、緑日に産の上に排べてある、物干竿のやうなの^{あけ}に孔を明けて、一尺八寸あるから尺八などといふ名管を九錢で求めて、器用から吹習つて、いでや劍舞の下座を勤めやうなどといふ、書生一流出たら吹の管とは、少しばかり譯が違ふ。六段や八千代獅子は中村樓の温習會^{おんじゆかい}じみて研えない奴さ、ぐらゐの高慢はいつ

ても、聴衆は敢て惜しまぬほどの鍛練は必らずあるもので、長く其道の門に入つて、本式に苦むた藝である。然し、話せぬ奴の粕壁讓を、折々寄席で見掛けた同僚はあるけれども、さほどの藝があらうとは夢にも想ひ懸けぬ。さほどの藝どころか、尺八といふものは、箎を冠つて、黒塗の駒下駄を踏いた人が、立ちながら御へてゐる物と、粕(粕壁といふべきを略して、同僚は陸で粕々と呼ぶ)は想つてゐるだらうぐらゐに輕蔑してゐる態であるから、此事をもし聞いたならば、それは大方粕が籠下を焚付けてゐたのだらうなどと、誰も取合ふ者はあるまい。

そこが隠藝である。朋友知人の間に知れわたつた藝ならば、少しも隠藝のことは無い。粕壁の尺八も誰知らぬところに大きに旨味があるのだ。一體藝事といふものは、些とばかり遣ると、直に人に知られたくなるもので、諸人之が爲めに難澁するが世の習である。

この境を脱けると、逆上も下つて、次第に容體も見直して、自他の命に別條も無くなる。之に由て觀れば、粕壁讓が修行中の舊時は知らず、今日の様子から考ふるに、未だ聴かざるに先だつて、此人の竹は捨てたものではあるまいと頼しい。人に知られ、人に見せつけやうといふ根性も無いのに、大枚の金を投じて、古董

の作を伊達に秘藏するのではあるまい。さういふ風の男でないことは、彼が平生の行の質素なのを見ても解る。

扱其は其として、彼が一管の笛に生涯を托し、名利を捨て、唯是樂むといふには、何とか仔細がありげに考へらるゝ。然矣、粕壁讓君よ、君の薄命は吾他ともに同情の涙を澱ぐに吝ならざらむ。不幸なる粕壁讓君よ。

(三)

粕壁讓が薄命といふのは外でもない、彼は實に言語に断えたる醜貌である。女子は容儀を重ざるものであるから、不器量を歎くも理であるが、苟くも男子たるものが、何事である、好男子に生れたら何なる？醜男子であつたら何とする？女子に惚れられないが爲に、社會から擯斥された噂を聞たことがない。惚れられた擧句が紙衣を着、少し氣の利いた手合が男、妾になる、といふ話は往々耳にする。

今粕壁が薄命といひ、不幸といふのは、單に醜貌に生まれついたからと謂ふのであるか。そんな薄命、そんな不幸に、誰が同情の涙を澱ぐものか、馬鹿々々しい。

隣りの女

凡そ世間には是ほど思ふほど麗しいのは寡いけれども、醜いのが御望とならば腐るほどある。粕壁一人が醜いといふなら、或ひは不幸薄命の人かも知れぬ。然し一人ではない、多数であるのだから、寧ろ氣が強い筈で、それに又數の中であることだから、粕壁より十段も二十段も不出来なのであらうと想はれる。實際いくらも在る。けれども其等の不出来達は粕壁のやうに苦勞にしてはをらぬ様子で、甚しきに到りては、自ら好男子とこそ思はぬけれど、萬更捨てた面でもないぐらゐに自認して、彼奴は些と来ておるなどといふ語を、折々は洩すところを以て察ると、幾分か自得しておるらしい。歎けばとて回る可きにあらず、之を天より享けたのであるから、各自其分を樂むだ方が、或は道かも知れぬ。

よし之を樂まぬでも差支無い。然し歎くにも悔むにも當らぬ。彼奴は面が拙いから交際は御免だといふ朋友は無い。男と生まれたら願はくは男に惚れられるやうでなければ、到底立身出世は覺束ない。

男に思着かれるには、色白の必用も無い、身筋が通らなくて濟む、鳳眼鬚眉も入らなければ、丹花の唇にも及ばぬ。金が無くても、大の無藝でも、何でも構はぬ。之ほど仕事が樂で、第一身の爲になる色事は、多度あるものではない。

之を小にしては、銘酒屋の姉様、牛屋の婢、之を大にしては遊女、藝者、之を地物にして、後家、生娘、女房等に思ひ着かれた、男子としての價値は幾許か。それから其結果は奈何。最一つ其末路は奈何。噫、色男には誰がなる!! 榮華は夢の如しならば、色事は水泡々々。粕壁讓何をか悲まむ。不幸薄命が聞いて呆れる。

なるほど聞いたならば呆れるかも知れぬが、其身になつたら呆れてもおられまい理由がある。それは讓といふ男は、不思議にも自惚氣の薄い性で、他が見たよりは倍も自分の不器量を悪く見ておる。見ておるといふことは、凡夫の淺ましさに出来まいけれど、唯さう信じておるのである。世中に自分ほどの醜男はあるまい。あく因果だ、情ないといふ念が、四六時中片時も絶えぬ。

何故絶えぬであらう。榮華は夢、色事は水泡であるのに、何も醜貌が昇進の障礙をする譯ではあるまいに。勿論! 誰も嫁に来てくれる女は無いといふ次第でもあるまいに。待つた! それは些と勿論と言悪い。粕壁讓が不幸薄命といふのは、そこらである。

彼は右様の醜貌であるから、色事は全く繩張外と、奇麗に断念すれば善いだけけれども、それが業で、どか

隣の女

隣の女

く断念しかねて、どうかして女に思はれて見たい。引張風になつて、兩方へ義理が立たなくて狼狽して見たい、といふ野心が勃々としてゐる。一生に一度でいいから、女子に苦勞をさせて見たいと、鳥の鳴かぬ日はあれど、さう思はぬ日は無いけれど、淺まじや我姿を見れば、自分ながらも愛想が盡きる。これでは到底相手にしてくれるものはあるまい、まいなら可けれど、ないと考へるほど、執着は彌々固くなる。固くなるほど益望に遠ざかる。

自分も望に遠ざかることは知てゐるけれど、骨が舍利になるまでも、此ばかりは諦められない。また強ひて諦めやうとも爲ない。其代り、今に何か成らうとも思はずに、唯當も無く昏々と、女に思着かれることを考へて、戦を爲すに七書ばかり見てゐるのである。

柏壁讓は犯せる罪ありて恐るゝが如く、おのれの醜貌を心に愧ぢ、世間に憚つてゐる。こんな顔を人に見られるのが愁いといふ思慮から、ひよこく出掛けることを擇ばぬ。就中女子に見られるのを何より可厭がつて、色氣のある所は敬して遠ざかつてゐるゆゑ、自から道徳堅固であるが、その心中に立入つて見ると、敢て其様ものゝ堅固を望むてゐるのではない。矢張世と和して、野暮といはれうより、粹だとか、意氣だとか謂

はれたいのであるけれど、直に鏡と相談して見て、此顔で！と落膽する。

到底我は色の戀のといふ浮世の樂を味ふことは慥はない、謂はゞ不具者も同然の味氣ない身だ、と甚く鬱いでしきま。

諺にいふ破鍋に續盞、いかに醜貌であらうとも、難有いことには、出雲に大社様の在ます間は、相應の相手の無いことはない。ましてや二の酉で賣残つたのが山の如くあるのだから、其中に又想の外の目つけものが無いには限らぬ。

娘や藝者に思ひつかれて、やいのくいはれるばかりが戀でも無ければ、浮世の樂でもあるまい。假名でいふ浮氣な色事、むづかしく謂へば皮想の愛、其始や飄然として惚れ、末は突如として否になる間などは、決して戀の部には入れられない。其形は淡として水の如く、之を味へば甘露に似たる、かの夫婦の情こそ戀の戀、於鹹本戀である。

柏壁讓は自ら不具者だといつて、切りに失望するけれども、此樂を享けらるゝのではないか。世中の事は定規で度つたやうに正しくゆくものでない。美人だから必ず好男子に添ふとは限らぬ。否寧ろ其

隣の女

隣りの女

反對の現象を歴ば視るから異しい。故に粕壁讓も美人の妻を迎へる、と斷案を下すわけにはゆかぬけれど、かういふ次第だから失望することはないと自ら寛うして、餘り鬱々思はぬが可からう。

他人が思ふまでもない、粕壁讓は自身にも女房を持つての快樂は認めてゐる。また女房を持つたらば、藝者や娘に惚れてもらはなくても窮らない、内で小指が多度可愛がつてくれるといふことも能く心得てゐる。それに又何故嫁を妻はぬのか。乞君莫怪、粕壁讓には理想の妻がある！媒妁に妻はせられた嫁、好加減に極めた縁談、親などに勧められた女房、そんなのは粕壁讓の最も屑しとせざるところである。よしや其女が小町であらうが御免を蒙る。相互に心が知れ合つて、添はう、添ひまじよ、死ぬ、死なう、といふほどの間で無ければ、夫婦になる可き必用が無い。道中で馴々しく語を懸ける奴があつたら、胡麻の堀と想へど戒めさへあるのに、これは假初にも借老同穴の契を結ぶのではないか。それに何ぞや、碌に言語さへ交さぬみぢしらずに見不知の女子を捉えて來て、これと所帯を持つのだ！實に此位解らない、向不見な、險難な話が亦とあらうか。

それで無事に納まつてゆくのが餘程不思議、紛々擾々の持上る方が至當なのである。無事に納まつてお目出

たい。それだけで夫婦といふものは濟むものなら、世中に夫婦ほど凡そ無能いものは無い。

とても夫婦となるならば、多年相惚で苦勞した間でありたいといふのが、則ち粕壁讓平生の志である。

贅澤さへ言はなければ、粕壁讓と雖も相惚の一人や半分出來まいものでも無い。けれども其は緞蓋だといふことを、一寸斷つておかなければならぬ。然矣、破鍋に緞蓋！粕壁は破鍋でありながら、緞蓋では不服なの

で、彼が理想の妻といふのは、さまで美しくなくても可い、けれど醜くない、一寸仇な、色氣ばい、何處か思附のある、江戸子らしい張のある相親で、様子の好い、口前の面白い、如在のない、快裕てゐながら妙に初心の處があつて、氣の小さい、實のある、情の深い、意地張な、口説の多い。なか／＼注文が難しい。此繪巻通りの女子が果して有らうか。有つたとした所で、粕壁讓の手に合はうか。讓様と私の其間はど

いばれるほどの相惚になれやうか。或ひは其な事になれやうかも知れぬ、色事は機であるから。然し、讓射ら事の終に望むべからざるを先刻覺悟してゐる。もし覺悟してをらぬとならば、彼は豆蔵で猛虎を狙ふものである。故に、理想の妻！そんなのを女房に持ちたいものだと念ふだけで、持たうと企てる次第ではない。とは謂ふものも、もし女房を持つといふ段になつたら、是非此注文通りのと相惚の上でな

隣の女

隣の女

くでは、外のでは否だと極めてゐる。

して見れば、不便ながらも粕壁譲は一生蛆に生かれる身である。もし幸ひに此理想（理想と謂はうより妄想）を捨て、大人しく緩蓋で辛抱するなら、風雅でも無く、洒落でも無く、草深い寺島村などに引籠むで、人の座敷をかり住居、寂寥まざる夕暮の、風が持て来る何處かの絃歌を聞きながら、給仕無し之夜食を播込みの、燈火がつくと影法師と昔合で、色があると此な晩は訪ねて来るものだど、年中隣の寶を敷へて氣を悪くしてゐるやうなことは無いので、これといふのも心がらであるが、其心がら如何も傷はしくてならぬ。不幸薄命といつたのも、抑も是ゆるである。

何がな娛樂が無くては人間は動まるものでない。その人間に毛が三筋どころか、づんと足らぬ思の粕壁譲、まづ二人前の道樂が無ければ、この埋合は附きさうもない。そこで尺八に慰むことを思ひついたのであるが、有聲に思ひついただけある、夫鐘怒つて之を撃てば則ち武し、悲みて之を撃てば則ち哀し、誠意の感じて入れば也で、月明の様に座して心靜に吹澄まされたら、その何とも彼とも言はれぬ音色といふものが、毛孔から身に沁みわたつて、悚然として来るかと思ふと、胸が一杯になつて、覺はす涙が滴れる。と謂ふのも仰

山だけけれど、兎に角上手を吹く。

奥で始めると植久は吹く、光氏のやうな男が自墮落なく柱に靠れて吹いてるとしか想はれねえ。鮮かなもんですよ。此ばつかりでも小色の一つや二つは出来るんだ。惜いことに喃、最少し男振を何かした日にや、ハツ片端から難切だ。

寔に植久の言の如く、此音色を聞いて此人を想見するのは難い。色白の華車な、意氣いな男でもななければ、藝が何であらうが、いかに管が好からうが、あんな音の出やう理が無いと想はれるほどである。

本人も管さへ持てば、浮世の事も、其身の事も、何も彼も一切忘れて、全く魂を打込むで吹賞む。粕壁譲が一日中の樂は、この尺八を吹いてゐる間と見える。此間の心地といふものは恐らく仙人であらう。

(四)

粕壁の坐敷とは垣一重隣りに、二階遣りの察めかしい建物がある。總ての好みが待合風で、異に華車がつた小細工のしてある具合は、一目見て、格子の間へ胡瓜の輪切が挟みたくなる。

抑も此家は某會社の番頭が外妾を貯いたので、其次の代には新聞屋が住むで、それから一年ばかり、今に

隣の女

隣りの女

空家になつてゐる。

眞面目の素人にはちと住みかねる構造ではあるが、元來其に建てたわけあつて、圍者でもしようといふには迷向の住居で、また愛妾が鼠鳴をして悦びさうに出来てもゐる。

七八日前から二三度も人が見に來た様子で有たが、どうやら取極つたらしいので、早速植久が云々だと告すと、粕壁は眉を蹙めて、

「それは窮るなあ。あの二階から此方は全然見通した。」

と嘆したところで仕方が無い。

「見通しても可とさいます、別品ださうとさいます。」

と植久が洒落に言つたのを、粕壁は眞に承けて、

「ぢや亦外妾だね。」と苦い顔をした。

それから二三日して、讓は役所から退いて來て、座敷に入ると、垣隣に人聲が聞える。それは女の聲で、女も女も別品らしい仇な聲である。

此時粕壁讓の心は悸々た。何故に悸々たのかは自身も識らぬ、然し確に悸々た。所へ宿の女房が洗濯物を持って入つて來て、

「旦那、いよく引越して参りましたよ。」

と事ありげに注進されて、まだ心の悸々てゐる讓は、有繫に何と無く面羞かつたが、速に氣を取直して、

「あゝ來たかね。」と冷淡に應けても、女房は勝に乗るといふ勢で、

「すばらしいもんでございますよ。まだ若いね、温雅な、そんなに好い女でございます。」

打遣つて措くと、まだ一言立てさうな氣色を見て、

「あゝ然うか、うむ然か。」と氣の無い、不愛想の返事をするので、女房も今は張合が抜けて、悄々と出て行く。

何時でも女子の噂をすると、苦々しい顔をするのが粕壁讓の病である。彼は女子に嫌はれるとも、女子を嫌ふといふ方ではない。然あらば、女子其物は所好だけれども、影の如き噂は嫌ひだといふのである歎。それでは、人情本を愛讀する心意氣が解らぬ、女子を見ても振向いたことが會て無いといふ了簡が、なほ解らぬ。

隣の女

隣の女

さては實物にせよ、噂にせよ、女子といふものに就ては、總て意地が奇麗のやうに、人前だけを粧つるのかと想へば、女房が立つた迹で、こつそり庭へ出て垣間見をしようでもない。矢張常の如く、落着いて衣類の始末をして、火鉢の前に悠然と坐つて、茶を煎れて、多時喫してゐる。

隣の女の聲は人を弄殺かの如く、折々微に聞えると、讓は聴耳を聳てる。聲がしなくなると、首を傾けて考へこむ。

平生は茶を飲むでしまふと、例の讀書を始めるか、尺八を持出すのであるが、今日に限つて讀みも吹きもしない。机に凭れて何か類りに案じてゐたが、其間に日は暮れて、楓の葉越に宵月の影が見え初めると、殘蛩七艸の露に啣すいて、夜涼水の如く骨に入る。まだ燈も點さずに、闇がりの座敷の隅に茫然して、蚊に食はれてゐた柏壁讓も、すゞろに物の悲さに堪へかねたか、管を携へて、のこく様先に出懸けて、仰視れば天の原、銀河横はる處隣の二階の簾に、ほのぐと夕顔の繪の岐阜提灯を點して、客でもあるやうな氣勢である。

一寸見向いたばかりで、讓は管を取直して、閑に歌口を濕すかとおもふと、はや「リチリロリロツレツロリ

○「と、「虫の音」の曲を吹始める。

二階には相對のお樂筋と見える小宴の始まつたところで、床柱に靠れて立膝をしながら、麥酒の玻璃盆を手にして、玉山未だ頼れざる好男子は、年紀三十六七と見える。朽木形の紺染の浴衣に白緋緋の巻帯をしてゐるのは、豪勢意氣であるが、いくら意氣でも寒いと見えて、二つばかり色氣の無い噓をしたので、女は慌てゝ今手を鳴らしたのは、お風召すなど、羽織でも取寄せるのであらう。

女はばつとした色氣の中微塵の小紋の羽織で、男と對の浴衣を着てゐる。上品な天神に金足の五分珠といふのを挿して、櫛は白檀蒔繪と見える。

十九か廿歳、越えてゐるか知れぬが、まづ十九で通る。肌理はちと疎いが、色のくつきり白、細面の凜とした、御殿風とも謂つべき相貌である。

眼は口ほどに物を言ひとしてゐるが、此女の眼といふものは恐らく口よりも物を言ふ。特に横眼づかひが千両で、嬉しい時、怨めしい時、悲しい時、情ない時、此流盼の秋波一轉が、言語でいふ半分餘の意を通ずるので、それに口元、是が憎いほど可愛らしい。

隣の女

隣の女

男も此女と並べて、見劣らぬ容貌を持てゐる。もし向島の土手で始めて會つたとしたら、女も扇を取落して、もしお嬢様といふのが木の頭で、舞臺が廻らうといふのである。

抑此男は何者であるか。將又此女の素生も知らまほしいけれど、今日引越して来たばかりであるから、近所に誰知るものもない。けれども様子が正當の夫婦では無いらしい。外妻か、まづ其邊であらう。何の彼のと今更後で戸籍調も野暮の至りであるから、追て詮議のある兩人、今宵のところは睦ましく、對座の模様だけを御覽に入れる。

「なか／＼好い處だが、どうも此蚊には恐れる。」

と男は肩や膝をびたく／＼拵くと、女は側から煽きながら、

「それでも人目よりは餘程ようございますよ。」

一句奇聲、人を驚かす。

「でも人目はこんなに悪痒くはないぜ。」

之に應じて女も何か言はむとする時、唳々として尺八の音が耳近く起る。

隣の女

二人は思はず襟を正し、危坐して眼と眼を見合はせたばかりで、霎時は無言、吃驚したかの如く、感心したかの如く。

頓て男は夢の覺めたやうな顔をして、

「お小夜、奈何だ。」と女の方を向く。

お小夜は酔へるが如くになつて、耳を傾けてゐたが、聲を懸けられて、やう／＼我に復つて、

「巧いのね。素人じゃありませんよ。感心！彼處が。」

と未だ夢中である。

「上手なものだ。」と男は／＼と一盃飲干して、

「おいお酌。」と小聲でいつたのが、お小夜の耳へは入らなかつたと見えて、一向平氣で聞惚れてゐる。

「どうだらう！餘程淫亂だ。」

と嘲ける如く呟くと。淫亂だといふのだけが聞えたか、振り向いて、

「貴下、何が淫亂ですつて？」

隣の女

「聞いたか。」と男は笑ふ。

「聞えません。どうせ私は淫亂。」と怫然とする。

「淫亂のお酌といふのを願はうか。」と玻璃盃を出すと、お小夜は矢庭に引手繰つて、

「ちつとは淫亂にも飲まして下さいなね。」

「いぢくするなよ。誰も飲ませないとは謂はない。それよりは我が酌をしてくれといふのに、尺八に聞取れておて、鼻涕もしつかけないから、淫亂だといつたのだ。」

「それは私は尺八は所好ですわ。所好なら所好とおつしやいな、外聞の悪い、淫亂だなんぞつて。」

「所好も淫亂も親子の間だ。」

「でも真箇に巧いのね。」

「それ見たことか、矢張……。」

「あゝもう澤山。」

男は肱枕をしてごろりと寝轉び、お小夜の顔を故と凝然と視て、

「どうも險難だよ、真隣にあゝいふ藝人が居ちやあ。氣が揉めるぜ。」

「又あんな言を仰しやるよ、お株で。」
と彼得意の秋波を送る。

「お株とは甚く見下げたね。甚助といはないばかりだ。」

「だつて貴下、私が尺八が好きだから賞めたばかりぢやありませんか。それなのに、やれ險難だの、氣がめるのつて。」

「宛然花時分の渡舟のやうか。」

といつて、男は獨り面白さうに笑ふ。女は怫然とした顔で、

「いつでも人に誑つちや、笑つてらつしやるよ。私は本當にしますよ。」

「断るには及ばないよ、本當なもの。」

「貴下の本當は嘘ですよ。」

「ち前の嘘は本當か。」

隣の女

「知りませんよ、もう。」

「それは知つてるといふ事だね。」

打物業では敵はじと、といふ見得で、お小夜は衝と立つて撲ちに行くと、男は起上らうとして、床柱で頭こつり。あ痛と押へると、女は吃驚して、今はや恨も忘れて頼りに介抱する。

「貴下、どうかなさりはしませんか。」

と心配さうに男の顔を覗きこむ。

「あいたかつたと眼に涙だ。尺八のお陰で甚い目に遭つた。」

「また貴下は直に尺八々々とおつしやるよ。」

「お前だつて尺八々々といふぢやないか。あれ、無上に吹きやがる。彼奴も同じく淫亂と見ゆる。あゝ吹立てられちや閉口だ。ちよつ噴ましい。好加減に息めればいゝ。」

お小夜へ調戯半分真面目になつて謂ふと、

「可愛さうに。貴下は一體なぜ然う無慈悲だらう。折角一生懸命になつて吹いてゐるものを、息めればいゝ

の、噴ましいのツて。あまり實が無さ過ぎるぢやありませんか。」

と男の膝をぐつと撞く。男は冷然とお小夜を顧盼て、

「否に尺八へ義理を立てるぢやないか。異いぜ。」

と秋波一轉。この秋波はお小夜のやうに効力はない。けれども或一種の意味を十分に含むで、口説の端緒を引出さむとする。

「ぢやあ、もう尺八の事は申しますまい。」

と故とらしく口を噤むで見せる、少し體を彼方へ捻向けて。男はくすく笑出して、拗てゐるお小夜の手を執つて、

「どうだ、尺八。はゞゞゞ尺八といふ名は珍らしい。おい尺ちゃん、一杯申上げようか。しやあちゃんといふと、何だか鐵面皮のしやあのやうだから、尺ちゃんといかう。尺ちゃん！此奴も悪い。早口に言ふと、拗くちやと聞える。可愛さうに、これでも拗くちやには未だ間があるのだ。」

堪らなくなつてお小夜も噴出しながら、男の背をびっしやり。

隣の女

「貴下は眞箇に可笑いよ。一寸見ると馬鹿に様子が好つて、附合つて見ると、格に無い毒口を聞くかと思ふと、其中に仇氣無い冗談をいつて。」

「一處になつて見ると、邪慳の様で心が鈍いか。」

「まあ左様ね。」と濟まして言ふ。

「大概にしておけ。」と突飛ばせば、

「それが邪慳だといふのでさあね。」

「はははは心は鈍いよ。」

此時尺八の音がはつたり息む。

(五)

さては粕壁讓はもう寝るのを見える。心細くも五六の蚊帳に入つて。此の樓上に似たる夢を結びむとするか。可憐、可憐、千態萬狀の世の中、好いた同士、隣家に樂む男があれば、直ぐ其隣に唯一人つまらなく寐る人もある。嗚呼思へば福福は垣一重である。

不幸薄命の人も、世間が一般に不幸薄命であつたなら、味氣無い身を啣つことはあるまい。粕壁讓と雖も、到底出来ない事だと諦めてはゐるものゝ、もし此樓上の光景を親しく目撃したならば、おのれ、やれと堪忍はなるまいけれど、幸ひに、その羨ましくも忌はしい現象を見なかつた。けれども、大方そんな事であらうとは、噂に聞いた美形、客來の様子、二階の燈紅、話聲等に據て、はたアと勘付いて見ると、餘り心地は快くない。

其に就けても此面がと腹が立つ。同じ人間と生まれながら、えと、つまらないくく。こんな事なら、いつそ一氣に死むだが勝だまで思迫る。

それも道理である、氣の毒であるが、假初の吹奏も、妙音美人の心を動かして、爲に一場の口説を惹起したことを思へば、藝ながらも適れ難福、一寸は男前で思着かれて、餘り無藝過ぎて愛想を盡される色男も往々あるのに、藝で惚れられるとは、溢い一恐入たものである。

粕壁讓がもし之を聞いたなら、其胸中は如何ばかりならむ。彼は歎極まって泣くであらうか、氣が狂つて眠るであらうか、件といつて悶絶するであらうか。恐らくは泣き且狂して、遂に悶絶するであらう。

隣の女

隣りの女

それから甍へつて、そんな事實なら郵便局の方は辭職して虚無僧にならう、などといふ不丁簡を出さうも知れぬ。虚無僧も往時のは、一寸しても錦の袋入の戒刀といふのを手扱むで、御無用といふと腹を立てたり。袖手が掛かると右左へ投げたり。大相景氣の好つたものであつたが、御存じか知らぬが、當今のと來たら、いや、はや見る影は無い。虚無僧よりは爲換掛の事！右様の處があるなら、知らざるの優れるに如かずである。

さるほどに讓は煩惱やら妄想やらで、夜の更けるまで眠に就かなかつたかして、明くる朝例刻に起きたことは起きたが、甚く床離が潔くなかつた。それでも時刻には出勤して、晝かも執務に澁滞無く、少しばかり眠むたい顔で退いて來たが、それで、眠もしない。姑くは現で考事をしておいたが、何と思つたか、急に尺八を取出して、机の前で吹始める。

思はしく音が消えないと見えて、幾度も出直して、やう十分許も吹いたかと想ふと、手を止めて、唸るやうな大息を吐きながら、遂に管を釋く。

讓が尺八を手にしたら、十分や二十分で措くのではない。餘程此日は出來が悪いのを、無理にも妙處を吹

かうと散々に悶へたが、意の如くならなかつたものと見える。

管を袋と一所に机の下へ入れて、手拭と石鹼を掴むで、ぶいと出懸ける。

木樂子は磨いても黒いけれども、磨かざるよりは何分か美しくなつて、やがて歸つて來ると、鏡を出して髪を撫付けて、それから茶を飲むで、大いに靜神爽になつたといふやうな鹽梅で、また尺八を手にする。今度は出來が好かつたけれど、堪らぬほど睡氣侵して來たので、さすがの好者も其處に睡りこける。

ふと眼が覺めると、日脚はいつの間にか西に傾いて、何處寺の鐘がボーンと、尾を曳くやうに長く響くと、薄寒い風が心細く吹いて來る。

讓は眼の覺めたやうな、覺めないやうな、氣懶い、異な氣持で、無上に生吠ばかりして、何を見るときも無く、何處かを凝然と視ながら、起回つたまゝ惘然してゐる所へ、へい御飯と膳を出されて見ると、なるほど腹も空いたやうな氣になる。そこで急に顔を洗つて、箸を取ると、やうく人心が附いたので、此調子なら一番吹けるだらうと、尺八おつ取り、しやに構へて、音を入れて見ると、果せる哉、寥亮として梁の塵も爲に動き、木の葉も感じてか、はらりはらりと落ちる。「由の音」の曲は讓も好む所で、然も未だ幾分か稽古

隣の女

中と云のであるから、今夜も其を吹始める。
管が鳴出すと、今まで寂閑としてゐた隣家に、連に女の聲が聞えた、確に例物が嬌語を洩すのである。
譲はさうと氣は着いたけれど、格別意にも介めずに吹いてゐたが、何といふ氣無しに、ひよいと上眼づかひ
をすると、隣の二階の欄に女の姿が見える。

電光石火「姿のす」の字ぐらゐが僅に網膜に映じたかと思ふ間に、譲は慌てゝ座敷へ逃込むだ、汀の丁斑
魚が登音を聞着けたかの如く。管は其なりにして、ほつと呼吸を吐いたが、心臓は激しく鼓動して、宛然早
鐘を撞くやうである。

欄に倚る女の姿！それは誰、噂に聞いた美形歟。それとも下女歟、老女さん歟、譲はその何者なるやを辨じ
ない。けれども男ではない、女だといふだけは確めたのである。では若い女歟。そこまでは氣だ着かなかつ
たけれども、若い、美しい女らしがつたやうに、何と無く感じた。若い、美しい女として見れば、隣の主、即
ち噂に聞及ぶ美形である。

して見れば、美形が二階にゐて、何か見てもたのである。何か見てもたのなれば可けれど、もしも自分の方
をも次手ながら見はせぬか。見られたら大變、實に、甚だ、大いに窮る。よもや見はしまい、何も見る用は
無いのだから、よしむば見たとする、見たではない、見やうと企てたと爲る、そこで自分が見られたらうか。
彼處に此いふ風で、此方向になつて吹いてゐたのだから、樓上から覗くと、後面から斜に、耳から少し顔へ
懸て、見えれば見えるのである。

然し、二階からでは、庇の陰になるから、到底腰から上の見える氣遣は無い、臂から裾の方が見えるばかり
である、それに違ひ無い。

まづ如此に考へながら、尺八は其方退にして、座敷の真中に打坐わつて、隣の二階と此方の庇との勾配及び
庇と自分の坐た位置との角度などを、目分量で忖りに測量してゐたが、分明には見えない理だけれど、隨
分見える、様に出て眞正面に坐つてゐたら、無論見える。けれど鐵は背面で椽の内におたのであるから、
幸ひに見えないと、數理で割出してから、やうく安堵の胸を撫でる。

安堵したところで再び吹始めたが、二階で見てもはせぬかと想ふと、何と無く氣が侵して、呼吸が震る、指遣
ひが硬る。氣骨ばかり折れて、却つて不斷ほどには行かぬ。

隣の女

来が聴いておればとて、上氣して狼狽るやうな、そんな初心の譲ではないのであるが、今日に限つて稍憚りして、場打のしたやうな態である。

それでも内心は大分嬉しいので、一番感動させてくれやうといふ、恐ろしい了簡を出して、合戦ならば爰許死物狂、大童の血眼になつて、吹いたりや吹いたり。

これほど一生懸命にやつて、設聴ておられなかつたら、こんな馬鹿々々しい事はないと思ひながら、多分聴いておるだらうの念無きにしてもあらずで、吹きながら徐々と居去出して、此方の顔の見えぬやうに用心して、庇の陰から偷視すると、果然、女の姿!!但し腰から下。譲はぎつくり、胸がどきどき。さあ彌よ死物狂の一心不亂で、後生大事に管に噓付ておる具合は、桑原々と唱へないばかりである。

曲の関らぬ間に日はどつぷりと暮れた。もう昏いから、顔を合せたところが知れまいと、吹きく居去出して、また覗いて見ると、南無三三三昏さは昏いけれども、未だ仄に見えなければならぬ白地の浴衣が見えない。はつと思つて、ぐつと乗出した、而して見たが全く見えない。見えないのでは無くて在ないのである。譲は思はず尺八を捨て、轟然と立上つたかと思つて、ひよるく、と横欄へ出て、睨もせず三階を見込

むでおたが、いくら見たからとて、形の無いものゝ見えやう理が無いのに、未練らしく行むで、唯是掌中の玉を失ひたる心の中、途方に暮れたやうな顔をしておた。

落膽して坐敷へ入つて見たが、一向つまらないので、また縁側へ出て、談合するかの如く膝を抱いて考へた。取逃したのは残念だけれども、あの女は管を聞きに彼處に出ておたのであるか。或は何といふ事は無しに二階へ昇つて、田圃でも眺ておたのであるか。管か、田圃か。田圃なら何の面白くも無い。もし管なら有難い。多分は管であらうと思ふけれど、田圃かも知れぬ。

我は固より醜貌だ、けれども尺八は可也聴れると、自分も信じておれば、人も許しておるくらおだから、我の顔を女子が恍惚と視るといふ望は無いが、管なら随分嬉しがつて聴くものはあらう。

面白い、管か、田圃か、一つ試験して見やう。もし明日吹いて、また彼女が二階へ昇つたら、我の方が及第。面白い、明日が関ヶ原だ!

(六)

「旦那、どうなすつた。」

と闇黒から聲を懸けて、のそく入つて来たのが植久。譲は吃驚して、ひよい

隣の女

と顔を擧げると、

「どうなすつた、未だ燈火もおつけなさらしないで、甚く考へておらつしやるぢやございせんか。」
と挫乎と坐つて、肩を聳かして讓の顔を覗き込むと、樽柿臭い息がブンとする。

「どうも爲ないけれど。」 と讓は情けた聲を出して、片手でへろりと顔を撫でる。

「どうも爲さらない事があるもんですか。餘程ふさぎにお月様のやうですぜ。」

「そんな事があるものか。」

「ぢや食もたれですか、色氣の無い。時に御覽なすつたか、隣の美形を。」

女の噂をするに粕壁は否がる。およそ男と生れて、女の嫌ひといふ理窟は無いのには、否がるといふのは可笑い。何でも此人は好色を内証としてゐるに違ひ無いから、いつか泥を吐してやらう、といふのが植久の肚で否がるのを承知して、面白半分故に隣の噂をしかけたのである。然るに粕壁は、例の如く苦り切つて、

「隣のが如何したのだい。」 と反問すると、植久は冷笑をして、

「如何したの、如此したのつて、旦那、お頼み申しますぜ。」

いつよりも語氣の暴く且馴々しいのは、全く御酒の加減である。

「二階に出ておましたらう、茶屋場のお軽といふ鹽梅で。驚きましたね、凄い物だ。御覽なすつたらう。」
と肩から先へじりくると詰寄せる。讓は自若として、

「うむ、隣の女かい。私は知らん。」

「知らん、貴下、知らんで済みますか。全體何の爲に二階へ出ておたと思召す。」

「そんな事を私が知るものか。」

「まあ考へて御覽なさい。ねえ、幽霊の初物ぢや無し、日の暮に茫然突立てる奴はありやしません。どうぢや有ませんか、物の道理が。」

「如何だか。」 と讓は素氣無く突刺さる。それでも植久は一向無頓着。

「ぢやまあ如何だか」で買けましよう。口開だ。ねえ、私がかう申したつて、何も油を懸けるわけぢやありませんけれど、旦那、一升お奢んなすつたつて可ございませぬ。」
「何だか些とも分らん。」

隣の女

隣 の 女

「へ、御冗談者ですよ。この罪作め！」

と委細構はず讓の太股を抓ると、不意を吃つたのと痛いので、讓は躍起つて絶叫する。

「こりや御免下さい。その代りお詫として一升は帳消とさせよう。お痛うございましたか。」

「甚いね、人を抓つておいて、後から痛いかなんて。話があるならさつさとお為な。」

「へい短夜のことですから可成簡単に辯じませう。實はね、私が何氣無しに、先刻裏の窓から菫蕪玉を投
びると、」

「又そんな馬鹿な言を。」

「こりや龍想。でも裏の窓からといふと、どうしても語呂が菫蕪玉と来ないと……。」

「もう可いから。」と鬱陶しそうに顔を曇める。

「ぢや菫蕪玉はよして、覗いて見ますとね、欄に掴まつて、貴下の尺八に聞惚れてるぢやありませんか。」

此一言に、恠へ恠へし讓も取外して、はつと顔が赧くなると、たらくと背に汗を流したが、然あらぬ體で、
「馬鹿な。」と落着いてゐる。

「まあお聞きなさい。私も始めは、さうぢや無と想つたけれど、餘り美女だから頻りに視てゐる間に、こ
こが身上でさ、顔を彼地へ遣つたり、此地へ遣つたり、腰を屈めたりね、色々氣を揉むで覗いてる様子が
變さね。はて何を爲てゐるんだらうと、根が苦勞性だから此方も心配して、よくよく見ると、貴下が切りに
吹いておらしやいましたらう。それを覗かうといふので……。」

「馬鹿な。」と彼方を向いたが、今度の「馬鹿な」は少しばかり震聲である。

誰様がお前の様子に惚れて、是非といつてゐるよ等では、それが孔夫子、釋尊の言と雖も、讓は決して頷
くまい。其と謂ふのは、有繋に容貌では自惚が無いからである。けれども尺八！二箇月の俸給に値する、

「虫の音」といふ名管まで秘藏するほどの意氣込から考へても、尺八は好加減の天狗であらう。此處に乗られ
る計りでも随分徹へるのに、もしやと思ふ下地のある所へ、植久なるものが平生は餘りかういふ冗談を謂は
ぬ男である。それが設ひ酒の上とはいひながら、萬更根の無いでも無さうな話振。はて此奴ほど、爰に
始めて粕壁讓の玉の緒は動いたのである。

隣 の 女

隣の女

然ればと謂て、謹慎の深い男であるから、圖に乗つて「ごぢや一升奢らう」などと、脆く内兜は見せない。突けるなら何處からでも突いて来いといふ氣色で、一向取合はないといふものだから、植久は躍起となつて有る事、無い事、嬉がらせの百萬陀羅を陳べると、これには讓も目が眩むで「雖有い」と「尋ない」が腹の中を駈廻る其苦しき。むか〜と何だか吭まで込上げて来るのを鵜嚙にして、氣強くも最一辛抱した。是に於て植久も根負をして、全く話せぬと、愛想竭しの袂を拂つて座を立つた。

關ヶ原！明日の關ヶ原！戦ずして天下は既に此方の物だ。扱こそ推量はず、二階に見えた女の姿は、面白くも無い田圃の景色を眺めるのでは無くて、我の管を聴きに出たのである。眞偽の程は判ぬけれど、久五郎の言ふ所に據れば、隣の女の二階に出てゐたのは、單管を聴かうばかりでは無い、其實我を見やうといふ精神らしい。と、ま謂ふのだけれど、其は見た事で無いから一圖に信じられはせぬ。然し假二階に出てゐたのを、自分の管を聴かむが爲にとすれば、大いに慮へなければならぬ、唯音を聴くばかりならば、何も二階へ昇ることは無い。垣一重であるから、樓下に在て十分に聞える理である。それなのに二階へ昇る、として見れば久五郎の謂ふ所も一理ある。

兎も角も最一度明日試して見るに如くは無い。此方の思はく通り、明日また二階へ昇つたら、いよ〜其に相違なし、聴き且視むといふ精神なのである。

それほどにして聴いてくれるとは實に尋ない。且視むといふの一段に到つては、殆ど冥加に餘つて感謝す可き言詰に苦しむ。と謂て、容貌が好からといふので見たがるのでは無い、無論。また見られるやうな容貌でも無い、なほ無論。實際見られては却て迷惑するのであるから、一目なりとも見られることは萬々望まぬ。けれども管を聴て、あ〜いふ音を出すのは、どんな人だらう是非！見たいものだ、とまでに感じられたかと思ふと、潜然として涙の下るを覺えない。

知らぬこととて讓は今日まで天を怨むでゐた。我に何咎あつて、こんな醜貌に生みつけて、耻辱を曝しに世中に出してくれたのかと。實に天を怨むだが、今となつて見れば、濟ない、天に何の怨が有る！此やうに讓は醜貌に生まれた、下女、子守、火屋や玻璃燈の破損買にまで他見をされるやうな、見る影も無い姿に生れたけれど、櫻は花で、栗は實で、孔雀は羽で、鶯は聲、萬物各其稟るところを異にして、彼に長あれば此に短がある、そこで天理の妙だ。讓も顔が好くない代りに、天之に與ふるに尺八の笑音を以てしたのである。

隣の女

隣りの女

私の姿には他見をする下賤の女はあるけれど、此管に心を動かさぬ美人は無い。惟へば凡慮の淺きを以て測り難きは天の深意である。人は多く眼で惚れられる、我は獨り耳で愛される。眼と耳との差違はあるけれども、眷戀されるのは一つである、女に好かれる味に二つは無い。

噫、知らなんだく、昨日まで眼で嫌ひぬかれた我といふものは、今日から耳で好かれる粕壁讓ならむとは！と仰いで天を拜し、俯して尺八を取擧げ、

「三十圓ぢや廉なものだ。」

(七)

關ヶ原いよく今日になると、朝からの胸騒ぎはよく、うはく、坐ても立ててもおられない。貧乏人が夢に千圓札を拾つて、夢ならば覺めるな、と切りに氣の揉める、快やうな、不快やうな、一種不可思議の心地がする。こんな感情を懐いたことは、粕壁讓物心づいて以來、未だ曾て有らざるところで、恐らくは又最終而最初であらう。

大雪脚を没しても、暴風木を抜いても、強雨盆を覆しても、其外あらゆる天變地異の朝と雖も、謹勉な

る粕壁讓は、あゝ出勤するのは否だなあ、と色に出たことが無ければ、心に考へたことも無い。それほど男が今朝ばかりは、後髪でも曳かれるやうに、出勤の装束をしたまゝで、座敷中をぐるぐる廻りながら獨語をいつてゐる。

「今まで一度も怠けたことは無いのだから、一遍ぐらゐは可からう。月に一度屹度缺動する奴さへあるのだ。一寸一枚所勞届を出せば、それで済むのだから。然、休むのも可い、けれど今まで休まないのだからなあ。そこも有る。」

と先づ火鉢の前に坐わる。そこで袂から鹿末なる巻蓑入を出しかけて、思案蓑を一本。ぶかりくと烟を吹いて、有間考へてゐたが、何と思つたか、早朝から尺八の調と洒落こむだ。今に出懸けるだらうと、靴を正して待てゐた女房は、時ならぬに管の音がするので、驚いて飛で来る。見ると、讓は泰然と本箱に倚懸かつて、高々と帽子を戴き、袴を着いて立膝をして、庭に向つて餘念無く吹いてゐる。

その優長の鹽梅、氣樂さ加減、壇の浦の御座船か、樓門の孔明か。前に敵を控へてゐながら、惡落着に落着て、今日は日曜のはずだが、といはぬばかりに澄ましてゐる。

隣の女

隣の水

此體に女房は打魂消た。眼を圓くしたばかりで、頼に語も出ないのを好幸ひに、讓は素知らぬ顔で吹いてゐる。

「貴下さま。」とやうく聲を懸けたが、讓はなほ寂寞として眼を閉ぢ、指の類りに動くに随ひて、管はすゝろに妙音を響かしてゐる。

「貴下、もう時間がございませぬよ。どうなすつたのですねえ。」

と女房は諷する如く、訝る如く、詰るが如く、促がす如く、憤つたいかの如く、トシと一つ足拍子を踏むで、

「今日はお役所は？」と喚くと、其の聲の調子外の爲に。律呂も亂れたのか、管の音ははたと歇む、途端に讓は不承々々に顔を擧げて、

「どう爲やうかと思つて。」と今度は弱い音を吹く。

「何處か御不快のぞございますか。」と訊ねると首を掉る。

女房は更に合點が行かぬ。

「何以いらつしやらないのぞございませぬ。」

「實は今考へてゐるのだ。」

「それぢや何ぞ御用でもお有なごとのぞございませぬか。」

讓は歌口から管の中を覗きながら、また首を掉る。

「御不快も無し、御用も無し、それでお役所をお休み遊ばせようといふのぞございませぬか。」

讓は返答に窮つて、帽子を取たり、冠つたり、冠つたり、取たりして、少時考へた末に、

「行かう！」と聲を懸けて、やをら立上る。女房は嬉しそうに、

「あゝ然うなさいませぬ。これまで御精をお出しなすつて、今更お休みなごるのは、百日の鐵砲尾一つですから。」

と間違つた言をいひながら、子細らしい顔をして前に立つ。讓は後からのこゝろ跟いて入口まで來ると、植

久も送りに出て、「今日は大層御優悠ぢやございませぬか。」

といふ挨拶。讓も少しばかり極の悪い思で、

「つい晩くなつて……。」

隣の水

だけは聞えたが、以下口の内にて不明。倉皇格子を開けて、逃げるやうにして行く。

殊勝にも粕壁讓は出勤した。は可かつたが、取急いで魂魄を家へ忘れて、出かけたのは脱殻である。

蟬の脱殻でも耳爛の薬になれば、蛇の脱殻でも肌理を密にするから、苟も萬物の靈たる人間、その脱殻が何

かの用に立たざらむ乎。月給十六圓の一日分の役を勤めて、のこく歸つて来たのは、午後の彼此四時。

坐敷へ入る、衣更へる、とつばくさと遣つて、やがて恭しく取擧げたのが(虫の音)の名管である。づくと體

を極めて、いつもの柱を背にして吹かむとしたが、待て少焉、そろりと椽へ這出して、忍びやかに隣の二階

の様子を候ふと、軒端に高く葎を巻いて、腰硝子の障子がちゃんと締めてある。樓下は同じく留守かと

想はれるほど森閑としてゐる。

在るのか、在らないのか、消息は少しも知れぬ。もしや湯へでも行たのか。それとも目的と何處ぞへ出掛けた

のか。在るにしては餘り閑寂過ぎる、と讓は大分氣を揉む。

其間に聲がしたので、占めたと耳を澄ますと、判然とは分らぬが、どうも例のく聲では無いらしい。疑ふら

くは下女の聲。下女が獨語をいふのに、あんなに聲を立てることもあるまい。誰かと話をしてゐるとすれ

ば、二人暮の家だから相手は彼に極つてゐる、それとも八百屋でも来たのか知らぬ。

下女でも可い、八百屋でも可いとして、左も右も一つ探を入れて見るとしやうと、瀟踏の曲(そんなのは有

るまいが)といふのを一節吹いたけれども、應じない。

「あく全く在らないのだ、在さへすれば出て来ない理は無い。それとも寝てゐるかなあ。寝てゐたところ

が、もし久五郎が言ふ通りの事實なら、明日隣で尺八の音がしたら、すぐ起しておくれよ、とか何とか、下

女に吩咐しておきさうなものだ。それを吩咐しておかないやうなら、脈は無いのだ。久五郎め、彼奴ちやら

つばこを謂つて、失敬な奴だ。」

と尺八を願の支柱にして、ぐんにやり考へてゐると、青天の霹靂! テンくと第三絃を弾く音が、汗は

わたつて濡いたので、荒肝を抜かれた讓の願は支柱を外れて、あはや疊に打附つて、前齒で舌を咬まむ

としたが、次いで轉軫を巻く音がキリ／＼と、鼓膜を貫くばかり。

勇士が響の音に目を覺ましたかの如く、讓の體は忽ちしやつきり張つて、勢猛に首を回らして隣を覗むだ。

覗むだかと思ふと直に外背が下つて、眼中の容體が異く他愛無くなつて、顔の筋が弛むで来る。

隣の女

其間も調子を合はす三味線の音は存りに響く、キリ／＼とトテン／＼。
 「なるほど在たのだ。」と讓は呆れた顔で呟く。

「うむ、在たのだ。」と餘り呆れたので、最一度呟く。

「三味線を弾くのか知らぬ。何だらう？ 清元か、常磐津か、長唄か。こりやあ面白い。面白いは可が、先刻から在たのだな。在たのに二階へ出て来ない所を見ると、脈は無い！ さうすると昨夜のは全く田圃だ。さう、もう落第だ／＼。こんな馬鹿々々しい事があるものかい!!」

と尺八を聲へ敲きつけて、ぐたりと轉覆つて、長大息して、「いゝ馬鹿を見た!」

讓は仰向に轉覆つたまま、ぱつちり眼を開いて、への字状に兩膝を立てて骨乏顛動をしてゐる。

今に三味線を弾出すかき、待つ心も無く待てゐたが、思はせむりに調子を合せたばかりで、一向取掛らぬ。讓はむ／＼と起上つたが、隣の方を流盼にかけて、

「何だ、調子を合せたばかりで弾かないのか。弾かない／＼なら、始から調子なんぞを合はせむけりや可い。其方が弾かなけりや、此方で吹いてやらう。」

隣の女

今は聴かせやうといふ色氣より、寧ろ吹いて／＼吹倒してやらうといふ自憤の氣味で、「雪」といふ意氣な短い曲を吹くと、曲の関る頃に、またトテン／＼と稍低く響く。

「えゝ何の事だ。またトテン／＼か。トテン／＼より外には知らないと見える。そんな女に我の管が解るものか。フ、飛だ買冠をした。それぢや骨を折つて吹くことは無い、お喧騒からうけれど、又ちと「虫の音」のお稽古でも爲やうか。」

と例の曲を吹出すと、トテン／＼より外には鳴るまいと侮つた隣の三味線が、遽に揚音併せて聞えると思ふと、不思議！ 合せてゐるのである。

隣の三味線は柏壁讓の管と合せてゐるのである!

その三味線の主を誰だと思ふ？ 隣の主婦。その主婦を何だと思ふ？ 恐らくは外妾。その外妾は若い美女である。その美女が三味線を弾いて、讓の尺八と合せてゐるのである。

讓の心臓は實に破裂した。くら／＼と眼が眩むで、一時は全く知覺を失つたが、その中でも管は見事に吹澄ましてゐた。何が何やら一切夢中で、「草花々たる阿倍野原に虫の音ばかりや残らん／＼。」

と納まると、譲はやうやく正氣づいて、天狗に戻された人のやうに、唯まよろくと四邊を見廻して、一體我は奈何したのだらうと。心の中に我と我身を疑つてゐるやうに見えた。暫くは茫然としてゐたが、體て血が通ひ始めて、眞人間になつたといふ容體で、隣の方を名殘惜さうに眺めてゐたが、良有つて、
「驚いたなあ。」と寢惚聲で先づ呟く。

「恐入つた。よもやと想つてゐたのに、合奏したのは驚いた。それが尋常の腕でないから驚いた。上手なものだ。唯上手に弾くだけなら格別驚くことも無いけれど、さつさと合奏したのには恐入つた。元來この「虫の音」といふ奴は、初心の識るべきものでは無いのだ。餘程の心得が無ければ……どうも凡人ぢや無いな。外羨らしいと謂ふが、舊は藝者か知らぬ。藝者にしちや珍しい嗜だ、まづ無いな。品の好い女だといふから、或ひは良家の娘が零落して、妾に出たといふやうな事かも知れない。何にしろ、此方で吹いてゐるのを、突如に合奏して澄してゐるのは、惜いほど凄腕だよ。どんな女か見てやりたいものだ。」

(八)

其聲音が済んでゐるやうが、おまゐりが、其腕が凄腕か知らぬが、何であらうが、外羨であらうが、無からうが、舊

は藝者であらうが、旗下の娘であらうが、そんな事に頓着は無いのである。唯此方の尺八に合せてくれたといふ其一事で、柏壁譲は見事に極樂往生を遂げた。

設今日も彼が二階へ出たならば、それこそ自分の思つた通り、また久五郎も睨むだ如く、隣のは全く自分に思召がある、では無い、自分の尺八に思召があるのである。どうぞ今日も出てくれまするやうにと、昨夜から今日の四時まで、忘れる間も無く其のみ念じてゐたのに、吹いても、吹いても、欄に人影は見えなかつた。此時の譲の心地は抑や抑ごんなであつたらう。實に今月の俸給と引換でも可から、欄に舞れて聞取れてゐる妾が、唯一目見たかつたくらゐである。

失望の極は泣聲になつて、「いと馬鹿を見た。」と己を辱めて、之に懲りても返すく自惚は出さまいものだ、と迄は未だ後悔する間も無いのに、意氣な音調で、心有りげに、三味線を合せるといふ、得も言はれぬ筋になつたから、譲は夢かとはかりに歎んだ、歎極まつて逆上せ、逆上せたので自失してしまつた。

隣は三味線で此方の管に合はせる。考へて見れば格別不思議は無い。先方も所好だのに、此方で善く吹くといふ所から、烏許がましいわけだけれども、一寸洒落に合せる、随分有りさうなことである。先方が女と聞

くほど、嬉しいといふ念よりは、生意氣なといふ感が起りさうなものであるが、退いて最一應考へて見ると、餘り心地の不快ものでは無いらしい。音楽は人心を和むるといふ中にも、外の鳴物と違つて、三味線は特に色氣を含むものであるのに、その又彈者が彈者であるから、連句なら無論表には嫌ふ、たしかに戀になる。それから、垣越に合せるといふのが、此奴風流な戯で、萬更腹も立ない。

人情本の口書では無いが、男と女が合奏をしてゐる状態は、自から靄然と和合の相を表はしてゐる、言を換へれば、何と無く戀を含むのである。

誰にしても木石にあらざる限りは、此局に當つて、ちつとやさつと、神驚き、魂迷はざるものはあるまい。彼は昨日から、隣のは我の尺八に心を悩ましてゐるのでは無かといふ疑念が有り、且つ是非悩むでもらひたいのである。悩むで下されば好いと切望してゐるのである。所へ合せられたのであるから、もう堪らぬ、前後の分別も思案もあらばこそ、騎虎の勢、驚、直に、戀の淵を目懸けて逆筋斗に躍込むだ。讓は管を下に置くと、隣の方を一寸見たが、直に俯いて、にやくと笑つた。

「やつぱり然うだ。どうも然らしい。萬更腹でも無いかな。さうして見ると久五郎が昨日見たといふの本

當なのだらう。艶福！艶福！何だか、かう變な氣になつて來た。あゝ一升奢つてやりたいな。けれども奢ると又何の彼のと謂はれるのが煩し、心祝だから奢つてもやりたし。えゝ、無暗と嬉くなつて來て爲様が無い。どうしたら可からうなあ。

主人の久五郎が内に在たらば、此際啣烟管で黙つて引籠むのであるのか、「旦那、二升ですぜ。」と忽ち飛で來るに相違無い。生憎今朝から神田邊へ仕事に出て未だ歸らぬ。そこで女房が、留主は私の預りといふ顔で、襟を外しながら坐敷の口から覗きこむで、

「旦那、唯今は。」と底意有げに笑ひかけて、一寸小腰を屈めて、額越に讓の顔を見る。

「何が？」と濟まして、心に覺があるのだから、鼻の頭に恐悦が躍つてゐる。

「何がぢやございませぬよ。隣家で好い音調がいたしたぢやございませぬか。」

「さうさ。聞いたかい。」

「お安くないんでございませぬね。」

「何故？」と讓はもつと弄つてもらひたさうに、強ひて訊ねる。

「何故でも何でも可ございますから、何ぞ奢つて下さいまし。もう御膳の支度をいたすのですから。」

「奢れ？奢る事情がありや何でも奢るぞ。唐突に奢れたつて、私はそんな罪を作つた覚は無いから。」

「多度おつしやいまし。隣の三味線と貴下の尺八と……お樂みの癖に。」

と入口に蹴むで、これから大いに談じやうといふ身の構。

「うむ、合奏してゐたといふのか。」

「おたといふのかも無いもんですよ。お安く無いぢやございせんか。」

「お高いことも無いさ、私が合奏したのぢや無し。」

「先方から酔興に合奏したのでせう。」

「ですから奢つて下さいと申すのですよ。縁側にいたしませうか、鶏肉にいたしませうか。」

譲は稍俯いて、頭を撫で、無言である。

「何方にいたしませう、ねえ貴下。」

「それだけの事で奢らせられるのか。」

「それだけの事？」

と女房はわざと眼を圓くして、「まあ怒の無い。さうすりや奢つて下さるのでせうね。」

「あれで奢れといふなら奢るぞ。」

「當然でござあね。」

「當然とは酷い。」

「でも貴下、萬更不快心地はなさいませう。」

「奢らされてから。」

「あれ、さうぢやございせんよ。隣のにござつて持掛けられて。」

「怪しからぬ、持掛けられるなんて。そんな馬鹿なことがあるものか。」

「ぢや餘り好心地はなさいませうか。」

「そりや不快ことば無いぞ。」

「そら御覽じましな。謂はく持掛けられたやうなものでございませあね。」

「そんな馬鹿な事！」

と今度は怒らずに、ちつとばかり極の悪い顔。

「本當に奢つて下さいますか。」
「奢るさ、仕方が無いから。」

「仕方が無いとおつちやるなら、御迷惑なのでしやうからお断り申しませう。」
「いや、奢るよ。」

「そんなら奢つて戴きませう。」
「酷く恩に被せる。」

「被せても可い事情があるのですから。」
と立上つたが、一寸氣を變へて、又戻らば、

「旦那、申しかねました、今月から御座敷料を最少し上げて戴きたいのでございませう。」

食氣の後が直に怒の不意を食らつて讓は吃驚、「何故だ？」と眞顔になるのを見て、女房は底の抜けたやうに笑ひながら、勝手の方へ、とたばた、くくく。

(九)

二階の欄に倚る女の裾だけを瞥と見たばかりでは、讓の自惚は起らなかつたのである。貴下の管に聽惚れて、切りに此方を覗いておましたせ、といふ久五郎の注進ばかりでは、讓の自惚は未だ起らなかつた、斜ならず嬉しかつたには相違無いけれども、今日といふ今日こそ、隣の女は自分の管に氣が在るといふ確證を擧げたのである。

自分の管に氣の在る女！どんな女だらう、美女とは聞てゐるが、そんなに美女だらう、見たいものだといふ念が、火を噴く如く勃發する。

是非どうかして見てやらうと考へたが、見るのは可いけれど、爰に困つたことは、自分の姿は先方に見られたくない。管はなるほど聽かれても、聽かせても、慙かしいことは無いけれど、此男振は我慢にも見せたくない。隣の女の思ひついたのは、管に在りて顔にあらざるであるから、此後ともに管を拙くさへ吹かなければ、それで讓の戀は長く保たれるので、貌が醜いからといつて、其が微塵も藝事に影響することは無い、と謂ふのは表面上の理窟であつて、いかに心の融々となる音色を出してゐても、此顔色では誰も興を覺ましてしまふ。譬へば食物、それが旨いものでも駄椀などに入つておたら、音に外見が不味さうに想はれるのみでは無い。

隣の女

食べて見たところで實際不味。それが一寸器が奇麗であると、さほど旨くない物までが旨く食へる。人情といふものは一體さうしたものである。

今我の管にしても其理だ。管は良い、けれども吹手もこの醜貌であつて見れば、それとは知らず陰で聴いてゐる間は、折角感動したのが、お目に懸つてから急に否にならなければ可いといふ懸念で、譲は隣の顔が見たいに就けて、自分の姿を見られては一大事といふ苦勞を求めた。でも見たい！自分の管に惚れたといふ女、然も其が美人といふのであるから一層見たい。と此方でも此程に懐ふのだから、女の方も、あんなに善く吹くのは、どんな男だらうと、見たがるのも無理ではない。我の見たい程それ程女も見たからう。隣のは寧ろ見せたいくらいおの容色を持てゐるのであるから、見てもらひたからうが、此方は然うで無い。見られたら百年目、例の美味も醜い器の一件であるから、忽ち愛想を竭かされるのは、鏡に懸けて見るが如し。

時鳥ではないが、聲ばかり聞せて姿を見せない所に、趣が在るのだから、此方は何處までも姿を見せない算段をしなければならぬ。すれば譲の管は、いつも初音の心地こそすれで、決して飽かれる氣遣は無い。

と妙くも分別をした。

夜に入つてから主人の久五郎は歸つて来る。早速膳に向ふと、こは何ぞ？ 筭の如く割箸を戴いた鯉鱈の大井が例々しく附いてゐるので、水瓶の中に龍が生いたほど驚いて、

「奈何したのだ、こりや、今日はお前の志の日か。」

と憎たらしく言ふと、女房は莞爾として、

「粕壁様の豊年祝だよ。」

「粕壁様の？ ついで無え事だが、何だ。」

「隣の、ね、あれが今日旦那の尺八に合奏してね、弾いたのさ、そんなに好かつたらう。」

久五郎は愕然した親で、

「ええ、おい、三味線をか。有難え！」

と顔をびつしやり。其手で井の蓋を取つて、

「いよう、流石は豊年祝。時にお燗は未だか。」

隣の女

「ちつと温いけれど。」と女房は鐵瓶から徳利を引揚げる。まづ一杯と、温いのをさゆうと引懸けて、
 「うむ、なるほど、旦那の尺八に隣の三味線、此奴は妙だらう。如何だい、三味線は？」
 「素人ぢや無いね、巧いもんだよ。」

「旦那大喜びだつたらう。」

「色々冷かしたら、始めの内は苦い顔をしておたづけが、とう／＼仕舞には蕩然として。やつぱり女は否ぢやないんだねえ。」と今更感心したやうに言ふ。

「筧棒め、女の嫌ひな奴があるものか。我のやうな方でも悪かねえんだもの。」

「お前様の方ぢや悪く無くつても、女の方で御免を蒙るよ。」

「我に御免を蒙つた女が何處に在る、内ぢやかうして酷く爺むさくしてゐるが、一町と戸外へ出て見る。ハッ、御存じは無からうけれど、寺島村の久様が通るツて、後から陸續跟いて來らぬ。煩くつて、うっかり仕事にも出られやしねえ。」
 「それで此頃情けるのかい。」

「舉足を取るない。寺島村の久様だ、これから些と大事にしや。まご／＼すると、眞箇に亭主冥理に盡さるぜ。」

「おや殿様の所爲か、急に氣が強くなつたよ。」

「氣も強からうよ、御馳走だもの。」

「でも藝の徳だ、恐ろしいものよ。全く旦那の尺八には惚込むのだ、見せたいよ、隣のを、旦那に。美女だ。」

「旦那は未だ見ないのかね、私も見ないけれど。」

「お前なんざ見ねえが可い、見た日にや生さちやおられねえから。」

「何故？」と此謎は解けぬ様子。

「愧かしくつてよ。」と冷笑ふ。

「お前様だつて同じ事さ。」

「此奴も何故と言ひてえな。」

「其顔ぢや始まらなからぞ。」

「戯るない。寺島村の久様だ。」

「後から陸續跟いて来るだらう。」

「は……其顔と謂や、柏壁様よ、(と小さな聲をして)」

「お氣毒なものだ。尺八ぢや惚れられても、御本尊を拜まれちや、喃、出来るのも出来ずに仕舞はあ。さう謂つちや悪いけれど、せめて尋常の容貌なら、今度のなんぞあ本物になるんだけれど、何つだつて彼容貌ぢや納まらねえからなあ。」

「然うさねえ。今こそ見慣れたから別に何とも思やしないけれど、始めて家へ光來の時ばねえ、まびくど能くもかう醜く出来てると思つたよ。從來些とも女の話なんぞ爲さなかつたけれど、彼で心から嫌ひといふぢやなからうねえ。又彼で無暗にお好きでも困るけれど。」

「嫌ひといふものが唯の一人だつて有るものかな。我なんぞ未だに好くつて耐へられねえ。」
「お前様なんぞ、席破の實だま。」

「人間の悪い、未だそんな年齢ぢやねえ。額際こそ兀げてるが、今が色の出来る眞盛だ。我に旦那の半分尺八でも吹けて見ろ、來月邊から、もう日光臭くなつて土掘をしちやあねえ。糸織の「ねんねこ」で袖手をして、隣の仕送で、安氣に色で暮らせる男なんだけれど、生憎不器用の無藝と来ておるもんだから、まあ十人出来るものが七人、と謂たやうな勘定で……」

「もう解つたよ。お前様は色男だよ。」

折りから讓の座敷で手が鳴る。女房は頓狂な聲をして、

「へえい。」

(十)

翌日讓は役所から退けると、昨日の味を占めて、今日も屹度合奏すだらうといふ肚で、何は措いても、先づ「虫の音」の名管を取上る。所で不圖考へたのは、毎日「虫の音」でも無らうから、何か異つた曲をやりたいけれど、突然に始めたら狼狽だらう。何をやるといふ合圖がしたいものだがな。「虫の音」ならお馴染で世話無しだけれど、毎日ぢや鼻にも附くし、然も我が外の曲は下手のやうでもあるし。何とか好工夫は無いか

隣の女

知らぬ、種々と氣を揉みながら、何を吹くといふ憑據無しに暮露々々と音を入れる、忍男なら垣の外でエヘン／＼を極める格で。

隣家でも思召はあるのを見て、忽ち之に應じて絃の音を響かす。そこで、此奴いよく本物と、讓はぐつと来て、早速譜本を取つて好加減に抜けると「深夜月」といふ三下りが出る。

なるほど「深夜月」は可からう。之を一番吹くかな。「虫の音」が行けば此も行くに違ひ無い。好文句があるな、身につまされる。「戀しき人は暴き風、うき身に透る烈しさは、君に恨は無きものを……」。君に恨は無きものを「は穿てる。其に相違無い。君に恨は少しも無いけれども、戀しき人は暴き風、憂身にほる烈しさは、實に耐へ難いと口説いたところが哀れで好い。」

と之に極めたが、さあ一生懸命。まづ坐住から正して、無念無想と謂ふのになつて、眼を半眼に開いて、心静に吹出すと、我ながら玉振の妙音進つて、乾坤爲に清きかと疑はれる。けれども隣ではペンともいはないから、讓の氣の揉み方は尋常で無い。

隣家で合せないからといつて、今更罷められもしない。と謂ふのが、自分が甚く乗らぬで、中途で變ずるが

如何にも惜いのである。實際乗てゐるほど有つて、今日は格別調子が好いに就けて、合奏してくれないのが恨めしい。これほど身を入れて吹てゐるのであるから、今日こそ合奏せしてもらひたいと念ふのに、錦を衣て夜行くが如した、寶の持腐だ、犬死だ、と少しく孤憤になつて吹いてゐると、「空飛ぶ鳥の影なれや」の後の、手事の前弾から、絃聲忽ち湧いて、輕籠、慢燃、嘈々切々として合奏せ始めたので、讓はいつそ命も入らなくなつて、肺の臓に龜裂の入るほど、力を竭して調べる。

やがて首尾好く曲は関つたが、讓はなかく堪納しない。是非最一曲と思つたが、外の曲をやつて又狼狽せるよりは、寧ろ最一遍之を首から合せやうといふ了簡で、追懸けて「深夜月」を繰返すと、隣でも其と曉つて直に彈出す。

讓は是に於て、隣のが全く自分の管に惚込むでゐるわい、と心の底から確信する。それも無理は無いので、隣の女は言語を以てこそ其意を通せぬけれども、所爲に於て十分に心の誠を明してゐると見て差支無い。

士は己を知るものゝ爲に死すといふのが人情であるから、讓も己の管を悦ぶ隣の女の憎からう道理が無い。それも平生縁日の小間物店ほど女子に取巻かれてゐる男なら、これしきの事は九牛の一毛、固より齒牙に

隣の女

隣りの女

懸くるに足らぬけれど、御承知の通り飢餓きつてゐる讓には、實に容易ならざる難福で、永く日記の上に特筆大書すべき一生の面目である。

それほど難有味のある女をば、越人が秦人の肥瘠を見るが如くにしてはゐられない。逢ひたさ、見たさは飛立つばかりであるが、此方は何處までも例の時鳥を極めて、聲ばかりで氣を揉せの、姿は見せまいといふのであるから、なか／＼仕事に難しい。まづ垣問見の外には施すべき手段も無いので、其も可からうと椽に出で、庭下駄に足を懸けたことは懸けたが、爰に當惑したのは、此態を植久夫婦に見附けられては些と拙い。と謂ふのが、鰻飯まで奢せられたのであるから、秘密は既に破れてゐるのであらうけれど、垣視をやるまで沽券を下げてゐるとは知られたくない。

五十歩百歩であるから、其も可いやうなものではあるが、從來が從來で、女は大嫌ひ、一生精進のやうな貌をして通したのに對しても慙かしいわけである。あんなに堅く見えても、心は矢張軟かいのだと思はれるのが愁し、又あれほど堅かつたのが、忽ち落けてしまつたと思はれるのは尙のこと愁い。見附けられなければ餘程妙なものだけれども、竊と母屋の方を窺ふと、窓は障子が閉つてゐる。此窓からで無ければ、外

から何處も見ゆる處は無いのだから、今の内だと、驚歩で垣根へ忍寄つて、此處等と思ふ邊に顔を差寄せたが、此方の垣と彼方の垣とが二重になつてゐるので、好い隙が無い。何處かに一箇所ぐらゐは在りさうなものだと、彼地此地探したが、さて無い。幸に在つたところで、座敷だか庭だか判らぬが、何にせよ、隣家の模様が縞の如く仄かに見えるばかりで、實景の千分の一にも當らないから、唯見えるばかりで、何が何やら全然判らぬ。

二重の垣は殆ど密接してゐるから、隙見の出来るほどの穴を鑽けるのは雑作も無い。小刀で一つ抉れば可いのだと、早速道具は取て來たが、今度の仕事は些と盜賊じみるので、有繋に氣が咎めたか、きよろ／＼四方へ眼を配りながら、首尾好く垣まで行着いたから、手迅く刀を揮つて、づかと垣の竹へ研込むだ。引抜いて最一刀といふ所で、

「おやく。」と女房の聲がしたので、讓は冷つとして、小刀を隠しながら振向くと、女房は椽側まで出て來て、

「おや其處に在らしたつたのでございませうか。何を爲すつて？」と嘖鳴つける。讓はへともとして、

隣りの女

「うむ、何も爲ておやになら。」
(十一)

悪い所へ女房に出られて、其日は志を果さずになりました。夜に乗じて企てやうとしたが、闇黒で少しも勝手が知れないので、夜明といふことに定めた。

燈を點けて、机に向つて見たが。底から持上げられるやうに氣が浮ついて、爲る事も無く靜坐してはゐられない。火の焚ゆるが如く、波の跳るが如く、水火の交も激する如く、耳の側で馬鹿癡子をやられる如く、師走と正月が一處に來たかの如く、讓の肚の中は、色男になりすました感情の爲に攪旋されてゐる。黒く、冷かに、寂寞として、恰も「死」の如き夜は、到底這般の生氣烈々たる軀を斂む可き柩では無い。

讓は無聊に苦むで、悶々として坐敷を出た。入口の框に立ちながら、奥へ向つて、

「一寸散歩して來る。」と聲を懸けると、久五郎は玻璃燈を手にして慌たむしく現はれる。
「何方へ？ 寄席でございませうか。」

「なあに。そこらを散歩して來るのだ。」

「お早くお歸んなさいまし。これからお坐敷へ出まして、色々またお話を伺ひませうと存じましたところで。」

「何ね、話とは？」と讓は不思議がる。

「いづれ意氣事のお話でございませう。今日も亦お目出度ございました。」とひよこを頭を下げる。讓は思半に過ぎて、莞爾と打笑み、

「又そんな馬鹿な事を。」と言捨て、すつと出る。

「何處へお出なすつたの？」奥から女房の聲がする。

「何處だか。散歩して來ると謂てお出なすつた。」
と言ひく久五郎は居間へ入る。

讓は飄然と門を出たが、別に何處へ行かうといふ目途は無いので、足に任せて土手の方へぶらりく、田畝路の闇黒を半町ほど來たが、不圖立住つて前より足疾に引還す。

隣の女

殆ど我家の側まで来たから、もう歸るのかと想ふと、垣根停ひに裏の方へ出て、隣の女の住居の門に立つた。それからぐるりと廻つて裏口へ出て、それから最少し廻つて、庭の垣の外から斜に二階を見上げて少為イむのである。

二階の兩戸は閉めてあるが、樓下は明放して、坐敷の火影が庭の樹々に映ろつて、家内は人無きが如く森としてゐる。二重で無いから此垣からは奈何か見えやうと、立寄つて隙見をみると、なるほど隙間もあるけれど植籠の茂に遮ざられて、十分に眼が達かぬ。それでも思ひ切れずに二三箇所探したが、其効は無い。隙間は到底駄目だ。やつぱり小刀で抉るのに限る。明朝の事だと断念して、表へ出て來ると、五六歩前に角燈を閃かして行くものがある。郵便配達か、巡行の巡查か、と視ると、細袴が白い、劍鞘が縮く。二問ばかり行たかと思ふ間に、ふつと角燈が消えて、びつたり靴音が絶える。

譲は之を見ると、何と無く可厭な心地がして、思はず立住まる。巡查が角燈を消す、どういふ意だらう。風で消えたのか知らぬ。それほどの風も無かつたし、どうも様子が自分で消したらしかつた。異しいぞ、と立止まつたまま偷視してゐる間に、靴音がぼくりくと響いて、角を曲たやうな氣勢である。

丁度自分の歸る道であるから、譲は足音を偷みながら急いで蹤を追けると、角を曲がる同時に、格子戸の開く音がする。此小路には例の隣の女の住居より外に家は無いので、其家はまた格子造である。して見れば、今格子の音のしたのは隣の女の家で、入つたのは巡查だ。巡行の巡查が角燈を消して、夜中女ばかりの家へ入る。これは異しいぞ。彼奴強盗ぢや無いかな。それとも火を借りに入つたのか知らぬ。何しろ前を通つて見れば解ると、見附けられぬやう、と端の方に寄つて、行過ぎながら格子の内を覗くと、土間に立てゐるのは巡查である。應接してゐるのが女で、それは下女か主婦か、能くは判らぬけれども、何と無く主婦のやうに想はれる。

角燈は消してある、支關に灯は無し、葎戸から洩れる座敷の燈影が、どんより照らしてゐるのであるから、無論明瞭には見えなかつたけれど、土間に立てゐたのは巡查で、取次に出てゐたのは女であることは、僻目では無い。

瞥と見たばかりで譲は行過ぎたが、どうも氣に懸かつて、そのまま見道されない。これから奈何な事になるだらうかと、びつたりと垣に身を寄せて、暫く様子を候つてゐる。

隣の女

隣の女

凡そ二十分餘も立つてゐたが、巡査は出て来ない。はて火を借りるなら、疾に出て来る理なのに、何を爲てゐるのだらう。これは彌よ異しいわいと、最一遍門を通つて見ると、怪、怪！支關に人の影も無い。異しいぞ。あのくらの見張てゐたのだから、出て行た理は無い。家へ上つたのだ。上つたのなら靴があるだらうと覗いたが、土間は闇黒で見えない。靴は見なくても何でも、出て来なかつたのが何より證據だ。上つたのに相違無い。

強盗かな？女二人といふことを知つて推込むだのかも知れない。もし然うなら助けてやりたい。女ばかりで窮つてゐるだらう。抜刀で威されて聲も立てずにゐるのだ。此處から一番喧鳴てくれやうか。と讓は心が悸悸して、足が浮き出した。既に格子戸を亂打いて、盜賊々々と叫ぼうとしたが考へた、もし然うで無つた日には飛だ恥辱を搔かなければならない。まづ心を落着けて様子を探つた上で、耳を澄ましたが、がつたりといふ音も聞えぬ。

けれども讓の心は安まらぬ。二人とも踏縛つて猿轡でも舐めておいて、悠々と仕事を爲れば何のことは無いのだ、と想ふと益氣が揉めて、矢も楯も耐らない。どうか様子が見たいものだと、また引還して庭の垣から隙見をしたが、見えないものは依然見えない。

氣は揉める、心は逸る、胸は跳る、腹は立つ、奈何せうかと思つてゐると、俄然水口の戸が開いて、のつそりと出て来るものがある。おのれ曲者と、讓は息を凝して潜むでゐると。下駄を踏覆して、おゝ痛いといふのが女の聲である、おやと思ふ間に、すたく前面の方へ行く。間も無く井戸端に桶を置くらしい響がするど、直に水を汲始める。

想像と實際とが、差つたと謂つても餘り差ひ過ぎたので、讓はあんぐり口を開いて、我ながら極の悪いほど可笑かつた。やがて重たさうな足音と、手桶の水の溢れるぼちやりくが聞えて、其者は水口へ入つて了ふと、後は再び閑寂とする。何だ、下女が水を汲みに出たのか。賊が入つてゐるのに水を汲むことも無からう。然うして見ると、賊ぢや無いわい。それで先づ一安心したけれど、そんなら彼巡査は何だらう。よもや不見不識の者ぢや無からう。知人でも何んでも無い巡査が、巡行中に人の家へ入込むといふ法は無い。設ひ知人であらうとも、巡行中に道草を食ふとは怪からぬ事だ。自分の家へだつて寄ることはならぬのに、人の家へ、怪からぬ、燈を消して、靴を脱いで、悠々と上り込むで……以の外の事だ。不都合な巡査だ。告發

隣の女

隣の女

すれば早速免職ものだ。太い奴があつたものだ。無論知人に違無い。けれども如何いふ關係なのだか知らぬ。兄とでも謂ふのかな。藝者の兄、妾の兄なんぞといふ奴は得て臭いものだ。「菖蒲を杜若」といつたが無理か、場合ぢやお前を兄といふ」の本文通りの兄かも知れぬ。けれども高が巡查だ。あのくらゐの女が巡查風情を情夫に持つ？ 餘り不相應だ。蓋し有得可からざることだ。

或ひは眞實の兄か、其も判らない。兄が巡查をして、妹が妾、父親は昔八百石の旗下。随分さういふのも有る例だ。まさか情夫といふやうな事はあるまい。譬へば兄にしろ、情夫にしろ、苟くも職を巡查に奉じて、人民保護の任を負ひながら、自から罪を犯して、巡行中に小憩をするとは不都合極まる話だ。用が有るなら非番の時に來たが可ぢやないか。角燈を消して人目を忍び、夜中こそく入込むなどは、職掌柄にも似合はぬ事だ。

それでも晝間は交番所の中に眼張つて、高慢な顔をして生酔と議論をしたり、無提灯の車夫を捉まえて、愚にもつかない説諭をして、揚々自得してゐるのだらう。新造が物を尋ねると、悪執濃く親切に教へて、兪父

が何か聞くと、傲然として更に應じないなどといふのは皆この手合だ、怪しからぬ。戸籍調に來て、茶を一つ出しても、會釋をしたばかりで手も着けないといふのが巡查の作法だ。それに、夜中女ばかりの家へ上込むで、もう彼此三十分餘にもなるのに、まだ出て來ない。一體何を爲てゐるのだ。不届千萬な奴だ。と如何いふものか讓は甚く憤懣して、賊でも無つたから、それで安心して歸つても可さうなものを、まだまだ氣が揉めるといふ鹽梅で、家の周圍を廻つて、巡查の見張をしてゐると、良有つて格子を開けて出るものがある。

畜生め！と讓は角に隠れて窺つてゐると、前面の方へ行く靴音がぼくりくとする。畜生め！まだ角燈を點けずにある、と見てゐる間に巡查は立住る。何をこそくしてゐるかと思ふと、一道の火光忽ち闇を劈いて迸る。其光の間に、朦朧として巡查の踵まつて燈を點する姿を認めた。

畜生！とく／＼點けやがつた、とまほ忍むでゐると、巡查は徐に起上る。乃ち照寃の角燈爛々として輝き、破邪の長鉄鏑々として鳴り。靴音高く踏躑かして、方正に、殊勝に、神妙に巡行を始める。

隣の女

(十二)

讓は巡査の不都合を憤つて、心煩る平ならずして歸つて来る。一身上の事の外は冷淡に看過する平生にも似あはず、不思議にも今夜に限つて無性に「怪しからぬ」がるのは、餘程虫の所在でも悪かつたのと見える。否、別に理由があるらしい。巡行の巡査が怪しい舉動をして、夜中女ばかりの家へ入込む。なるほど不都合千萬であるが、其女ばかりの家と謂ふのが、自分に無關係の「女ばかりの家」であつたなら、單不都合とも、怪しからぬとも念つたわけ、事は濟むたのである。

然し、其「女ばかりの家」、巡査の入込むだ「女ばかりの家」と謂ふのは、自分の管に惚れてゐる隣の家の家であるから、よもや巡査如きを色に持つやうな、そんな事はあるまいとは信じながら、快い心地はせぬ。それに、巡査の舉動が如何にも胡散臭かつたから、然うでもない、戀は思案の外であるからと、内々妬ける氣味で、其不都合が殊外癪に障つたのでは有るまいか。

茫然坐敷に入つて、蒲團い玻璃燈の前に坐つて見たが、一向訝えない。先刻久五郎が伺ひたい話があるのかつたが、極りで又奢れなどと、油を洗けに來なければ可が、何と言はれたつて、中々奢る所の始末ぢや無いと鬱切つてゐる。

久五郎は飲過ぎて、はや儘れてしまつた。女房は何を爲てゐるのか、折々びしゃくど蚊を撲つ音が聞えるばかり。

讓は所在が無いので、つい考へる。考へると洗つて來る、考へまいと爲ても考へられるので、こんな鬱悶した時は、平生なら管といふ所であるが、其管も今夜は氣が柔らない。貸本はなほ面白くも無し。起まつてゐるのもつまらないし。いつその事寝やう、と時計を見ると、九時少し廻つた。

最ごんなか喃、然うして見ると、一時間餘も徘徊てゐたのだ。あゝと悪長く引張つた吠をして、次でに伸を打つて、舌々立起る。それからぐづらぐづら床を敷く、蚊帳を釣る、寝衣に着更へる、脱いだ單衣は衣紋等に懸ける、いさ横になるばかりになつて、机上の燈火を吹消した、あとは黒白も分らぬ眞の間。

讓は寢飽きて眼が覺めると、朝の色は月の隙間からほのくくと坐敷を照らしてゐる。

寢起の煙草も吸はずに、寢衣帯を締めなほして蚊帳を出ると、直に庭の雨戸を、出來るだけ靜かに、音の爲にやうに一枚開けて、筆筒に挿してある小刀を握んで、衝と庭へ下りる。

隣りの女

人目が無いから公然に、昨日からの仕事に取懸つて、首尾能く此方の垣に十分の隙を拵へた。これから隣の垣であるが、密接してゐると謂つても、五六寸は間があるから、小刀では達かない。そこで坐敷へ取返して、蠟鞘の九寸五分を用意して来る。

晃々と引脱くと、水が滴れさうに磨澄ましてある。其を惜氣も無く垣へ貫して、がり／＼と頼りに抉つてゐる間に、節へでも深く研込むたのか、更に動かない。色々賺して突いても引いても抜けないので、少しく憤れて、力任せに咥とやると、弛むだから、ぐつと抽いて、見ると驚く。

確に夏なほ寒き氷の刃であつたのが、忽ち燒冷の鹽鹵といふ姿になつて、齒は散々に缺ける、竹の漚には曇る。切尖から二寸約は屈つてしまふ、其淺ましさは眼も當てられない。其は左も右も、試に隨見をするど、依然思はしいことは無いのに、未練らしく幾度も覗いて、其後では鹽鹵の一刀を噴めてゐたが、遂にはがつくりと投首をして、鞘と刃とを兩手に垂下げながら内へ引込むでしまふ。

再び蚊帳へ入つて寝轉むで、空想の夢を見る裏に、かういふ分別が識らず／＼浮むた。

あの巡查が情夫であつても構はぬ、自分は豫ねて覺悟の通り、耳で惚れられる色男であるのだから、眼で惚れ

られるのとは自から別種で、而して最も高尚なもので、眼で惚れられるのは色を以て愛されるので、色を以て相愛するのは獸慾的である。

柏壁議の管と來たら、巡查如きの風致と同日の論では無い。熱考へて見れば實に然だ。けれども其處が人間の淺ましきには、彼巡查が氣障に情夫がつた眞似を爲るのを、あつて見せつけられると、有聲に氣が揉めぬでも無い。旨くやつておやがる、と少しは腹も立たやうなものだけれど、なほに己を省れば敢て巡查には譲らない。

先づ私の管を聴かう、私の姿を見やうが爲には、二日も二階へ出たのでは無いか。それから、三度も合奏を爲したでは無いか。音楽に於ての色男たる本分は、それで業に盡してあるのだ。何が不足で人を羨むことが有らうか。私の管の爲に、二度もわざ／＼二階へ昇つて、三度も三味線を弾いた、其心意氣——其眞實——その情を立てた心中といふものは、なか／＼仇や疎なことでは無い。

熱考へて見れば實に然なのだ。唯素人丁簡に、色を以て愛されてゐる境遇と、藝に惚られてゐる場合とを混同して、一概に比較にしたのは、全く自分の粗想であつた。熱考へて見れば、隣の女が我に心を寄せ

隣の女

てある具合は到底あの巡査などの企及ぶ所では無いのだ。

熱考へて見ると、我の管は餘程あの女の心を動かしたものと見える。こゝが藝の徳だ！「藝が身を助くるほどの不仕合」と云ふが、熱考へて見れば嘘だよ。藝が身を立てるやうになつてはお仕舞だけれど、助ける間は仕合だ。

巡査は巡査、自分は自分と、情夫の種類分をして、其で先づ嫉妬の熱だけは冷ましたが、爰に又た一つ懸念は、實際隣の女は巡査を色に持てるのか、否やと謂ふことで、まさかとは念ふけれど、萬が一にも其が事實なら、あの女は實に見下げ果た根情の匹婦である。そんな腐つたやうな下等の女に、讓の管は聴いてもらひたくもなし、聴かせたくもない。第一「虫の音」といふ名管の汚辱になる。もし不幸にして其が事實なら、此管を墨江の流に濯いで、再び隣の女の聴く所では吹くまいとまでに決心した。一たびは激昂して然は念つたものゝ、憎くはない女の事であるから、右様の失行は飽くまでも無からむことを、讓は一人の命を助けたいほどに切望する。のみならず、奈何かして立派に事實無根の反證を擧げたい、と心を碎いて工夫し始める。

讓もなか／＼忙しい。これほどに懐つてゐる。女の顔を未だ見ないのだから、工夫も爲なければならぬ。垣間見の穴も其儘になつてゐる。管も日に一二度づゝは聴かせなければならぬ。何しろ昨今色男になつたばかりで、まだ一向勝手が分らぬかの如く、心陰に狼狽しゐる。

此日は日曜であるから、十時頃に例の貸本屋が来て、面白いと受合つて三部ばかり置いて行たのを、机の下へ推籠むだまゝで、椽側の柱に靠れて讓は思案しながら、隣の二階を眺めるとも無く眺めてゐる。

あの坐敷でなあ、二人對坐で、二曲ばかり合奏して、それから御膳となる。酒も全て無いといふのは寂しいから一寸在つて、それから何か睦ましく話をして、それから茶が煮る。ちよいと氣取た菓子が出て、又話をして、もう歸りますといふと、色々留める。それを無理に歸るといふものだから不味を言はれる。それでほといふやうな顔をして、少し住てから、今日は始めて出ましたのですから、明日でも又ゆつくりと、どうして歸さないのを振切るやうにして出るよ、それでは餘りお名残惜いからと、家の前まで送つて来てくれ。あゝ一度でも可から、そんな目に遭つて見たいものだ、此所繪に畫いたらば、讓の胸から魂が飛出して、隣の二階の窓頭を浮波ついでゐると知るべし。

さう、其時には何を合奏したものだらう。先方から屹度註文するさ。それが済むと、何か本曲を聴かしてくれど、誰い好が出る。何が可からうな、京鈴慕？秋田菅垣？京鈴慕は寂くつて俗耳に入るまいから、秋田菅垣にしよう。本曲となると又格別旨味が有からな。秋田菅垣！面白い、一つ試みやうか。と嘘から實が出て、讓は急に尺八を取りに立たが、座に復ると直に吹始める。段々奥に入るほど我を忘れて、浮々と一曲調へてしまふ。

今日は善く出来た。此位に聴かせやうものなら忽ち参つてしまふ。聴かしてやりたいな。と何心無く振仰ぐ途端、讓は鐵錘一撃の下に身軀が粉塵に碎けた歟の如く感ずる。

隣の二階に出てゐる！出てゐる！！出てゐる！！欄にびつたり身を寄せて、此方をば孔の穿くほど覗めて、美人が愁然、伊むでゐる。

讓の周章狼狽は尋常で無い。朝日に照らされた魘魅魘魘の如く、驟雨に逢つた中風病の如く、土手で伯父貴に邂逅した息子の如く、火薬を運搬する車力が火事場に差懸つたかの如く、命が有つての物種といはぬばかりの容體で奥の方へ駆け込む。樓上の美人は此光景を見て、思はず片頬に微笑を含まだが、それは讓の業

業しい周章狼狽と、唯可笑いと思つたばかりでは無いらしい。其中に自から幾分の冷氣を帯びて、半嘲る如く見えた。何を嘲けるのやら、其本人の外に知るものは無いが、兎に角讓の身に取つて餘り賀すべき事ではあるまいと想はれる。

階子を下懸けに、美人は再び讓の坐敷を見込むで、嘲ける如き微笑の既に消えた迹に、復更に笑を帯びて、此事を他に話して聞かせむと爲るものゝ如く、稍慌だしく下て行く。

讓は管を握つたまゝ机の側に窘むで、太甚物に駭いたといふ體で、眼が光つて、呼吸が迫むである。

何が其ほど恐ろしいことが有るのであらう？短刀一口棒に振つてまでも、隙見をしゃうと企てたほど焦れぬいてゐる女の顔を、思懸無く面と向つて見たとは、隨意ならぬといふ世中に、これほど好都合が多度あるものではない。思ふ存分見ておけば可に、とどろくして奔竄れるとは何事であらう。今更羞かしい年齢でもあるまいに。

然矣、誰しも然う思ふ。然う思ふのが常情である。憐む可き粕壁讓は其「誰しも」の誰の中には數へられぬ條件があるので、それで、誰しも然う思ふことを、讓に限つて、然うは思はぬのである、思はぬのでは無い、

思へないのである。

其條件とは何？彼は非凡なる醜貌である。下女や子守にまでも彼方を向かれるほどの醜貌である。他も然う見れば、讓自身も然う念つてゐるから、此度は不思議の御縁で音楽上の色男になつたものゝ、此面を見せたが最期、百年の戀も忽ち覺されると合點して、例の時鳥を極めの、聲のみを聞かせて、此戀を長く樂まうとした計畫が、もう破れた、爲様が無いと、讓は一圖に念ひこむたのである。

(十三)

屹度顔を見られた。見られたら愛想を盡かされたに極つてゐる、と讓は求めて失望しておいて、後から百方に自から慰めて見たけれども、到底自から慰めたのに満足することは出来なかつた。

事實の上に於ては、愛想を盡かされたものとして異議は無いやうなものゝ、そこが人の心は種々で、容貌と藝とは別物だといふ思考を、隣の女が持てゐるならば、と辛くも一方の血路を開いて、九死の中に一生を得むものと企てた。今となつては恃む所は唯是のみである。

之を試みる手段といつては、當人の胸を開くより外は無い。其には例の如く音を用ゐて、今まで通りに合奏

せたら、少しも心配は無いけれど、設應になかつた日には、脈は全く無いものと諦めねばならぬ。

此上は運を天に任せて、我力の限り吹いて見るばかりである、九分までは失望してゐるものゝ、一分は僥倖といふ色氣の有る爲に、幾分か力附いたやうな加減で、絶食した病人が此一兩日は粥湯を啜つたくらゐの元氣は出たが、安否のほどが氣に懸かつて、一か八か、早く勝負を爲て見たくて耐らない。後刻も今も有るものか。やつて見ると尺八を取擧げたが、待てよ、未だ立て在はしまいか。在はしまいか！在たら合奏せるも試みるも無い、脈は大有だ。えと晩かつた、其處に氣が着いたら、びく／＼として引籠むでゐずに、早く覗いて見たものを。もう大分過ぎたから、待草臥れて下りてしまつたかも知れぬと、そろり／＼這出して、竊に鏡つたけれども、はや影も無い！

あゝ在ないと落膽して引退つたが、もう此上ほど、食濕した唇を歌口に推當て、無二無三に「袖香爐」といふのを吹く。吹いてゐる間にはトテン／＼も響かなかつた。吹いてしまつてもそんな氣は無い。それでも讓は屈せず、最一度繰返したが、同じく音沙汰無し。それでも未だ／＼讓は屈せず、追懸けて「深夜の月」を吹く。隣では三味線が損じたのか、それとも糸が無いのか、但しは親類の忌中か、いよく静まりかへつ

隣の水

である。

讓はそれでも未だ屈せず、(肚の中では如何なにか屈して、もう孤憤の死物狂なのかも知れぬけれども、管を離さぬ所は、未だ屈せざるやうに見える)(今度は御馴染の「虫の音」を吹出した。

抑も之を聴かせるのは、カンフル注射も同じ事で、これで感じが無いやうなら、嗚呼哀哉此戀は既に死せり！

之を最後の手段と思へば、讓の心は有聲に跳起ち、狂奔る、我も管も一世一代の曠業と、死力を盡して調べたけれども、無情、無情、無情なる隣の糸は終に響かぬ！

讓は管を持つて横臥しに僵れる。僵れるとぶるくんと身を顛はして、そのまま眠れる如くなる。噫眠れる如く？讓は其のまゝ眠ることを望むであらう！寧ろ其まゝ永く眠りて再び覺めざらむことを。

それでも讓は心から思切られぬので、其晩も亦散々に吹いて、隣の女の心を試した。

試せば試すほど失望を強めるばかりで、いくら自惚を出して見ても、愛想を盡かされた、とより外に考へやうは無い。

今となつては植久夫婦の手前も面目無く、隣では一向取合も爲ないのに、此方ではばかり無性に吹くのも、餘り器量が悪過ぎる。強賢をしてまでも聴いてもらひたいやうな、そんなお安い讓の管でも無いのだ、と早尺八を袋へ納めて、自分も例より蚤く蚊帳の中へ潜りこむ。

夜が明けて見ると、又何分か氣が變つて、兎も角も今日もう一度試して見やう。それで斷然いけなかつたら、潔く斷念するばかりだ。今度こそ潔く斷念する！潔く、男らしく、勿論の事だ、と大いに決する所あり迄は立派であつたが、其期に迫むで見ると、無慙にも三回失望した。

嗟乎最期の失望！絶息せる失望！讓の胸中は實に言ふに忍びぬ。

此夜樓上に燈暗く、比翼の影を障子に映して、男女の私語するあり。

女は言ふまでも無く讓の所謂「隣の女」實名小夜であるが、男は移轉の夕に来て酒を酌むだ、彼の紳士風の好男子では無い。

隣の女

半は日に焼けて色の黒い、眼のまぶらりとした、鼻の隆い、決して醜貌では無いが、女子に戀着かれやうな

隣の女

相親でも無い。何處か凄味を帯びて、一癖ありさうな、まづ惡寒手の面である。それで服装は、莫大小の襦衣に紺飛白の單衣、藍氣の銘仙の長羽織を着て、鼠縮緬の兵兒帯に裏白の紺足袋。年齢は三十二三で、その八字髭の好さといつたら宛然作物である。二人の間に旨さうな味が二三品排へてあつて、お小夜の後の小火鉢には鐵瓶の中から徳利が顔を出しおる。

「お前さん何處で飲むで来たの？」

とお小夜は怨むが如く窘む如く、流盼でじろりと見る。男は極の惡さうに顔を撫で、

「何さ、少しばかり。ほんの御呪禁ほど。」

「おや、お酒が何の御呪禁になるの？」

「そんなに何も言ふことは無いぢやないか。」

「有るよ、無くつてさ。内で飲ませないと言やしましいし、何も餘所で飲んで来るには當らないぢやないかね、否に面當がましくな。」

と毗が少しく昂る。其と見るより男はわざと語氣を和げる。

隣の女

「そんな否味を……どういふものだらう。何の面當に？無理ばかりいつて人を窮らせるよ。我が赤い顔をして来て、それがお前の氣に障つたのなら謝るよ。どうか勘忍して下さい、以來は吃度謹むから。」

と横を向いて、可愛らしい銀煙管で煙草を輪に吐いておる。男は酒盃の果を一寸切つて、

「まあ一盃申上げませう。」

と危みながらお小夜の前へ出すと、物をも言はず煙管で丁と撃く、猪口はがらりと破ける。男は吃驚して、女の顔を凝然と視ておたが、

「何を憤つてるのだなあ。」

と語の未だ訖らざるに、お小夜は吃と此方を捨向て、

「だからさ、何處で飲むで来たんだと言ふんぢや無いか。それを聞いてゐるのに、空々しい一盃申上げさせうもないもんだ。」

男はわざとらしく笑ひながら、

「何處で飲むだ〜と、大層氣にして聞かれるけれど、お話申すほどの處ぢや無いのだから、それで先刻から實は差控へておたのだ。」

「おや大層御遠慮だねえ。多度まあ然うなさいまし。」

「また始まつた。ぢや包まず白状するぞ。今晚來懸に、朋友の家へ用事があつて一寸寄つたら、丁度牛肉で飲むでゐるところぞ。」

「牛肉？牛肉はおよしといふのに。」

「だから、牛肉は食はず葱ばかり食つたぞ。」

「あら見とも無いね、此人は。」

「だつて、牛肉は食ふなど訓ふし、葱を食つちや見つとも無かつたら、まるで口へ入れる物はありません。」

「だからさ、朋友の家なんぞへ寄らないが可いぢや無いか。」

「寄らないが可いたつて、用事がありや仕方が無い。」

「嘘をお吐きよ。飛だ朋友だらう。」

と執念く怨をかけられて、男は面倒臭いといふ貌で、

「然うなら然うにしておくと。」

「しておいたら本望だらうけれど、そんな勝手な真似は爲せないよ。」

と吃と言ふと、透明やうな蛸谷の邊に、疳癆筋がほんのりと顯はれる。怒ひ返答をする時、益疳を募らせるばかりと、男は無言で手酌で飲むでゐる。

「朋友の家へ寄つて飲むのは、何も今晚に限つたことば無いぢや無いか。危い首尾をして呼ぶ私の身にもなつて御覽な、ぐづぐづ寄道なんぞをして、酔拂つて來られた義理かえ、人の氣も知らないで、勿體も大概にしておくれ。洒落や嬉戯にお前様を呼ぶでゐるのぢや無いよ。一つ間違つて旦那に知れりや……。」

「解つてる。解つてるよ。かう見えても、心の中ぢや仇や疎に思つてるものか。寄道をしたのが我の落度だ。謝る、此通り謝るから、機嫌を直して一杯飲むでおくれ。よう、機嫌を直してよ。」

温言と酒とを左右にして、一圖に敵の歡心を買はむと力める、けれどもお小夜は度々釣落された魚の如く、こんな餌には懸かりさうにもしない。また例の手かい、よごてもおくれといふ吐である。

「ねえ、おい、」盃飲まないか。」

「あ、飲みたさや勝手に戴くから。」

「困るなあ、どうも然う慣られちや、ちつと話しにくいことがあるのだけれど、言出せな。」

と倫に女の顔色を見る。お小夜はつんと横を向いて、奥歯で烏棒を噛みながら、いつまでも煙草を挿めておる。

「ねえお小夜、機嫌を直してくれたのか。」

「どうだかね。此先の交番で聞いて御覽。」

「皮肉を言ふなよ。今日は非番で佐々木様は色の處へ行つて、今脂を取られておる最中だ。」

笑ふまいとしたけれど、フ、ンとお小夜は思はず笑ふ。佐々木は其圖に乗つて、御意を執るは今だといふ意氣込で、

「さあ一杯献じよう。」とわざ／＼お小夜の側へ立て、猪口を突附けるやうにしても手を出さな。」

無理に持たせると、わざと落す。持たせた女の手を押へながら、盃々と一杯注いで、

「さあ飲むでくれ。」といひながら引退がる。お小夜は不承不承にぐつと飲干して、猪口を下に置いたま

まで、返盃をする氣色も無いから、

「其を戴かう。」と催促に及ぶと、

「お持ちなさい。」と極めて素氣無し。

仕方無しに佐々木は其猪口を拾上げて、

「どうせ御返盃をへ下さらない際だから、お酌をお願い申したところが、無駄だらう。矢張巡查風情には此が相當です。」

と否味を言ひ／＼手酌を極める。

「お腹立中で甚だ申出しにくいけれど、ちつとお願の筋があるのだがね。」と無闇に頭を掻く。

「何でもございますか、承まはるだけなら承まはりますせう。」

「承まはられるだけなら承まはりますます。」

と追々酔が廻つて來たので氣が強くなる。

隣
の
女

「お前様餘り飲むぢや否だよ。先刻から獨酌で大分飲むだよ。酔つてしまふといけなから好加減にしてお措きつてば。」

「酒を飲むのだから少しは酔ふさ。先刻から飲むだと謂ふけれど飲まずには在られまいぢや無いか、散々ばら呑味を謂はれたり、憤りつけられたり、謝らせられたり、其返報に、ぐでんぐに酔つて御介抱を受けるのだ。」

と先方が少し折れて來た虚に乗て、今度は一番此方から強く振れて出る。

「佐々木様、今のお願といふのは何だえ。お極りかえ。」

「度々で氣毒だけれと……。」

「ほんとに度々だよ。どうして仕舞ふのだらうねえ。」

「銀行へ預けて置くといふ次第でも無いのさ。」

「お洒落で無いよ。さうくは私だつて有りやしないやね。」

「無けりや、さうく、さうくつてばさうのニツミツも言やあ、忽ち十枚ぐらおは出る御身分ぢや無いか。」

「否に強請じみた言をいふよ、職掌にも似合はない。」

佐々木は苦笑をして、

「晝間は巡查だけれど、夜になると早替で色男だ。色男が卑くなると強請になる。」

「強請が高じたら何になるだらう。」

「まづ巡查に捉まるね。我なんぞは其處へ行きや世話無した。自分で自分を捉まへるから。」

「馬鹿におして無いよ。」と煙管で佐々木の膝を吃はせる。

「冗談は斥けて。少しばかり奈何かしてくれたまへ。」

お小夜はづと高く宿つた顔で、

「失禮な、少しばかりは奈何かしくつても、平生も心得てをりますよ、憚りながら。」

佐々木は確と横手を拍て、その手で直に拜ながら、

「さうく！お小夜大盡。」

「否だよ、もう。幾許ばかり入るんだね。」

隣
の
女

隣りの女

「思召で可けれど、可相成は多い方が宜しい。」

「一體何でそんなに入るのさ。」

「追々秋冷相催し候に付ては、裕も入るし、羽織も入るし。」

「おや、此間も裕を拵へるッて持てたぢや無いか。どんなのを拵へたの？」

「あれは拵へやうと思つたので、今度のは本當に拵るのさ。」

「それぢや私も今晚のは進びやうと思ふので。來月本當に進びやうよ。」

「何だな、吝嗇くさう。」と思はず口が近ると、お小夜はもう佛然として、

「あゝ私は吝嗇さ。」

「あれ又憤るのか。今夜は無暗と氣が強い。」

「鯉の頭でも食へたのだらうよ。」と愈々腹を立つ。

何と云ふ二言目には憤りつけられるので、佐々木も虫があるから、さうくは凹むでもおられず、少しは何だ！といふ了簡も出る。それに酒の氣があるから、

「ハツ面白くも無い。」と放擲るやうに言放つて、衝と立起る拍子に、ひよろつく酔脚を踏緊めながら、

「御馳走様でございました。」と憎たらしく挨拶をして、階子の口へ懸かるまで、お小夜は素知らぬ顔をし

てゐたが、正しく歸りさうな氣色を見るより、今一段下りた佐々木の背後から、物をも言はず獅嚙着いて、

女の腕の厚弱ながらも曳擧むとする。

佐々木は小聲に力を入れて、

「何を爲るのだ。ちよッ放さないかい。」

と申譯ほどに悶いてゐるばかりで、強ち振抽らうともしない。其間に、曳擧げられたのか、曳擧つたのか、

何方とも附ずに佐々木は再び二階に昇つたが、有繫に座敷へは入らず、椽側に突立つて、お小夜が手を放し

たら駈下りやうといふ勢を見せてゐる。

「何で歸るのだえ。何で歸るのだよ。」

とお小夜は聲を頭はして、佐々木の手を執て力一杯に小突廻す。眼は怖ろしいほど釣昂つて、額に青筋が出

てざりく切齒をしてゐる。

隣の女

「歸りたいから歸るのだ。」

とお小夜の描むでゐる手を放さうとする時、益々固く握むで泣聲を出して、

「歸るなら歸れ！」

といひざま男の手甲へ噬着く。驚いて突放すと、同時に女の方からも撞いて来る。

不意を打たれたのに、酔つて足が浮いてゐるから、佐々木は後へ一足勢強く跟隨と、撞と欄に撞着たので、却合を吃つて真倒に放出される。つしり、ぱたりと忽ち庭へ投墮された地響。

(十四)

讓は爾後注々然として、もう浮世に望が無いといふ顔色をして、所好な管さへ吹かずに、局から退けるとつまらなく轉輾してゐる。

臥ながら天井を眺めて、時々氣の無い大息を吐いて、多時空想を畫いて、人情中本の圓滿なる好男子の身上を憶起して、そこを我身がいとゞ果敢なくなつて、巡査をして可から、隣の女のやうなのに可愛がられて、仕送られて、意氣な苦勞をして面白く暮して見たいなと考へる。さうしたら什麼な心地であらうか。貧乏しても、擯斥されても、更に厭はぬ、恐らく命も入らない、嗟乎！

「時鳥」といふ戀を念懸けてゐる間は、讓は奈何なにしても顔を見せまいと苦心をしたが、一朝過つて見られた以上、既に愛想を盡かされた以上は、強て見てくれがしに爲る必用こそ無いけれども、へたくした隠さうとするには當らない。見られるものなら見られても構はぬから、これから毎日一度づつは、隣の顔が見たいといふ了簡が忽然と出て来る。

見たい、眞に見たい！咄嗟の間に一目したばかりであるから、十分には見なかつたけれども、流星は圍はれるほどあつて目覚ましいものだ。世間に美しい女は随分在るけれども、所好に適ない容貌といふのが許多もあるものだが、隣のは身に沁みて好い！あんな女子に……噫耐らぬな、命も入らぬ、名譽も入らぬ……。今頃は如何して在るか知らぬ？今日は薄寒いからフラネルの單衣に縮緬の羽織でも引被けて、寂しさうに火鉢の前に坐わつて、新聞でも讀むでゐるだらう。見たいものだ。と妙に氣紛れて、失望の底に寢轉むでゐた讓は、むくくと起上つて椽側に出る。

晝問家の戸鎖してあるのは、何と無く不景氣なもので、隣の二階の雨戸は所々引残して、微曇の日影が其間から透敷の中を便無げに照してゐる。さばくと芭蕉の葉に風の戯れてゐる垣の外に、隣の百日紅の花が、

隣の女

華美でぬながら物寂しく咲亂だれて、斷續蟬の聲が遠くに聞える。

譲は風物の已に秋意を含むで、自から心を傷ましむるに遭て、拱手をしながら恍惚と佇むであると、二階に今昇つたのは誰だやら、引残した戸の間から女の衣服が瞥と見える。

見ようが爲にわざ／＼出て来た譲は、其覺悟の無かつたかの如く、今更心を盡かしたが、此機失ふ可からずと憤發して、椽の戸袋を小楯に取つて、今に下りる所を見道すまいと、片唾を嚙むで待てると、程無く見えたのは、果して「隣の女」てふ美人である。

何氣無く一寸顔を出して、庭を下瞰して、それから此方に向いた時には、譲の五臟六腑は顛倒やうであつた。足が震へて呼吸が通つて、顔が熱る、それらは未だな事。

此處に譲が忍むであると、女子は少しも識らなかつたが、ふつと眼に入れて忽ち顔を引込ませると、譲も頭を縮めて戸袋の際に藏れる。

蝸牛のやうに、時分を度つて再悠然と頭を出しかけると、女は月の陰から半身を顯して、譲と顔を見合せて嫣然一笑する。はつと思ふと、今度は懇懇に會釋をする。譲は周章して、いつそ逃出さうとしたが、有

隣の女

繋に逃げるのも惜し、留まるのは極が悪し、行くにあらず、留まるにあらず、其間の所をまごつきながら挨拶を爲返すと、女は手を舉げて、眼で物を言つて、其處に待ててくれといふ意を暗に示して、美人の姿は忽ち消える。迹に譲は狐に魅まれたやうな顔をして立てゐる。間も無く美人は再び欄の際に顯はれると、先づ譲に目禮をして、人目を忍ぶかの如く左右を胸はしてゐる間に、その袖の中から白い物が飛出して、ぱつたり此方の庭に墮ちる。

何か投げたなど視ると、萩の花の一面に散敷いた上に、紙を結びつけた銀簪が横はつてゐる。扱はと顔を擧げるとはや美人の影は無い。

譲は跣足で駈下りて、引攪ふやうに拾つて来て、ぶる／＼頭ひながら、其紙を解いて披げると、何やら書いてあるので、文だと思ふと、悚然して惣毛整つ。

是は隣のが寄來した文だらうか。どう考へても、隣のが附文などを爲る因縁が無い。いかにも無い！けれど確に今見てゐる所で二階から投げたのであるから、自分に來たのに相違無い。事實は然うだが、そんな理由が無いが、一體何を書いて寄來したのか、まづ讀むで見やうと眼を曝す。

隣の女

女の文といふものを親しく手にしたのは、譲は臍の精切つて此が最初である。況んや直々戴くに於てをや。況んや一面識の無い、然も惚れておる美人からと謂ふに於てをや。況んや小説にある通り、狂言で爲る通り、簪に結むで投込まれるに於てをや。世間幾多の風流才子ありと雖も、十九世紀の今日に於て、如是詩趣の附文を爲されたものは、恐らく粕壁讓唯一人であらう。

人に寄つては、附文だけでも、古風なことをと擇ばぬ向もある。まして簪に結むで投文などと來たら、定めて其物好を哈つて、氣障な真似をしたものと斥けもしやう。粕壁讓は人情本通の理想色男である。換言すれば、詩趣に富める愛情家（もし如是熟語があるなら）であるから、此簪の附文は特に其詩情を動かして、感最も深かつたであらうと考へられる、畢竟平生の理想が幾分か實行されたのであるから。其文の文言に曰く、

無寝ながら一筆しめし参らせ候。失禮なる御願にて。まことに御恥かし候へども、今晚御暇にも候はゞ八時頃より尺八御持参にて御運ばせ有之やう、暮々も念上げ参らせ候。何も御目もじの上にてあらくも。

（原文は常字假名遣等多く、往々文章調はざる處ありて、本字を用うる僅に十二字、餘は平假名にて認められたれど、判讀の勞を省かむが爲に、校訂して此に掲ぐ）

と讀むだが、どうも未だ夢のやうな心地がして、十分得心せぬので、最一度繰返したが、やつぱり晩に來てくれといふのである。断じて然いふ理は無いのだと、もう一度讀返す。文意は前の通りだけれども、未だ臆に落ちない。そこで又讀むで見たが、「八時頃より尺八御持参にて御運ばせ有之やう」である。前後四度まで讀むだが意は一つ、瞞めておても紙が桐の葉にも化らないから、譲はやう／＼安心して、まづ其文を取て推戴きの、丁寧に皺を伸して八折に疊むで、難有く縹珍の紙入に納めて、簪は紙に包むで、一所に机の抽斗の奥へ仕舞つて慌たしく時計を見ると、五時半過。

「これから顔を剃つて湯に入ると……。」

譲は途上も、顔を剃る間も、湯に入つておる中も、始終其事ばかり考へる。

今日の文は意外だつた。八時頃より御運ばせは難有いが、餘り話が好過ぎて、何だか薄氣味が悪い。今

隣の女

隣の女

日になつて此様な事をいつて寄来すくらゐなら、此間四度も五度も管を吹いた時、前の様に一寸でも合奏してくれたが可ぢや無いか。否に思はせ風をして散々氣を持たせやがつて、「まことに〜御恥しくは候へども」も無いものだ。

過ぎた事はまあ可として、いよく晩に出懸けるか。難有いぞ、嬉しいぞ、極が悪い喃。一寸入り難い喃。初對面の挨拶をしてから、話が無いので窮るて。然しそんな事は臨機應變だ。先方がそれ者だから、其處は萬事巧く執成してくれるさ。文面の通り、早速ながら管を伺ひたいとか、合奏せやうとか何とかいつて直に始まるだらう。其が濟むでからが骨の折れる所だ。

わざわざ家まで呼ぶところを以て見ると、我に全く意の無いのでも無いかな。よし意が無いにしても、我の尺八に惚れてゐる餘り、我の容貌を大目に見てくれてゐるらしい。藝の長を以て容貌の短を補ふのだ。どうも其に達無い。然して見ると、尺八から取入て、自然此讓といふ人物も憎からぬものに思はせる事が出来る。既に今晚遊びに来てくれといふのは、落花有意の氣色を暗示してゐるものだ。けれども情無いことには、何しろ此顔だから、餘程巧く行らぬと、二度と御運ばせは御断を吃ふから、今晚が大事の中の大事だ。

今晚巧く行つて、顔こそ悪いけれど、藝といひ、意氣といひ、好たらしい方だというやうな事情になると、明晩も亦何卒と来る。其次の晩も、亦其明る晩も、二度が三度、三度が四度となる間には、いつか一日水神の植半へでも參つて、ゆつくり遊びうちやしませんかといふ話になる！これは必然の勢だ。然すれば最此方のものだ。

容貌こそ悪いが腕と来たら凄なものぞ。容貌が好つて情緒が出来る、それは當然の事で、雨の降る日は天氣が悪いと謂ふのと同じだ。我などはこんな顔をしてゐて、あつて美人を情緒に持つのだ。色男といふと、一概に好男子のやうに考へるけれども、不思議なもので、實際色男——女子に可愛がられてゐる男に限つて、どうも醜貌のが多い、實際!!もと男女の愛といふものが、決して單に容貌から成立つ理のものでは無い、心と心が相投するので、始めて死ぬ、死なうとまでにもなるのだ。

悪女の深情と能く謂ふ、悪女必ずしも深情では無いけれど、概して容の美しくないものは、情に濃厚で、其と謂ふのが、況く愛されるといふことが無いから、自から一方に情を専らにするのだ。

自分の容貌が醜いから言ふのでは無いが、人は眉目より心さ。心だに誠の道に合ひなば」だ、何でも十分に

隣の女

心意氣の好處を見せて、實のある、頼もしい人だといふ處に眼を着けられるのが肝心だ。

あゝ、何だか氣が急いで、從容洗つておられない。どうせ容貌で色を爲すのぢや無いのだから、好加減にして出やうく。と體を拭いて、姿見の前で涼みながら、心の中に所爲らく、これでも色が出来るのだ！

(十五)

女房は疾に夕飯の支度をして待てゐるのに、時分時になつても讓の歸來が無いので、新漬の茄子の色が認め
るのやら、芝海老の羹が煮つまるのやらを苦勞にして、今頃何處を彷徨あるいてお在なざるのだらう、と頻りにぼやいてゐる最中、颯然と歸つて來た顔を見るより早く、

「まあ貴下は何處のお湯へ入らしたの？唯今夫が箆を持つて御迎に参りましたよ。」

と爆發する。冗談をいひながらも鼻息の暴いのを、讓は其と見て、柳に受流す。

「道理で、今途中で箆を擔いで行く人に遭つたつけ。ぢや彼が久様だつたか知ら。」

と眞面目で言ふと、奥から久五郎が大喝一聲、

「飛でも無い。そりや旦那、紙屑屋でせう。」

これで三人一度に哄と笑ふ。

それから夕飯の膳に向つたが、歡喜が胸一杯で、飯が吭を通らない。辛うじて一膳吃して、箸を措くと直に御召更に取懸かる。

鼠地に白の千筋のフランネルを着して、紺無地と、茶つばい縞と織分の博多帯を、しゆうくくと結めてゐる所へ、女房は膳を下げに來て、

「おや、これから何地へ？」と呆れたやうに訝る。爰で餘り眞面目がると、却つて兎や角異まれると考へ

て、讓はわざと微笑を含むで、尤も此微笑は別に由て來る所があるかも知れないけれど、此場合では「わざと」と謂はなければ照應が悪いから、謙ふ歎の如く、

「まあ何處へ行くと思ふ？」

女房は否な横目つかひをして、讓の心を其顔に於て讀まむとするものと如く、

「然うでございますねえ。いづれ御愉快でせう？けれどもお珍しいぢやございせんか。何が日にも、そんなに装して御出懸けなすつた事なんぞお有なさらぬのに、今晚に限つて……不思議ぢやありませんか。變で

隣りの女

「すねえ、何だか、餘程。本當に何地へ入らつしやるの？」
と再否な横眼づかひをする。讓は重ねて破顔微笑しつゝ、

「我だつて人間だもの往々には装して出懸けるぞ。」

「それは然うですけれど、不思議ぢやありませんか。あら、お羽織ですか、お着せ申しませう。おや、紹の御紋附！まあ夜中だつていふのに大修飾ぢやございせんか。」

「夜中だからつて寝衣を着て出るものはあるまい。」

「ですけれども、御不躰ぢつとも此様にしてお出懸なさることはお有なごらなから、私は何だか不思議でなりませんよ。」

「一寸お前様、お前様てば！」

と遙に久五郎を喚ぶ。

「何を喚ぶのだ。」と讓は咎める。

「餘り不思議ですから一寸呼んで……。」

「呼んで奈何するのだ。」

此返答の無い内に久五郎は入つて來ると、讓の扮装を見て、是も臍を潰した状で、

「おや何地へ?！」

是に於て讓はいよく大得意。

含笑てゐるばかりで、何とも挨拶を爲ぬから、久五郎は女房に向つて、

「何地へお出懸なさるのだ？」

「御愉快ださうだけれど、何處とも隠してゐらつしやるんだよ。」

「へえ、御愉快！どういふ御愉快筋で？」

讓の何とも答へぬ先に、女房が横合から、

「お前様野暮な、御愉快と謂や知れてゐわね。ねえ旦那。」

「お前は黙つておねえ。」

と顧盼ながら粉蓋に極着けて、

隣りの女

隣の女

「本當に何地へ？ 陪從を願ふとは申しませんから、安心の爲に何卒おつしやつて下さいまし。」

「さう否味を謂はれちや困る。何も隠蔽をしたわけぢや無いのだけれど、内君が餘り不思議だの、變だのといふものだから、一寸隠して見たのだ。」

「でも全く不思議ぢや……。」

「ええ、黙つておねえツてば！」

と女房だけに可憐顔をして「へい、成程。」と讓に其次を促す。

「今晚はね、局長の家の子の五歳の祝儀でね、局の僚一統招はれたのだ。」

といひながら尺八の譜本を懐に入れて、

「内君その袋に入つてゐる尺八を取ておくれ。」

「今夜御座敷で一番腕前を御見せなさるんですか。」

「なに、局長が是非聴かせるといふものだから、私は一體人中で吹奏のは大嫌ひだけれど。」

「やつぱりお獨で、隣の都合といふ寸法が宜しいのでございませう。」

といふ時、夫婦の四つの眼は一齊に讓の方を向いて、敵が笑ひ出したら、此方も笑はむものと待構へる。

「又そんな事を言ふよ。」

と讓は遂に笑ひたいのを鵲嚙にしてしまふ。

「何卒お土産を澤山に。」

と女房は冗談に紛らしつゝ萬一を僥倖して、危い所で下司張る。

「何、體したことは有りやしない。」

と此方も虚さず切脱ける。

讓の平生が平生であるから、久五郎は少も疑はず、何處までも眞面目に承けて、

「お歸來はお晩うとございますか。」

と問はれたには、讓も有聲に吐の裏では赤面の至。今晚隣で管の音がすれば、事露顯は忽ちである。歸る早
早胸倉を捉れて、明日は所詮一升や饅飯如きで、示談にはなるまいと覺悟する。

「さう十一時と十二時ぐらゐにはなるだらう。」

隣の女

隣の女

「へい左様でございますか。おい、お履物だ。」

と注意すると、女房は早速退出して行く。讓はわざと時計を見て、

「やあ、もう八時だな、どれ行かう。」

と出懸ける。後から久五郎は跟いて行くと、突然

「あ、簪を忘れた。」 と讓は身を翻へす。

「へえ、何を？」 と久五郎には「簪」が聞取れなかつた。讓は慄然して、

「あの、何、紙入を。」 と間に合はせると、

「紙入はお持なすつたぢやございませんか。」

「うむ、何、紙入へ入れるものを……。」

と曖昧極まることを言ひながら、部屋へ走込むと、手早く其物を袂へ入れて、倉皇下駄を突懸けて衝と出や

うとすると、大分慌てゝゐると見えて、高帽の横腹を格子へ叩着けると、ポコンと響いて頭から跳ねて、三

和士の土間に落ちて再ポコン。此際何とも言ひやうは無し、然ればとて黙つてゐる場合でも無いので、夫婦

は異口同音に「おやく〜。」

(十六)

讓は門を出て、二足三足も歩いたかと思ふ間に、はや隣家の前に来る。座敷の燈影が漏れて微暗く支那を照らして、家内の森閑としてゐる様子は、漫に巡查を尾けた時を憶起す。

いかに地を易れればといつて、彼時指を啣へて闇黒に突立てゐた我が、今夜はお客様でござと入るとは！眞箇

禍福は糾へる繩の如しだ。此間人を羨むだ身上が、今夜は人に羨まれる身上とは、噫實に思懸けなかつた。

彼時我が巡查の見張をしたやうに、誰か亦我の跡を尾けてゐる奴がありはしまいか。險難なものだと、自か

ら前後左右が胸される。胸したところで、誰も尾けてゐる様子は無いやうであるから、くづくしてゐる間

に邪冤でも入ると面倒だといふ氣に勵まされて、今迄何分か躊躇してゐた讓は、決然に格子を開けると、心

に徹へるほど高くがら〜と響く。

小聲であつた「御免なさい」は此裏に没了して、恐らく奥へは聞けなかつたらうから、もう一聲懸けやうと

する所へ、足音の近くなるほど支那が明々なつて、やがて葭戸をすうと開けて、取次に出たのが女子。下女

隣の女

かと思ふと、こは什麼！當家の主婦小夜である。

鼠と紺と淺黄の墨流の縮の浴衣に、羽織は藍納戸の薩摩條の平御召、帯は唐織子と算額の變八端の晝夜で、肉色縮緬の扱帯が慢く細腰を繫つてゐる。

髪は極品の良い天神に結つてゐるのが、洗髪と見えて亂加減に婆娑ついてゐる髪の間から、愛嬌髪といふのが滴れて、有る耶無き耶に淡々と化粧してゐるらしい。然らぬだに美しいのが、夜目には尙更美しさが銷魂的である。

右の手に玉火屋の玻璃燈を撃つて、金剛石のと紅玉のと、黄金の指環が二つ輝く左の手をば三指に衝突して、讓の顔を見ると忽ち、片顔に微笑を含まで、さも懐しげに、

「おや！好うこそ。」と色氣のある清爽な聲を懸けられると、讓の全身は強く一種の電氣を感じて、少焉は骨が綿のやうになつて、肉が石のやうになつた歎の如く、異しく麻痺して其間は氣までが遠くなつたが、直に我に復ると同時に、心臓が躍るやうに鼓動しはじめる。

早速挨拶を爲やうとしても、聲を出したらば頭へるであらうと氣遣はれて、口中が乾いて吭が固着くのぞ、

無理やりに、

「先刻はどうも……、早速今晚……。」

と言はむと欲する所の、殆ど頭字だけを排べる。

美人は此の挨拶の爲にいと々羞しい思入で、

「先刻はどうも失禮なことを……、好こそ、まあ、さあ何卒此方へ……。」

と立つのに牽かされて、讓はやうく玄関に上る。

「さあ此方へ。」と小夜は座敷を入りながら再び案内をするので、おづ／＼迹に跟いて行くと、座敷を通越して椽側に出る。椽側を傳はつて、右へ折れて正面の六疊の間に導く。段通の鋪きつめてある座敷の真中に、四方磨硝子の行燈形の玻璃燈が置いてあつて、好き所に革蒲團、其側に煙草盆、茶道具が片寄せてある隅の小火鉢に、銀瓶がチリ、リ、イと可愛らしい音を立てゐる。

座敷の口に遠慮してゐる讓の膝頭へ、

「何卒貴下此へ。」と蒲團を推着るやうにして、美人は忙しうに出て行く。

隣の女

やがて主婦の出て来たのは、讓が巻蓆の半分も喫た頃である。小腰を屈めるやうにして、含羞かの如く採手をしつゝ、座敷に入ると直に、讓の座側へ行つて、

「貴下、そこでは御挨拶が出来ません。さあ何卒彼方へ。御遠慮を遊ばしちや困りますよ。」と切りに主張つて、挨拶を爲やうとしても一向取合ぬので、已むを得ず讓はやゝ上座へ廻る。そこで先づ宜く初対面の口上があつてから、主婦は火鉢の側で茶を煮る。此間無言中讓は大照に照れて、手の所措も無ければ、眼の道端も無く、否に體を四角にして、後生大事に尺八と譜本を引附けて、無性に煙草ばかり喫す。程無く青磁の碟に煉羊羹を盛て、扇形の象牙の取箸を添へて、紫檀の湯手の方盆に載せて出す。幹山の色

「生憎今日は婢が在りませんので。」と會釋をして復立つ。其間に讓は茶を飲んで、(但羊羹は摘まず)手持無沙汰さうに前後を眺してゐたが、考へれば考へるほど、今夜の粕壁讓といふ者が更に解らぬ。それは解らぬとして措いて、かうして客に来てゐる心地は嬉しいかと謂へば、勿論それは嬉しい。けれども單嬉しいばかりでは無い、氣の張るやうな、窮屈のやうな

な、心配のやうな、其や此やが合體して、自分の解らなき加減、一言以て之を蔽へば、曰く變でも謂ひた

5。

頃の讓の理想といふものは、此主婦と相對の、合奏やら、話やらで、ゆつくりと一日遊んで見たいといふので、其を想ふと悶々するほど嬉しくて、奈何もならなかつたのが、今夜かうして其場に臨むであらう、何故か其半分嬉しく感じない。初めて相對になつたらば、唯戦々してしまつて、碟に口も利かずに別れるやうなことが、ありはしまいかと氣遣つたほど、實際は然までも無い。此も先づ想つた半分ぐらゐである。讓は此不思議に感ひながら、兎も角も早く管を始めたものだ。然すれば馴染もついて、それから打解けられる。かうして何時までもお客様で据ておかれては、否に應まるばかりで、一向面白く無い。度々立たり居たり何を爲てゐるのだらう、と頬を延ばしてゐる間に、主婦は酒肴の用意をして、親ら二度に運んで、

「是に何も御座いませんで、無躰にお待招申しておきながら。」とかねて取寄せておいたと見える料理を、手順好く讓の前に排べる。

隣の女

「どうも是は。」と讓はお手厚いのに驚き、且痛入つて、頭を掻くばかり、何と申上げやうも無く當惑し

隣の女

てゐる最中、

「御免あそばさし。」

と矢庭に猪口を指されて、

「私は一向戴かん方で。」

と両手を一所に膝の間へ挿込む。

「でも貴下お一盃ぐらゐ。」

「どうも初て上りまして、どうも實に恐入りますなあ、どうも。」

と不恰好に手を出して危懼受ける。

「飛でもないことを。」

と小夜は雲州焼の華車な徳利を軽く把て、

酌をする手元の鮮かき。

譲は心に思ふ

やう、實に此酒は戴いて飲まなければ野が中る。これだから何でも人は一藝を嗜みたいものだ、と今更肝に銘じる。

生下月と謂ふのでは無いが、深くは飲まぬ方であるから、譲は早くも海老色に酔を催して、おひく度胸が

据つて来るほど、何と無く面白くなる。小夜も相をして飲むだけのだけでも、例のほんのり櫻色にも出す、

物思はしげに浮かぬ顔をしてゐるのが、美人だけに、夜目だけに、物凄く見える。

譲は密から其を氣にしてゐたが。

「如何か遊ばしたのですか、大層お顔色が悪うございますが。」

と盃を献すのを機會に訊ねると、小夜は慄然した様子で、

「そんなに否な顔色をしてをりますか。」

と俯いて大息をする。譲は此體を見ると、いよ／＼不問には措かれなくなつて、

「御氣分でも御不快のぞ？」

と少しく乗出す。

「否！」

と俯いておながら首を掉る。

「それぢや如何遊ばしたので、何か御心配な事でも？」

と訊ねると齊しく、小夜の明眸は朱鷺色の支那手巾に掩はれて、情緒纏綿たる「沈黙の能辯」は、嬌語の

自ら之を訴ふるより、更に幾倍の明晰と眞率と、沈痛とを以て、無限の愁思を語る。

譲は之が爲に激しく感動して、身を殺して仁を爲す！此人ゆゑならと謂ふ氣に奮然となる。

「何か御心配な事！お差支が無いなら伺ひませう。及ばずながら私も……。」

隣の女

隣の女

と力を附けられて、小夜はやうく涙を拭ひ、

「御深切に難有う存じます。始めてお目に懸かりまして、寔にお慰かしいことを……。」

と言ひつゝ讓の顔を凝然視て、又萎れかへつて俯いてしまふ、言はうか、いつそ言ふまいかと猶よかの如く。それで讓の神系は益興奮して、是非その胸中を聴かなければ、一寸も此座を動かまいと謂ふ氣色で逼る。

「お差支が無くば仰有つて下さいまし。」

小夜は纒に顔を擧げたが、見合せるのが羞しいのか、直に他を向いて、力一杯に手巾を拵りながら、

「一見のお方にこんな事を申し上げて、はしたない女だと御侮蔑めそびすか存じませんけれど、あの、貴下は私を何だと思召ます？」

「何だとは？」と讓は其意を得ぬ。

「あの、かうして在ります私の身分でござりますよ。」
と思ひ切つて言ふ。

後家か、娘か、妻か、妾か、但しは高等淫賣か、明かに其何たるやは讓は知らぬ。けれども察するに外妾

とは、十に九まで外れぬ所と鑑定はしてゐるが、面を向つて「外妾」とは言ひ難い。然ればと謂つて、滅法界な臆説を言散かして、お茶を濁すわけにも行かぬので、進退谷まつて、まじくしてゐるのを、小夜は其と見て、

「お話をいたすのもお羞かしうござりますが、私は唯今では人に圍はれてゐるのでござります。」

「は、なるほど。」と讓は迷惑さうに挨拶する。

「其に就きまして、色々私も苦勞が……。」

と小夜は心が一杯になつて、そのまゝ姑く黙つてしまふ。讓は肅然と容を正して、

「は、なるほど。」

「私は人の妾などをいたすのは、もうく否でくならないのでござりますけれど、両親は疾に御坐いませず、一人の兄と申すのが、仕方の無い厄介者で、今の旦那といふ人に、私の身をまゐ賣つたも同様な事をいたしましたので、否といふことも出来ませんやうな義理で、かうして圍はれてゐるのでござりますけれど、私のやうなものでも少しは女の道ぐらゐは存じてをりますから、いつまでも此般な真似をしてをりたくはござ

隣の女

隣 の 女

いません。何卒いたして親の名前を汚さないやうに、裏店住居をいたしましても、堅氣に所帯を持て暮らした

「裏店住居？怪からんことを。貴方がいくらお住ひなさりたくても、世間が承知するものですか。」

譲は爲たり親で、人情本に在りさうな言をいふ。

「おや、何故でございます？」

と小夜は眞面目の奥で笑つておるやうな。憎くない顔をする。

「何故でございますか、私のやうな化物が、そんな意氣な事を知つておやう理はございませぬ。」

「御存じの無いのに、唯今何故おつしやいました？」

「私は知りませんが、世間で然う申しますから。」

「ぢや其をおつしやつて下さいませね。」

「知りませぬ。」と猪口を取て、ぐつと飲む。

若い男女が對座で、此般に千語るのを、實地に於て曾て見たことも無い譲が、一躍して情人の位置に立つ

隣 の 女

て、剩さへ繪にあるやうな美人の活物を前に置き、多年空想し、妄想し、夢想せし腦裏の顯象を、實體的に直覺する其の心地は、本人と雖も説明することはなるまい。矧や他人の筆が、其十が一だに描得らるゝ理のものでは無い。

理非の分別も、前後の思慮も、激昂したる感情の爲に無茶苦茶に攪亂されて、譲の眼中唯小夜の姿あるのみで、其心には此戀を物にしやうといふ了簡ばかりである。

「此方ではどんなに憤ひましても妾でも、したやうなものを、堅氣の人は相手にしてはくれませぬから……」

と獨語のやうに言つて鬱々。

「相手にしたら如何なさいませぬ？」

と譲の眼は熱心を耀かして、その聲に異常な調子が響く。

「堅氣の人でございますか。」

と小夜も容を正して、眼を睜つて、思はず膝を進める。

隣の女

譲は「卑氣の人」と領いて、

「ですが、それこそ裏店住居同様の貧乏人ですよ。」

「身分は？」

「平凡官員！お否でせう。」と冷かに笑ふ。

「誰が否だと申しました。」と佛然とする。

「大方お否でせうと存じて。」

「勿體ない。本當に然ういふ方が有るのでございますか。」

「いよいよ眞面目になる。」

「有ります、有りますけれど、大變な顔でござりますよ、宛然化物のやうな。それは酷い醜貌！」

「容貌を望みなら、私は始めから役者の處へ参りますよ。殿方は何も容観で立てるのぢやござりますか。」

「それでも餘り醜いのは……。」

「宜しいぢやござりませんか、心ざへ頼もしい方なら。」

「貴方のやうに然うおしやれば何ですれど、世間は然う参りませんよ。」

「世間は如何でも、私が可しければ可しいぢやござりませんか。」

「信實然ういふ思召なら、お氣に入るか、入らぬか知りませんが、私が一人御紹介申しませうか。其男は貴方を能く存じてをつて、實は、その、疾から、及ばぬ戀ですけれども……。」

小夜は手巾の端で拵つ眞似をして。衝と横を向いて、

「存じませんよ、そんな事を。」

「否、實際！それを嘘だと思召すのは餘りです、實際なんですから。其は實際です。」

「どうも難有う存じます。貴下から宜しくおつしやつて下さいまし。」

「それぢや嘘なら嘘にして措きます。」

「そら御覽あすばせな。」

「でも本當にならんから。」

「そんな事が本當に……。」と手巾で顔を掩す。

隣の女

隣の女

「其が嘘か、本當か、後で判りますから、まあ本人を御紹介申しませう。」
「貴下がお媒妁？」

「はあ私が……。」

「それでは……。」と言ひながら不肯々々を爲る。

「私の媒妁ではお氣に召しませんか。」と男は佛然して見せる。

「貴下のお媒妁では、どうも……。」と女は當惑して見せる。

「さういふ次第なら御周旋申しますまい。」

とまつぱり言はれて、小夜は捫々としておたが、

「あの、甚だ失禮なことを伺ふやうでございますが、貴下は奥様は……。」
と折返して婉曲に持懸ける。讓は胸悸々。

「私一寸御覽になつても知れさうなものぢやございませんが、貴様はお人が悪い。
人か悪いと容められたのを、小夜は思ひも寄らず、驚いた風情で、

隣の女

「何故私が人が悪いのでございませう。ですから失禮なことを伺ふやうでございませう……。」

「どうぢやございませせん。考へても御覽なさいませしな、私のやうなものゝ女房になり手がございませうか。」
と席を拍いて驚しかけると、小夜は呆れ顔で、

「まあ、あんを事を……ぢや未だ、あの、お算居でもらつしやるのでございませうか。本當に……あの本當でございませうか。」

「本當なら如何なぞいませう。」と小夜の顔を心ありげに覗める。

「本當なら……。」と情を含んで忽ち面を背ける。

「本當なら……。」

と讓は勢に乗じて、百尺竿頭一步を進める。

「本當なら……。」といふ聲は、前より二音階も低く、時ならで紅葉する顔はいよく俯く。

讓は五體の肉が今にも破裂するやうに蓋いて、内には勁々の氣が舞して胸は劈けるかと思はれる。眼色は輝

隣の女

「本當ならば」 と我を忘れて詰寄せる讓の膝は、小夜の羽織の袂を踏敷いて、却合立つ呼吸は湯氣を吐懸けるやうに、ほかくと暖く女の頬に感じられる。

出来るだけ身を控めて、一心に手巾を握緊めておた小夜の手が、忽ち跳るよと見る間に、讓の左の小指が俄に燦然として耀きわたる。怪、怪！何か抑と見れば、其光物の白いは金剛石！金色に見めくのは黄金の指環である！天からも降らず、地からも湧かず、唯の今、小夜が左の點紅指に、紅玉のと相隣つて寵を争つておた爾の指環である！

小夜は讓が「本當ならば」といふ疑問に向つては、一言の答も與へなかつた其代に、此指環をば取つたのである。

指環を覗く！其は指環では無い、假に指環の形を成したる小夜の心、小夜は心を讓に覗つたのである。小夜は心を讓に覗くと同時に、くるりと背を向けて、正體無きかの如く岸破を伏してしまふ。

燈火の光は讓の呆れた顔を無遠慮に照らして、色男は是でござい！といはぬばかりに意地悪く縮んでゐる。姑くは惘然と、寢眼で金剛石の指環と小夜の後姿と見較べておたが、まだ半は夢心地で、

「貴方、これは本當でございませうか。」

と其聲阿波縮の如し。小夜は此時やうく顔を擧げたが、なほ燈影を怯れて、忍びやかに肩頭から讓の方を顧みて、

「嘘に貴下、そんな事が……。」

と言ひかけて復俯く。

(十七)

夜は森として十一時に近く、杯盤の既に狼藉たる座敷には、微黯い玻璃燈が悄然と、覺束なくも夜を守つてゐるばかりで。二人は何處へ行たのか、影も形も無い。

大分更けたから讓はもう歸つたのかと見れば、革蒲團の前に巻蓑入が洋銀縁の口を願の外れたやうにあんぐり開て、譜本と袋入の管が其側に置てゐる。小夜の座の迹には、持つて出た時には小皺一つ無くて、どつしりとしておた支那手巾が揉苦茶になつて、斑斑漏つてゐるのは、酒やら、涙やら、羞しい汗やらの名残と想はれる。其が打遣たやうに遺してゐる。二人とも一寸立つたと見える光景であるが、二階にも、樓下の

隣の女

隣の女

座敷にも、一向人の氣勢が無い。忽ち見る一道の火光！細長く隠々として襖の隙を漏る一室の内に、私語する聲が、四邊の寂寞の爲に、種々の反響を受けて、。。。。。。此一室は丁度かの六疊の真横に當つてゐるが、其方から見れば、此處に間があらうとは想はれぬやうに建ててゐる。六疊の入口の横は、四尺ばかりの板敷になつて引込むでゐる。その正面が壁で、横手に押入と見え、三尺の扉がある。其を開けると、三段ほど低くなつて、母屋から續いてゐる様に出られる。出て右手の正面の間が四疊半の茶席で、ここに二人が密會してゐる。

凡そ二時間といふものは、その私語の聲が殆ど途切れなかつたが、やがて出て来るやうな物音して、入口の襖に人の觸れる響がする途端に、小夜の聲で、「貴下、後生ですからねえ。もし此が割と……、ほんとに可うございますか。」

と襖が開く。前に小玻璃燈を把て出たのは小夜である。雨に敲かれた花のやうに色も香も失せて、無慙に憔悴した顔をして、満心の愁は眉宇の間に溢れてゐる其裏に、一種陰險の氣があつて人に逼る。讓の顔は全く土氣色をして、紫色の唇が顔に通して、まよとく瞳の定まらぬ様子は、痛く心に慄るゝ所あるが如く、

歩く氣力の無いのを、無理に歩くのが、髻髻曳きさられるやうである。

二人は椽傳ひに母屋の方へ行て、物置部屋の前に小夜は立住る。振返ると讓は胴頭をしてゐる。

「貴下困るぢやございませんか、そんなに戦々なすつちや。貴下本當に堅忍なすつて下さいませよ。」と勵ます女の聲も顔へる。

「だ、だ、大、大丈夫……。」と退歩をする。

「貴下、本當に、後生ですから、堅忍なすつて下さいませよ。」

「よ、よろしい、よ、ようございませす。」

小夜は襖に手を懸けると、目を瞑つて一思ひに曳開ける。すうと唐紙の軋る音を聞くと、讓は慄然と顔ひるがる。

小夜は委細構はず入つて、古置笥の角に燈を載せて、其側の長持の蓋に手を掛けて、

「箱壁様、さあ早く此方へ。ええもう何を爲ておらつしやるんですねえ。」と怨めしげに睨められて、讓はひよろ／＼、ざる／＼、やう／＼の想で小夜の傍まで來ると、

隣の女

■の女

「一寸手をお假じなすつて。」

「ここ、此中で、ですか。」

「まあ何でも可うございますから。」

と二人懸りで長持の蓋を取ると、人の顔が出る!!

最期の苦悶を今も其まゝの死顔一年紀は三十二三と見える、血氣盛の、丈夫さうな、髭を生じた男の死骸

が、寂然として長持の中に横はつてゐる。讓は一目見ると、消入るばかりに驚いたが、此期に及んで逃げる

こともならぬので、今にも泣出しさうな顔をして、唯途方に暮れてゐるのを、小夜は流眄にのけて。

「貴下、今更否だとおつしやつたつて、私は肯やせんよ。」

と其眼色に十分の決心が見える。此一言は、鼻頭へ白刃を突きけたも同じほどの凄味で、絶體絶命までに讓

の心を脅かす。彼を謂ひ、此を謂ひ、重ねぐの恐怖に、讓はとどまぎして頼に訴も出ぬ。小夜は氣が立

つてゐるから、一秒の餘隙をだに與へる情も無く、憤つたさうに聲を擧げて、

「奈何して下さるんですねえ。さあ早く爲なけりやしませんよ。」

と矢庭に男の袖を捉へて、痾癩紛れの方でぐつと曳張る。跟跲と前へ懸かつて小夜の肩に撞當ると、捉まへ

て二つ三つ劇く小突いて、

「まあ、もし確平なさいよ。」と嗔みつくやうに言ふ。

「よ、ようど、さ、さいます。」と讓は益額倒して、ひよいと長持の中を覗くと、一陣の腥氣が鼻の

心を買くやうに滿じる。

恐怖と驚駭との爲に讓は、全く心を奪はれて了つて、自分が自分の身軀を支配することが協はぬ。唯小夜が

指圖通りに手足を動かして、死骸を長持から出して、敷紙の古いのに裹むで、其上を有合ふ細引や繩でぐる

ぐる巻にすると、宛然花火の筒を轉がしたやうである。

其を明黄の夜具風呂敷に包むだけは包むだけれども、大きくて、長くて、突張つてゐるから、如何とも爲様が

無い。

筒大きくて、長くて、突張つてゐて、爲様の無い持餘し物を讓は背負つて、隅田川へ水葬して來なければなら

ぬ、今更否でも應でも、其が約束であるから。いかに惚れた女に頼まれたからといつて、此般事を滅多に積

■の女

隣の女

合ふ者は無い。兎にも角にも其を請合ふといふに就いては、なるほど無所據義理などに絡まれたのであらう。然矣、小夜は譲と友白髪ともしろがみの末懇すまじけて女夫おとこにならうと堅い約束をした。今年一ばいは情夫いじろで逢て、明ければ暇ひまの乞こへる都合であるから、其から何處ぞに所帯しよばいを持たうと迄話はなは出来たのである。而して小夜の言ふ所に據れば、衣類ばかりでも二千圓が物はある。其外あまた髪かみの飾かざり、指環ゆびわみ、時計等のやうな裝飾さうじ品ひんが千五百圓ほど。正金まがねでは千圓足す持てゐる。暇ひまの出る時には涙金の五百圓は確たしに貰もらへる。此家作も自分の所有もつである、合計凡五千圓の持参もつだ、此美人が女房にならうといふ、其に少しも詐まがの無い證據しるしには、金剛石の指環もあれば、まだ其外の事もある。

扱此迄に運んでから、小夜は水葬一條の秘密を明かして、信實可愛く思つて下さるならば、他人では無い女房の難儀がたがたを救つてくれと、義理責よきことにしたので、其に就ては、死骸しがいの頭末あたまを話さなければならぬので、小夜は、無能漢むねんかんの此兄このあにの爲ためには、從來これまでもどんなに苦勞も迷惑も爲たか知れぬ。此方こつちへ来てからも、三日に擧げず貸かせで来る。それが生憎あいたく此近傍このまはらに巡查しゆさを勤めてゐるのであるから、いくら斥はねても煩うるさく附絡つきわづらふ。昨夜も酔よて来て強請ねだつたのが發端はじまりで、少しばかり言合ふ内に、無法むぼうなことをして逃げやうとする機はしに、二階ふたばいから踏外ふみはずして庭

の敷石で頭腦あたまを撞ぶつて即死すなはちをしてしまった、と涙ながらに話されたので、譲は一圖なに此死骸しがいは例なの無賴漢むらいかの兄あにとばかり信じて、情夫まよのまの字も疑うたがはなかつたけれど、此死骸しがいは實まことに佐々木巡查である。

過失あやまちとはいひながら、契ちぎを結んだ女の手てに懸かかつて、無慙むぜんの最期さいごを遂とげた其果そのはが、反古はなごに襲おそまれ、繩くで括くちられて、精靈しやうりやう棚たなのお飾かざりのやうに、無雜むざ作さくに川へ流ながされて寂滅じやくめつとは、色男いろおとこの末路すゑぢも亦た憐あはれむべきものである！

* * * * *

それから二日目の朝、厩橋うまはしの河岸がしに書生體しやうせいの死骸しがいが漂なほ着ついた。左の小指ひだりに金剛石ダイヤモンドの指環ゆびわみを嵌はめてゐたといふので、事情わけあるらしく争まつて小新聞の三の面が報道した。其後二週間も立たぬ内に、小夜は築地邊へ妾宅めかけを移して、今も不相戀あひからはず麗うるはしいと聞く。

(終)

隣の女

隣の女校訂を終りける
日戯によめりける

よく暗る

男待たるゝ

涼かな

(一)



一素封の奥方、田舎住の徒然を慰むる御敵手求めらるゝよし。其者は齡十七より廿歳迄にて、素性賤しからず、容貌も醜くからず、氣質は温良、普通は書讀み、物書き、諸禮といふほどの事は無くとも、行儀正しく、琴、三味線のいづれか習熟あるべし。月給は八圓なり。なほ神妙に勤めなば、彼方の親類分にして、相應に支度させて、良しき方へ縁附かすべしとなり。環行きて見ぬか、と叔父なる人の仰せられけり。

叔父とは名のみにて、骨肉にはあらず。此家に嫁きたりし叔母こそ我亡母の妹なりしが、疾に鬼録に入りてければ、今此身の寄れる叔父母夫婦は、空似もせざる他人にて、まことの両親は、我身が十四五の年相腫いで赤坂の土とはなりたまひき。偏り遣されて寄邊無かりしを、叔母なりし人不便がりて引取りたまひ、他人の叔父も情深く、實の娘のやうに愛しみたまひけるなり。

叔父は年久うさる私立銀行の支配人を務めたりしが、睦しう交りし人に欺かれて、負債山の如く身一個に崩かたり、さまぐく憂目の果は、小石川の奥深く日陰者になりて、借家の荒庭花に色無く、雨降らぬ晴も曇り不言不語

不言不語

で、家内濕めりがちに暮せる中に、叔父は取分面福れ、卒に白髪も目立ちて、月々の支拂も苦きまでの身の上とはなりたまひけり。

世盛の頃は縁談の數々有りけるを、叔父は我身を愛みたまひて、彼にも此にも與れず、志す方は、白耳義といふ國に留學中の人、若けれども才學勝れて、末頼もしと見立て、其親とも談合し、書信にて彼方へも通じ、粗、其事に極まりて、十八の春には通れ奥様と喚めきしに、不慮の事起りて、遽に這般の仕合となりければ、其沙汰も烟となり、内々支度せし衣類は、箆笥三棹、長持、葛籠にも餘りたりしを、幾度か崩黄の四布風呂敷に裹まれて、餘所なる藏へ預けられ、縋に残りたるは、箆笥一つに輕し。

それを歎くにはあらず、悲くもなじ。親には別れ、家は絶ゆるほど、我は固より不幸の身に、かねて此世は果敢なきものに諦めたれば、此縁の結ばらぬも縁なり。唯傷はしきは恩人の身の上と、旦夕そのみ心に懸りて、此家今にも再興の榮を、唯管諸神諸佛に願奉りしが、難、進、愈打、續き。活計は日増に不如意となりつけ、女の身に生れたるが口惜き折から、心嬉しく膝を進めて、その奉公是非にと望めば、叔父は涙を擧げて、頓に辭も出でざりしが、良ありて、環、恕してくれ、と面を背けたまひけり。

惟へば今の所帯は一人口も重荷なり。さるを我身奉公に出でなば、月給といふものあり。過半それを此方に取らば、然こそは米鹽の資ともなるべきにと、我は平素の恩に酬うべき時の到れるを、歡ぶ氣色叔父には恨めしく、いと聲を曇らして、環、其方は泣かぬか、心強き女なり。叔父は娘ほどに最愛き奴の、此花盛を嫁には適かた、奉公に出づる不幸をば泣くぞ。世間不知を稱人へ出して、可哀や苦勞とするを泣くぞ。五年の恩愛、今日の別離、これ出世の首途にしても、人は必ず泣くべきを、零落るれば恚く情なき目にも遇ふものか。我は泣くぞ。亡叔母の分までも泣くぞ、と猶泣き給ひければ、我も漫に得耐へずなりて、聲を立て、疊に伏して、叔父よりは泣いたりき。

(一一)

年の内に談急遠調ひて、行先は澁谷村の奥に笠原とて聞ゆる大家なり。

正月二日雪のちらつく夕暮、目見にとて尋行けば、四十歳餘の老婢出でて取次ぐ。導かるまゝに引添ひて、玄關側より、臺所を右に見て母屋へ通ふ廊下を過ぐるに、異しくも卒に胸縫からず、牢屋などへ行く道を通るかと思はれて、心細かりけり。

不言不語

不言不語

それは家の廣きに人氣少く、加へて曇れる空の夜に入らむとするが爲のみにはあらで、此家の内には何等の子細ありて、かくは恐じき心地するにはあらざるか。

夕暮の暗さも、餘所よりは一際哀に暗く、燈火の影も、餘所よりは光弱くて眠れる如く、寒威は戶外より身に浸みて、意地悪さまで耐へがたなし。此心地、譬は、不祥の事ありて。涙に打濕りたる宿に在るが如きなり。

固より然ることは有るべしとも思ひがけず、又有りとしも聞かざるに、不思議は此家に入ると齊しく、心傷ましく、悲しく、果敢なく、恐ろしく、寂しく。やがて母屋に遠からぬ六疊の間の小奇麗なるに案内されるが、かねてより待受けたりと見えて、手爐には湯沸を架け、茶道具も排びたり。

風暴れて硝子窓を鳴し、雪は降りぬ。家の内も外も正月二日の夜には似ざりけり。思へば其よりも我身の上こそ猶と胸塞りて、有繋に固しきは小石川の空なり。

齡こそ廿歳なれ、今日を初奉公の心元無き、船は置去の孤島に、途方に暮れたる氣色をば、かの老婢憫みて、紛ることもやと、打解けて話しかけ、或は慰め、或は勸る。自から其舉止言語に實意も見ゆるに、笑

ふ口元の、亡くなられし叔母に能く肖たるほどなほ頼もしくて、名を問へばお増といふ。

我は四邊を眺して、三ヶ日と申すに、此寂きことわと呟けば、お増は頷きて、實に此家の寂さは、三百六十

五日いつも變ること無し。世界の果には夜の國とて日の影を見ぬ所もありとやら。申さば此方は夜の御館、餘りの寂さに、此婆も堪へかねて。齡よりは白髪も多し。若き御身には一月の辛抱も先は難しき所なり。然

れども、それをだに慄へたまはば、御主人は御二方とも善き御方なれば、未々御前様の御身の爲、必ずく悪きことあらじとは、合點のゆかぬ詞の端。それほどまでに寂き所以はと問へば、それには段々子細もある

やうなれど、私等の知ることにあらず。長う居たまはば其間に、とお増は冷々に笑ひぬ。

馴染もあらぬ人なれば、根問も不躰がましく、少時話の途切れたる窓に、さら／＼と雪吹きつけて、楢の鳴る音も凄く、奥の方なる喚鈴の音は、死にたるやうに靜りたる家の内に轟きわたりて、恐ろしき響に肝を冷せり。

お増は然も無き氣色にて身を起し、あれは奥様の御召、御前様をお連れ申せとの御意なるべし、と急ぎて行きしが、やがて立歸り、襖の外より、さあ此方へ。

不言不語

不言不語

微なる雪洞の影を傾に。暗く冷かなる廊下を傳ひて、燈無き座敷を二間越ゆれば、奥の一間より優しき咳の洩れたり。

お増は立寄りて襖を排き、國の外に跪まりて、お連れ申しましてござりまする、と聞ゆれば、柔媚なる聲音にて、此へとありけるが、我はお増の背後に控へたるに、入口には二枚折の屏風の立ちたれば、奥様の姿は見えず。お増は振り返りて、此へお入りなされまし、と席を片寄せつゝ縁に座敷へ蹴入りぬ。

我は大人氣も無く心怯れて入りかねたりしを、お増に促かれて、やうく屏風の陰を出れば、俄に夜の明けたるやうに玻璃燈の光輝きて、残る隈無く姿を照さるゝに心地惑ひ、倒るゝ如く座に着きて、人の影も、座敷の模様も、見るに遠無く頭を叩れば、そこは端近なれば、遠慮無く此へと聲を懸らるゝ後より、御遠慮無くお進みなされまし、と逐立つるやうにお増も言ふ。

次且と稍進めば、なほ容されず、寒ければとて火鉢の傍まで引寄せ、雪の事、途中の事など懇に訊ねらるゝ。此間にお増はいつか引退りぬ。

奥様は手づから茶を煮れ、菓子を挟み、萬般の待遇、口氣まで、我をば心易立に、少しも主人親はしたま

はず、打解けて物おぼせらるゝより。氣の置かるゝも然までならず、始めて浸々と御様子を見るに、二十二とは聞けども二歳は若し。凛として美しう、高位の奥方などに備りたる品なり。黒縮緬の小袖に白を襲ね、夜會結にして、馬車などに召したらば、然ぞと想はれたり。

輪の大きな天神に牙彫の中挿、蒔絵の挿櫛。召物は銘撰なるべし。下着は更紗絹、友禪の胴着、半襟は藤紫に小さき縫あり。羽織は小紋縮緬の稍古りたる。帯は黒縹子と縹珍の腹合なり。是此家の奥方にして、三夕日の服装にはあらず、御不斷着なるべし。

面長にて色白く、頬の邊、微く贏れたり。頸長く、髪濃く、華車なる姿の好さは繪にも寫す可く、我等は相對も愧かし。見参らするほど目鼻立離の言所無く揃ひたまへるが、唯怪きは、其美き中に春の夜の月の如く曇れる所あり。それは天成の疵とも見え、何事か心に思惱める色の自から容に露るゝが爲す業なめり。御顔の此曇こそ、此家の異く寂しきには似たれ、と不圖思ひつきたりしより、もじや其と此と關係のある事もやと心には浮びたりき。

此御方を見参らするもの誰かは美しと見ざらむ。美しと見るものゝ誰か又此曇をば異まざらむ。著るは此曇、不言不語

不言不語

疑はしきは此曇なり。

田舎住の徒然を慰めむとて、御合手の欲まといはるゝは、此曇のあるが爲にはあらざるかとも疑はれしに、奥様は然なり、と言はるゝも同じ事をば仰せられけり。

この二三年病ふといふほどの事は無くて、唯氣の閉、心の鬱結、積りくつて、胸は毎日に切なく、身は次第に衰へて、世の中樂しからず、生効も無くて今日を暮すのみなり。疾病といふにあらねば、醫藥は驗無し。頼むは明日より我身の友となりて、この憂をば憂させよ。かゝる邊鄙なれば、何事にも自由は利かず、これぞと面白き事も無ければ、賑しき地に住馴れし人には愁かるべし。其代には、其方の身は其方が思ふまゝの處置、奉公人とは思はず、客分にて氣樂に遊べとの御辭なり。

世間は廣けれども這箇奉公のあるべきや。冥理のほども恐しう忝なく、到らぬ身の私、御合手にはなるまじければ、御心に稱はぬ節は誇々仰せられて下さりまし。及ばぬながら御奉公いたしまする心底と申せば、奥様は歎ばれて、明日は田舎の馳走すべし。夜なれば何も無くてと、更に菓子の色々取出し、手調の細工物など見せむとて立たるゝ時、座敷の外に人音して、徐に襖を排くものあり。

我も奥様も齊く其方を見向けば、男子の悠々と入來るなり。奥様は其姿を見るより倉皇坐に復り、呼吸をも疑し給ふかと思ゆるまで、驚怖れたる風情にて、身を凍めておたまへり。奥様のかくまで怖れたまふ此男は、何者なるかと我も恐しく、忍びやかに其人を打噴りたりしに、衝と我傍に進來りて、語氣温乎に、環殿とは其方か。我身は主人なり。かゝる日に遠路を好くこそ、と火鉢に手を醫しつゝ、我面を視たまひぬ。奥様は我身敷きたまひし縮緬の襦を取りて、裏返して薦められけるに、且那様は見も返らず、又敷かむとも爲たまはざりき。此間奥様は一言も仰せられず、唯打萎れて、且那様を覗くが如く見たまふのみ。

辭も懸けさせたまはぬのみか、其方へは眼も轉れさせられず、思はしき者の傍に在るを、且那様は不興の體などのやうに見たり。三十二三にやなりたまふべき。長高く、肉緊り、色淺黒く圓顔にて、凜々しき裏に得も謂はれぬ愛らしき所あり。願の邊、微に背く、八字髭麗しう生ひて、頭の髪は春の海の浪などのやうに梳馴したり。糸織の小袖に白茶縮緬の兵兒帶、御召縮緬の長羽織、男子にしては稍媚ける縮柄なりき。襦袢の下に白フラネルの襦袢見えて、霜降莫大小の下袴を召したり。

主人と聞くより席を退りて、慇懃に挨拶すれば、氣輕に應けて、愛相など言はるゝ様子は、奥様への待遇と

不言不語

不言不語

較べて、別の人のやうに思はれぬ。

やがて茶を薦めたまひて、奥様おほせられけるは、今宵は徹夜降るべし。明朝は此へ庭の雪見に御越ありて、御肴には環殿の琴を、と我を見て寂しく打笑み給へば、雪見は我書齋にて足れり、と旦那様は苦々しく空嘯く。奥様は返す辭も無くて、例の俯きて便無げに萎れたまふ。

此爲體見る目も氣毒にて、我までも手持無沙汰に控ふれば、旦那様は例の此方へは優しく、小石川邊の事、實家の事、身の上の事など精細に訊ねたまひて、答ふる跡より續けて話懸けたまふほどに、絶えず物語るは旦那様と我身にて、奥様は此に在る効も無く除け物になりて、彼方に獨り傷しう打沈みておはするを見れば、何かは知らず我心煩に疚くて、願くは奥様も俱にと、幾度か話柄を狂けて物申懸けしに、いつも猶ひて御答の遅ければ、旦那様は横合より奪取りに、再び我との話に復したまひけるなり。

我力にては及ばず。唯此上は多く物言はぬが可と念ひて、十言おほせらるれば一言ほどの御返事を申すばかりにて、我氣色奥様に氣を兼ねると、旦那様も御心着かれたるやうにて、やがて立起りたまひつゝ、今日は疲れたるべし。蚤く寝されよと、我にばかり目禮したまひ、奥様には始終一言もおほせらるゝ事無くて、此

坐敷を出でたまひぬ。

其跡には、召されざりし茵の側に、手にだに觸れたまはざりし茶は、赤く濁りて冷えたり。燈火の斜に照せる奥様の御顔は、枯骨の如く白くなりて、馬も馴れぬべき思を唇に咬緊めつゝ、眼には秋の草葉より紫く露の宿るを見たり。

我は茵を取りて參らせ、かの茶碗を盆に移しけるを、奥様は不圖御覽じつけて、速に急來る涙を拭はせたまひけり。

まだ御馴染も深きに、立入りて様子を問ひまゐらするも野なしと思へば、何とも申上ぐべき辭無くて、燈火の下に奥様の萎れたまふを、心許無げに打噴りつゝ、かく御間の不和なるは何に因りてか、と先づ思廻されたり。

人目をも憚りたまはで、旦那様の酷しう餘所々々じき御待遇は、此事の根柢淺からぬ證なるべく、なほ奥様の旦那様を憐れたまひて、櫛子の片隅に潜むが如き様子の見ゆるなど、愈此御不和の容易ならざるを表せり。

不言不語

不言不語

僻目かは知らねど、美しき御顔に懸れると謂ひし、彼思しき憂の、此時益甚しくなれるやうに見えれば、或は此が其因にはあらずやの疑も起りぬ。

我若奥様の御身にあらば、之が爲には親も慕ふべし、心も亂るべし。其にて已むべきか、遂には玉の緒も絶えぬべきを、此愁色に出づるなどは未だなる事なり。

夫婦の契は、我等處女の身の知るべきにあらねど、世に此上はあるまじう樂きものと聞けり。憂は互に慰め、苦勞は二箇に分けて、妻の眼に涙あれば夫の袖も濡れ、夫の胸の痛む時は、妻の心も憫むといふなるに、見参らせし御間は、之をしも夫婦と申すべきか。路上に往來ふ人と雖も、かくまで冷淡に情無きはあるまじきなり。愁ひ添ひて體様に疎しくありたまはむより、引別れて氣易く在さむこそ、なかく優らめ、と笑止にも思ひまゆらせけり。

奥様は旦那様を見給ふこと、匹似小鳥の鷹に遭ひたる如く、旦那様は又腐れたる魚の腐などのやうに、奥様の御傍をば嫌はせたまひつ。同一の棟に起臥を俱に遊ばしながら、心と心は千里を隔て、夢にだに面影の逢ふことあるまじく、これ名のみ契、繪に畫ける花鳥の、さては春を樂まむやうもあらど。深山の奥深く

荒磯の果は遠くとも、夫婦の睦しう住みなす方は、世界の何處も皆都なり。田舎住の徒然なれば、其御合手との御望なれど、御顔を曇らす御心の雲の晴れたまはぬ間は、天上極樂の都に七珍萬寶の家造して、千萬人の御合手錦の袂を翻し、妙なる樂を奏せ、終日通宵御慰め申さむとも、御心の樂むこと片時もあるべからず。ましてや不肖なる我身一個何の御慰にかなるべき。却りて今のやうに、我にのみ傍う辭など懸けさせらるゝにつけて、いと憂き思を爲させたまふばかりなるべし。

いかやうの事情ありてかは知らねど、然ばかり睦しからぬ御間にありながら、御離縁の沙汰も無くて過ぎさせたまふまでの御辛抱もあらば、なるまじき所をも枉げて、御互に御堪忍遊ばされなば、固より御縁ありて夫婦にはならせたまひし御間なり、いつか御心の端より解初めて、やがては御愛き舊に復りたまふべし。我身は徒然の御合手にとて御奉公に参りたるが、その徒然の遺箇徒然とは思ひも寄らざりき。然れども一度参りたるからは、何處までも御合手となりて、御心を慰むるが務なれば、覺束なけれど、あはれ此御間を舊に復し、睦しう並ばせたまへる御二方の前にて、愛でたく御暇賜らむやうに爲たし。之に越したる御徒然の慰藉はあるまじく、此御間を和げまゆらす外に、環の奉公はあらじと思定めたり。

不言不語

不言不語

床の間の置時計十時を打てば、奥様は物思はしげに俯きたまへりし御顔を擧げて、もはや行きて寝み給へ。明日はゆるく語る事あり、遊ぶ事もありと仰せられて、お増を召して、我をば寢間へ送らせたまひぬ。座敷を出で、例の坑の如く踏き廊下を行けば、二人の足音静に踏めども物凄き響をなして、怪き物などの尾るにやと、背後の見らるるに、風吹荒みて、窓打つ雪の聲々、振亂せる髪を牽くかと氣味悪く、忽ち人を驚かして鼠の騒ぐ方を見遣れば、廊下を右に折れて、三間ばかり彼方に、何處よりの燈火か、いと微に映したり。

お増を引住めて、あれはと訊ぬれば、御二階の昇口、且那樣の御居間と答へて過ぎぬ。御間不和の所以は大方お増こそ知るべきなれ。それ捜るべき便此人の外にはあらず。左右は餘所事にして糺さばやと思ひて、今宵旦那様にも御目通せしに、御人品、大様なれども騒り給はず、男らしう凛々しけれども可怖からず。やさしき御言語、快潤たる御様子、何につけても申さうやう無き御方らしけれど、唯一心得ぬ事ありと語れば、お増は苦笑して然もあるべし、傍觀にも實に御惻しく、効無き御間とばかりにて、重ねて何を問へども、此事に就きては洩さざりき。よし今は洩さずとも、渠の知ることならば、我此に一月在ら

不言不語

む間には、強ひて問はでも、自から其口より迂る時あるべしと思ひぬ。枕に就きたれども、頃には眠りかねたる心の中に、百端の事湧出で、解くは苦き絲の紊亂も、捉へむとする唯一筋は、御間不和なる原因なり。之を知らずは、御奉公を爲べきやう無し。まづ其秘密をこそ探らめ、手段は如何にしてなど考へたりしに、不知想は然らぬ方に馳せて、推測に其原因を捏造したるが、四つ五つもありけり。中には有理と覺ゆるもあり、又拵過ぎたりと思はるるもあり。其一々を爰に言はむも可笑かるべけれど、固より推量に過ぎざれば、憚多き事もありて、言はれず。初奉公の日は齡少きもの皆泣く。其身の心細く、生家の事のみ戀しうて、逃げて還らまほしう堪ふまじきものとは、かねでも聞き、然もあらむとは我も思ひ、宵のほどは實に、獄などへ繋れたらむ心地もせしが、御二方に御目見申せしより、生家の事も、初奉公の身も忘れ果て、箇異き御不和の有様のみぞ存に心には懸りける。

自ら何故とも知らざれど、我は飽くまで此秘密を探り、此御間を和げむには、力の限盡して厭はじとばかり念入りぬ。不思議といふも愚ならずや、我は彼方に何の由縁あるにもあらず、而も恚まで深く思染みたるは、

宿世何とてか契置さけむ。

(三)

雪は徹夜降りて、明れば正月三日なり。始めて門口に心着けば、松も立てず、注連も張ず、坐敷には輪飾の影も見えず。有恚る例門徒の家には有りとか聞きしが、眼前視るは今なり。いと寂しく、不吉らしう、恚ては春も来ぬやうに覺えて、此由来をお増に問へば、御家例とて毎年此通とばかり。

窓に一面の日影、何所とも無く梅匂ひて、獅子舞、鳥追、鼠の廻り、羽子つく音、門には禮者、絹裏の肌觸底寒く、起居の忙さをこそ春とは覺えしが、今年の春は死にたるやうにて、其邊の物皆冷たく、幾度思返しても正月三日にはあらず。

小石川にも今朝は雪の降歇まで、此様に積るべし。表の六疊も微暗く、塵所は悪寒く、往來には車のみ軋りて、床の福壽草も然ぞや萎けて、叔母は一方ならぬ怯寒、叔父は世を恨む餘りの陰氣にて、固より在りし世の春には似るべくもあらねど、春は自から春にて、左にも右にも長閑けく、今頃は雑煮の餅焼く香して、餅掻くは叔父が自慢、狭き勝手元に美衣着たる人の立働くも春の景氣、と思出でらるる側に、野曠き塵所に

お増一人が縮まりて、こそくと膝立する。

程無く奥様は起きたまへり。お手水の間に坐敷を取片附けて、お火を入れたる頃に、お髪を理け、召物を替へて入らせたまひぬ。昨夜よりは御顔の色も稍鮮に見えたり。然れども例の曇は残り。我を見るより癖げに打笑み給ひて、夜の明るを作しく、其方に會ひたうてと、火鉢の側に引留めたまひて、雪の噂などしておたりしに、彼方にお増の物言ふ聲したりければ、誰と語るにかと思ひて、障子の硝子越に見遣れば、母屋の様に顯れたるは、旦那様なり。寢衣の上に黄八丈の長羽織を召して、楊枝叩へて、庭の景色を眺めつゝ立ちたまへり。お増は金盃を差置きて内へ入りぬ。

旦那様の御目覺と立たむとせしに、旦那様の掛はお増なれば、其方は我身の世話を頼む、と行くには及ばずと仰せられて、奥様は萎れたまひぬ。

昨夜の如く旦那様の方へは一目も見向きたまはず、おのれの見ぬものは他も見るなど言はぬばかりに、心も其に移させじとや、類に話をば爲かけたまひて、旦那様の其に在する間は、聲の途かぬほどに隔たりたるに、なほ心置かれて種からぬ風情目に餘れり。

不言不語

八時中過ぎて、お増は二人前の膳を運出でぬ。手の無きことを知りながら、お客顔して今まで動かざりし不束を愧しく、俄に立ちて此心無さをお増に詫びつゝ、此所は私に任せて、旦那様をお呼び申して下さりませよと叫ばば、お増は目投して我を窘め、聞えよがしに是は奥様の御膳、これは貴方のと言ひて渡しぬ。我は仍合點行かず、旦那様はと小聲に訊ぬれば、お増は彼方に見えぬやうに、言ふなど手もて押むるを、能くは解らねど少しは解りたれば、そのまゝ膳を運びて奥様の前に据ゆれば、其方も此處にて食べよと仰せられけり。餘りに恐多く、私はお増殿と彼方にてと断りけるに、子然と一人は不味し。相伴せよとて、容し給はざれば、是非無く席に着きて箸を取りたり。此時始めて心着きしが、三日といふに雑煮にはあらで例の御飯なり。門に松立てず、内には輪飾掛けず、床に鏡餅をも飾らぬほどの宿なれば、とは思ひしが、さりとは變りて、何と無く濟まぬ心の中に、返すくも此家の尋常ならぬを疑ひてぞ。

旦那様は二階の御居間にて、手づから紅茶を煎じたまひ、朝御飯は牛乳一合に麵包二片、給仕も要らず、新聞を見給ひつゝ、いと無雑作に濟ませらるゝなりけり。

午前十時と思しに、膳は仍二人前にて、旦那様は二階を下り給はず。亦一つ訝しき事説と思ひけれども、

お増にも問はで措きしに、御夜食も我身ばかりを御相伴にて、旦那様は此一日遂に影をも形をも見せ給はざりませ。

もしや御病氣かとお増に訊ぬしに、さる事無し。何に依らず別々に爲さるゝと答へしが、此不思議此日に限りしにはあらで、次の日も、其次の日も、五日、六日、七日、十日になれども、之に異らざる。さればとて、奥様より推して御機嫌伺ひに行かるゝにもあらねば、旦那様も亦、其故に御不興を増さるゝにもあらざる如し。

日を経るまゝに御馴染の重なるにつけて、奥様種々打解けたる御物語の度には、必ず何かの端に旦那様の御噂の出でざる例無し。それは心より最愛く思召さるゝ餘と覺ゆる辭のみ。かくまで深く思はせたまふものを、如何なる御憎悪のありてか知らねども、旦那様の爲され方の餘りや鬼々しきが、我までも怨めしきほどに、奥様の御心根を御不便に覺ゆる時も度々なり。

とは云へ、我は思願しぬ。旦那様は努々然ばかり酷く情無き御方にはあらざるなり。それは我一人の見たるばかりにあらず、お増も優き御方と云ひ、奥様は猶ほ誓めたまふほどなれば、その旦那様の釋したまはざる

不言不語

不言不語

奥様の、過か、落度か、不束か、何か知らねど、御心の解けたまはぬ其は、容易ならぬ事なるべし。さては御間不和とはいへど、過は奥様の方でありて、御託を遊ばされたき御意は山々なれども、旦那様の御温激しめて、御側にだに寄るべくもあらざるなめり。過は奥様にあり！と我は私に思定めたり。

其後も旦那様の御様子、二日の夕始めて御見受申せし儘にて、奥様に會せらるゝ事ありても、我よりは會て物仰せられず、怫然として餘所ばかりを見向きたまひて、適に奥様の方をば見らるれば、怨めしげに睨みたまふやうなり。

然れども例の如く我には優しく、萬般に御心着かれ。お増をも劬りて、何所に申分無き御主人と見るほど、かゝる御方にて、理も無く奥様に怒くもそはざるやう無し。いよく過は奥様にこそ。

恠て我は怪しきと疑はしきとに心ばかりを迷はせつと、早くも此に半月を過しけり。

旦那様は毎も御機嫌悪く、奥様は曇りたる御顔色の異らまじて、此思しく寂しき正月は過ぎぬ。努めて油断はせざりしかど、異しき秘密は些の隙をも見せざりければ、我は唯何處までも間路を辿る心地し

てき。一月にも餘りぬれば、御二方の御顔を合されしも度々あり。二言三言なれども物仰せられしも算からざりしが、其時々御様子、總て二日の夕に毫差はざりしなり。

我身の來りてより、奥様の御心大分變たるやうなり、とお増は言ひじが、我眼には然りと見えず。折に觸れては、始めて見参らせし夕の御顔の曇の如きは、謂ふにも足らざるまでに、太く味氣なき氣色にて、物思ひたまふを見る日もありき。さては忍びくんに憂き思や御方の胸を穿むると、餘所ながら我は益心を痛めたり。

秘密、秘密、其事は兎の毛の露ほども聞かせたまはねば、如何にとも慰め参らせむ方無く、さればこそ其秘密を、旦那様心には懸けながら、さまざまに思ふ程の驗も見えずして、唯給金ゆゑの奉公人の如く、一月餘を嘸略と、而も一年中の最も樂き正月をば、此「辛抱のなるまじき家」に在りて、何の苦も無く暮したりしは、構へて我の辛抱強きにはあらざりしなり。我は始より、此御間の不和を整へむ、此異しき秘密を探らむにのみ心を注ぎて、身の程を顧るべき邊のあらざりければこそ、知らずく一月をば暮し得たりしなれ。唯奉公とばかりにては、恐らくは十人が九人まで、一月の辛抱はなるまじきなり。なるほど御手宛は十分に、居

不言不語

不言不語

然御客様に遇はれ、立働くにあらす、重き物持つにあらす、奥様の御合手申して、まづは遊ぶばかりを一日の務なるに、何處に辛抱のなり難き所やあると、人は然てかし不審に思ふべし。寂しき田舎の廣き一軒家に、不興と泣顔との間に介りて、一日紛るゝ事も無き環の身になりて見給へかし。——世間は慈悲の沙汰ばかり！今日も奥様のいとこしく思ふ顔れ、何申上げてても生返事のみ遊ばして、切に心憐ませたまふを見れば、我胸にあらむ嬉しき事も、忽ち消ぬべき心地すなり。況て然る事のあらざるをや、我も誘はれて、速に世の様の果敢なく、身の行末も頼無く念はれて、自から頭重く、俯かむとせり。

御奉公も御合手も是ぞと思へば、努めて御慰藉になるべき事どもを仕向けて、種々御機嫌を取れども、奥様は些も浮きたまはず、恚る事は屢あり。

毎は勝れたまはぬ氣色に御見受け申しても、私の御側に氣遣ふを、有繁に見かね給ひてや、強ひて紛らしつゝ、それなりに忘れ給ひて、左も右も當座の御機嫌は復るなり。然れども不圖御心の憐れしき折節は、御顔の凄く蒼白めて、涙を含ませ給ひ、時ならぬに身悶あそばし、今にも轟然と立ちて、あらぬ事など口走らせたまふかと思ゆるまでなり。

不言不語

さる事はいと稀なれども、餘に憂きに堪へかねさせ給へば、餘所日も忘れたまはざるにもあらす。五度六度ばかりもありけり。始の程は恐しとも思ひしが、後には慣るゝほど、なかく御惻しく、我身も双親に後れて、便は唯一人の叔母にさへ別れし跡の十日ばかりは、身も世もあられず、今奥様の思煩ひて在すらむやうに、其のみ悲しく、切なかりしを憶合せて、實に其胸の中はと、慰むべき身も俱に萎れて、庭なる鳥の囀手に取る如き障子の内の明るきに坐りたりしが、叔母の初七日といふ日、涙は盡きず、哀嘆に沈みたりしも、二月の恚る日和の朝なりしに、折から程遠からぬ家に琴の音色の芥々と聲微に麗しう江の島を唱ひたりしを、毎よりはいと面白く、思懸す慰められし事のありしが、と不圖憶出でたり。然ばかりの涙の間に如何してか其琴の面白かりけむ、我ながら知らず。又我昔の悲き、奥様の今の憂とは、全く品變りてこそあるべけれど、奇しき私の例もあれば、もしやと、實にも女心の果敢なき事を頼みつゝ、やがて御秘蔵の琴を持出でて、爪音も其折の調子にして、わざと聲低く江の島を唱ひ出しければ、彼方の隅に俯き給ひたりし奥様は、驚きたる氣色にて我方を見給へり。

御方は然てや驚きも呆れもしたまひけむかし。彼方は胸苦しう思惱ませたまへるに、無遠慮にも獨氣散心

不言不語

らう、さりとては憎き奴と御座するにやと、有繋に心は退けたれども、我身の慰められし江の島を頼に、わざと憚らず、樂しげに弾きつ、半にもなりぬるほどに、我もいつしか興に入りて、自らも惜しと思ひつゝ曲を閑りてけり。

御機嫌のほども如何やと、慌忙爪を外して、座を退かむとせしに、今日ほど面白う聞きたることはなし。今一曲何なりとも、と奥様の仰せられぬ。

此時の嬉さ、何に譬へむやうもあらざりき。奥様は御機嫌好く、今一曲とは仰せられたり。なほ聴かむとは望ませたまひたり。我悲を解きし江の島は、主なる御方の愁をも慰めたるか。

面白う聞きたりと仰せられし奥様の氣色は、實に少しく勝れて、黒きまでに曇りたりし御顔も、今はやがて雨の晴れむする空の明うなりたる如くに見えたり。

御意とあらば、此指の折れむまでもと申せば、大事の妹の指は折らせじ、と愛らしき眼して我をば見たまひけり。勿體なき事ながら、日頃の御情のほどに甘えて、心には奥様をば姉様とも思ひて、私無く册き参らすに、此誠徹かざるにや、御所爲に妹を袖にしたまひて、恨めしき所ありと申せば、奥様は屹となり給ひて、

其怨言は我方の誠こそ通らざるなれ。袖にせしとは曾て覺無し。ありとならば聞かむ、と膝を進ませたまふ。我は俯きて琴の緒を緊めつゝ、御主に御怨勿體なし。怒させたまへと頭を下ぐれば、奥齒に物の介りたる其挨拶。我等の間に恕す、怒さぬなどといふ事無し。思ふよしあらば何なりとも、言はるゝが結句嬉しきと、聞捨には爲給はざる奥様の氣色なり。

恚る事誘々と親友の間にてこそ申せ、お主に向ひては憚多し。御心易立の過ぎて、御恨がましきことを申出せしは私の不調法。それとても事々しう申上ぐべき筋にはあらぬを、唯此儘に御聞流のほどを謝れば、愈心に懸けさせられて、左も右も言へと責め給ひ、言はずば竟に御機嫌をも損せむばかりに見えさせ給ひければ、今こそ好機なれ、恚る時に言はではと、琴を片寄せ、席を進むれば、何事を言ふにかと、奥様は氣遣はしげに見給ひつゝ、容を改めて待ちたまへり。

何日ぞはと存じましたれども、然るべき機無かりしと、第一には餘に不馴らう、出過ぎたる爲方と、幾度か思懸して今日となりぬ。始めて御目見申せし日より、御顔色の勝れたまはず、御氣分の快からずと見参らせしが、はや爾來一月餘今も御様子の手々しからぬに、格別御薬用あそばさるゝにもあらず、猶此儘捨

不言不語

不言不語

置かせたまひなば、御合手にとて上りたる環は、聽て御看病人にやなりなむと、御側に陰ながら心を痛め参らするは幾多ぞや。然れども何か御不自由のあらぬ御身上にて、かほどの御病に微々なる薬をば各ませ給ふ所以なし。想ふに此の御病薬の力にては辨はざるか。さりて捨置給ひて癒ゆべき病はあらじ。何がな御對症の薬もと、及ばずながら御心配は申せども、何御病氣とも知れざれば、是ぞと計ひて、差上ぐべき薬も無し。妹とも思ふとまでに仰せらるゝ私ならば、少しは御胸の中をも明し給へ。獨苦ませ給はむよりは、慰められて紛れたまふ事もあらむ。不束なる此身なれども、猫には優したる所もあるべし。恙く御合手にとて上りましたれども、或時は半日物も仰せられず、又或時は御側に在るを煩く思召さるやうにては、何を便りに御合手の致し方も無く、此分にては御奉公務り難し。體々御心に思はせたまふ事、苦からずば環にも仰せ聞かせたまへかし。憚りながら御力にもなりたく、且は物思はせたまふ日毎に見参らすは、相與に心を苦むるにも優したる苦しみあり。

御馴染も昨日今日なるに、差出がましく、能くも恙る事申上げたりと、我ながら驚くばかりなれども、奥様の御可憐身に沁みて、人事とは思はれぬ餘、申過して慙かしけれど、切なる環の心の底をも汲みたまへと申せしに、奥様は顔も得舉げず、身を竦めて、恐懼れたまへる風情なり。

庭には鳥の音長閑に、眞盛の梅風無きに掠亂と、如月半の天いと麗に。夏有りて奥様は夕月の如く蒼白みたる面を擡げ給ひて、我に怨とは其事なりしか。然りとは身に取りて忝なき怨なり。今に始めぬことながら、其優しき徒には思はじと、御目に餘る涙を拭はせたまひけり。

愚ならぬ其方なれば、平生の様子、何かにつけて然ぞや合點のゆかぬ事のみなるべきに、大概は察したる所もあらむ。實に我身ほど世に淺ましきは無し。合手にとて頼みたる其方をば、やがて看病人に爲むことは、かねて此身の願なり、と仰せられつゝ又泣き給ふ。

我は怪しき御辭に驚きて、さても變りたる御望もあるもの哉、何を思出に御病氣にはならせ給ひたまで。戯れにも然る思はしきことは仰せられな。無病は一つの寶とこそ申せ、と慰め参らす言の下より、實には用無き身なり。其方を看病人に頼むからは、逐次一七日の香花まで、氣遣ながら其方の手に懸りたま意ぞと、我面をば傾しげに噴め給ひて、嗟我は此世に死ぬるより外には何の望もあらぬ身なりと、其聲太く頭ひて、御願は益者ぞめたり。

不言不語

不言不語

此世に在らむものは、昆蟲の末までも命の惜からぬはなし。まして奥様の御身上にて、千年萬年存へたまはむとも、御樂の極るべきにはあらざるを、假初にも今の御辭は、よしなき事を思つめさせ給ひて、我と愛ま身になしたまふゆゑなり。片時も忘るゝ間無く思ひつめ給ふ其よしなき事をば、左も右もして御胸の外に棄てさせ給へと諫めければ、細げに頭を掉りたまひて、棄てむとは念ひ、棄てむとは爲たりしかど、その憂き事は出でゝ行かず、我在らむ限は心の底に蟠りて、終に此身を冥土へは伴はむ。冥土こそ我安樂の家なれ、と思入りてぞ仰せられける。

怒る事聞くも何とやら恐しく、心打騒ぎて、その憂き事を棄ても忘れもしたまはむとて、我をば御合手に召給ひたるにはあらざるか。膝とも談合と申すぞかし。設ひ好き智慧はあらざるも、御苦勞を増させますほどの事は爲出さじと申せしに、我胸なる憂き事を打明よとかと、奥様は慄然としたる御様子にて、人に道ふべき事にあらず。人の聞くべき事にあらず。我も言はねば、其方も聞かむとは爲な。わが胸裏の此憂き思ばかりは、神佛の茲に現出で給ひて、如何に力を盡させたまはむとも、その根を絶つべきにあらずれば、頼無き身に頼みたまき其方をも頼まずして、とても因果の我一人を苦むるなり。嬉き志のほどは平生能く知りた

れば、徒にも思はねば、妹を袖にするにもあらねど、此事のみは語り難し。されども後來一度は知るゝ時もあるべく、又我身の悉う語る折もあるべし。その時節の來らむまでは、忘れても再び言出したまふなど、座にも堪へかねたらむ氣色にて、衝と立ちてぞ様に出でたまひける。

(四)

人に道ふべき事にあらず、人の聞くべき事にあらず、と奥様は仰せられけり。忘れても再び言出づるなとまで仰せられけり。實に然もありけむ御心のほどは、卒に起たせたまひし御顔色の尋常ならざりしにても知られたり。

此上は如何に申上ぐるとも、その事は打明けさせ給ふへことも覺えざれば、愁くとも今姑獨苦ませ給ふを見てあらむより外無しと諦めて、其後は噫氣にも出ざりしが、奥様は日増に我をば親きものに遊ばされて、片時も御側を離したまはず、少しく見えざる時は、用もあらぬに喚鈴を速打に鳴したまひ、或は御自身に庭まで尋ねさせたまふ事もありぞ。

然ればとて御側に置きて、御合手をさせらるゝにもあらず。御座敷に子然と唯二人、奥様の氣儘に琴彈きた

不言不語

不言不語

まふに、我の針持つ時もあれば、此方は新聞を讀みて、彼方は寂しく其を召上るなど、湯治病の長逗留に
談も盡き、遊にも飽きて、一日事無く對向ひたらむやうにて、何不自由も無ければ、さて面白くもあらで今
日を暮しつ。

此分にては御合手の効無しと、我ながら思はるゝに、恠くても奥様の御心には、我を一方ならず頼に思召さ
るゝなり。我在るをば最心強う思召さるゝなり。御側に飾物のやうに唯据置きたまひて、御心濟まざる
るなり。其驗は、仰せらるゝ事、爲向けたまふ事の一事、益々親しう、餘に心措かせられざるを、お増も或
時は驚きて、我身の仕合を羨ましきとこそ言ひたりしが。

何に限らず申上ぐるほどの事用たまはざるは無しとも謂ひつべく、奥様は深く我を信じて給ひ、環無くては
夜も日も明けぬやうに思召さるゝか、と疑はるゝほどの御様子も見えけるに、人に道ふべき事にあらず、と
一度仰せられし御胸の中の事のみは、竟に御見しも爲給はざりけり。

それは如何なる御身上の大事かは知らねども、秘密とあらば、此口を裂るゝとも誓は守らむ環なるを、左右
に危み懼れたまひて、いつまでも仰せられねばこそ、いつまでも其御苦。打明けさせ給ひなば、此身を碎

てなりとも、必ず御頼効を見せ参らすへまにと、奥様の忍びやかに太息あそばさるゝ度に、恨めしきやら、
幽拜きやら。

恠くて御面影は日増に贏れ、益限無く彼愛思にや責められ給ひつゝ、二月も過ぎて彌生となりぬ。御庭の櫻
も咲初めて、長閑の日和打續けば、池を回りて蝶を逐ひ、柳を隔てる鳥を窺ひ、垣内の漫行も心和きて、
世間並の春景色、松立ぬ雪の正月とは事異りて、二月餘閉ぢたりし胸も豁き、男ならば樹下に酒も飲たしと
思はるゝ此頃なるに、旦那様は御用もあらぬ御身を二階にのみ閉籠めたまひて、適にも御遊山に出られず、
御辛抱もなるもの哉。

其も事情ありての御無性かと思へば、なか／＼御側しく、せめてはと、絲垂櫻の可憐を見立ても折取り、
白銅の釣船に活けて、之を旦那様へ奥様からの御祝と御覽に入れてはと申せしに、殊の外喜ばせ給ひて、
能くこそ心着きたれ。別けて見事に出来たれば、御意にも入るべし。然りながら我身からの御祝とは申すな。
其方のにして御目に懸けよと仰せられぬ。不取敢二階の御居間に持行けば、旦那様は鑑詰の水菓子を下物に
三、柳を召上りて、今や陶然と色に出でたまひたるなり。御床の間に懸けて、折に觸れたる私の戯。御笑草

不言不語

まで、と會釋して立たむとせしに、見事の手際。花にも勝りて其志の可憐。返禮無くしてはと、卓の上なる
 コツプ 玻璃盞を把りて差したまへり。辱なけれど不調法なれば、と御断り申せしに、年寄に耻掻かすな。飲まずと
 も蓋は受くるものぞとありければ、雖有く御受せしに、壺を差付けたまひて、注ぐ真似させよと仰せられぬ。
 真似ならばと油断せしに、不意に注ぎたまひ、あれと驚くを見て笑はせ給ひ、飲めぬとならば唯口を着く
 るばかりにても苦からじと、御下物一つ下されけり。其をば懐紙に載せて、此二品奥様への御土産にと申せ
 ば、御機嫌卒に悪く、其方にとて遣りたるものを、下へ持行く程ならば返せと仰せらる。今は是非無く、
 玻璃盞を取擧げ、一口着けしが、御酒ならば一つ二つは強ひても飲め、慣はぬ酒に吭の塞る心地して、殘餘
 を持扱ひたるに、下の御座敷にては我を召し給ふ喚鈴の音頻なり。
 之を機に、奥様のものやうに召しますればと申せば、増が行くへしとて立たせ給はず。なほ盃返せと遣りた
 まへば、又一口無理飲して、稍苦く、此一盃干さば倒るべしと、途方に暮れたるを御覽じて、始めて飲め
 ぬかと仰せらるるも意地悪し。
 野暮に生れつゝまとしてと申せば、女子は野暮に限れり。飲めぬとならば其蓋我り受けむと言はるゝに、そ

れは羞しきやら、失禮やら、いよく飲まねばならぬ義理となりて、又一口強ひて、はや顔の眩うなりたる
 折から、奥様よりの御迎とてお増は来りぬ。
 恁る仕儀より思はざる長座して、さぞや奥様の御待兼と心急かれ、残れるを唯一飲にして、御返盃申し、勿
 勿に御暇乞して下りしが、足許も覺束なく、顔は火の如く、胸苦く、御座敷に入りて、晩はりし御謝を申せ
 ば、奥様は勃然したる御顔にて、好き御色の羨しきと、餘所々々しき御辭なり。是はと思ひて、悉う有體を
 申上げしに、御心容易に解けず。其場は別に何事をも仰せられで済みしが、それより二三日は齒に帛被せた
 らむやうの御所爲のみにて、御側の愁かりしが、固より根も無き事なりければ、程無く御疑も霽れて、舊の
 妹になして、御優き事ばかり。
 之に就けても、我は此御間を和ぐべき幹旋の難きに困じたるなり。かばかりの事にては御妬はありけるを、
 繁々且那様の御側へ通ひなば、如何なる椿事や起るらむ。御爲を思ひながら、よしなき恨を受け、且は憂き
 名を貰ひて、立つ瀬はあらず。今思へば、人事に入らざる苦勞して、叔父に聞かれなば定めて叱らるべし。
 然りとて、奥様の御容體を見参らすれば、有繁に御惻しきの忍びかねて、又御奉公の心も起る。

春雨降出して御庭の花傷み、かの絲垂櫻も其一枝を釣船に眺められしばかりにて、日毎に空黯く、晝も寂しく、奥様は御胸の鬱結いとしく、雪よりも軒の玉水人の氣を腐らす。夜に入りての凄寥は更に勝れり。過ぎにし雪の夕も凄かりしが、庭樹に澗ぎ、瓦に助るゝ雨蕭々耳に沁み、目を慰むべき燈火の影も打濕りて、廣き家の何處に人の氣勢も無く、物の音のがつたりともせず、外に降るものゝみ獨時を得顔に、根長く、煩く、意地悪く、魚れたきに、奥様はじつと俯かせ給ひたるまゝ、其處に在すとも思はれぬまでに、打沈みておたまへり。

此物凄き無聊に堪へかねて、季取出して弾けば、是まで睡げなる音して、聞くも懶く、今宵は早寝と仰せらるゝを幸に、九時を聞くや否や臥戸に入りけり。我は二月の始より御伽にとて奥様の御側に臥すなりけり。枕に就きて暫は睡られず、十時の鳴るを聞きてより後は覺えずして、不圖寢覺めつ。何時とも分からざりしがやがて一ツ鳴りしは一時なるか、半を打るしにか。雨は挽む氣色もあらで、風さへ加はりて、雨月に吹着け、椽の何所にか、はたくと漏る音せり。

管寢せし故にや目の冴えたるに、なほ雨泄の音耳に付きて寢着かれず。枕爲替へて、左右に勝手を直せども、氣は益澄みて悶ふる間に、時計は鳴りて、また一ツ打てり。さては一時半か。今真夜中と思ふ折しも、風暴に一陣強く戸を鳴して、雨の嵐と濺ぐに怖ろしく、身を凍めて夜着引緊むる隣に、奥様は勃起と枕を擧げ給ひぬ。彌怖ろしく、何とか爲給ひけむ、と竊に窺ひけるに、御眼を据ゑて、徐に四邊を胸し給ひ、やがて耳を傾けたまふは、物の音をや聞取らむとし給ふならむ。何か聞ゆると、我も耳を澄しけるが、雨の音の外には異りたる響もあらざるなり。

奥様は猶も確造したまひて、其ぞと思召すらむ方を吃と視たまふ御眼の色尋常ならず、確に其よ、と身を顛ひせ給ひて、環、環と呼び給ひぬ。其御聲の震動、疑ふべくもあらず、御心に恐怖ありと思へば、氣味悪く環ひたりしを、目覺めぬと思して、夜着の上より慌忙揺りたまひつゝ、また環と高く呼び給ひければ、やうく今覺めたる體にて御返事申せば、環の聲を聞きたるかと思せられて、御耳を傾けたまふ。我は起回りて、如何なる聲かと申せば、あの聲、あの聲と忙しう仰せらるゝ御顔色は變りたり。今仰せらるゝまも無し、向者より御様子怪しく、耳を澄ませども、我には何か聞ゆる聲もあらず。我に

不審不審

不言不語

は聞はぬものを、奥様おくさまにのみ顯然あきらかにと聞ゆるとは、正しく御氣ごきの迷まよひと思へど、如何にも何やら聞えたまふに紛れ無き御様子ごようすの物凄ものぢく、身毛みけ忽ち彌立よだたちて、肩かたの透惡寒あたりわるさむく、襦袢じゆばん合あはせて、如何なる聲こゑの聞えますると申せば、あの聲こゑ、あの聲こゑが聞はぬか、と少しく焦れ給へり。

我耳には何の聲も聞えず。雨は蕭々しゆく、風の樹を吹き、戸を叩くのみ。

仰せらるること心得難く、惑へる面色にて御顔を噴なげめてありけるに、彼方も同じく我顔を訝いよしげに視たまひて、其方には、あれく、あの赤子あかこの啼聲なげは聞えぬか、と聲震して、怖おそしがり給ふ。幾度氣を變へて耳を澄せども、赤子の聲などは氣も無し。さては夢をや見給ひて、未だ全く覺めさせ給はざるにやあらむと思ひければ、御心確まことに遊ばされよと申せば、益焦れ給ひて、其方こそ氣をも心をも確まことにせよかし。寢惚ねぼれたるにやあらむ。あれく啼く、と仰せられて已まざりけり。

御様子ごようすの愈怪いよしきに、我も怖ろしかりけれども、御迷ごまよひをせむと思ひて、さらば見届みいたけて參るべしと起直りければ、氣毒いきどながら頼む、と嬉しげに見えさせ給ひぬ。

枕まくら頭の玻璃燈はりょうとうを取りて、立懸りつゝ、其聲は何處いづくあたりにと申せば、折々あちこち彼地こゝ此方に聞ゆれども、多

くは彼所かそこにと、指させ給ふ方は南の窓なり。

慙なやくと聞くより、卒そつに惣毛そうけ豎たちて、我は覺えず床の上に竦すくみたり。確まことに今窓の外にて、と仰せらるゝほど竦然しゆくぜんとして、身動みうごもならざりしが、やうく氣を取直して起上れば、其方一人にては氣味も悪からむ。我身も與ともにと立ちて、奥様は我後に尾つ給ひぬ。屏風びんぶを出づれば、直ちに其窓なり。

戸かどを啓あけぬ先に、未だ啼聲なげはいたしまするかど御訊ごんたしね申せば、今鎮いまりたりとなり。此間こゝにと急いそぎで障子しやうしを引啓ひけ、戸かどを半排ななはひらきも敢へず、又啼くと叫なび給ひて、燈あかりを持てるまゝ奥様おくさまの逃げ給ふに、我も驚おどきて引退ひきさりしが、何の聲するにもあらざりけり。

再び遣寄はなりて、一思ひとに引啓ひきければ、眼まへの前まへ窓すまの如く、燈火とうかりに映うつら小雨こご白しろく見みえて、窓際まどぎはなる明竹あきちくなる一簇ひとつか風かぜに戦まげり。

別係べつけいもあらざるに力を得て、首差出せども黯くろくして見えす。憚あやりながら燈あかりを此こゝへと申せば、奥様おくさま疑懼ぎく近ちか給ひて、能く見てたべと、遠くより玻璃燈はりょうとうを駢かし給ふ。光ひかりの達とどく限かぎ限り無なく胸むねしけれども、赤子は措はかまて、啼なくものとは、蛙か一つも見當みあらざりけり。

不言不語

不言不語

貴方も御覽じまし。聲も爲されば物も在らず。正しく御氣の迷か、さうずば僻耳なりと申せば、奥様も四邊を熟と見定め給ひて、今まであれほど啼きつるものと、やうく夢の覺たまひたる御顔なり。今も聞えまするかと申せば、はや聞えずなりぬ。合點の行かぬ事哉、と眉蹙め給ひて、茫然とイみたまへり。

之にて御疑を解き、御心易く寝ませ給へ。果して聲のするものならば、私にも聞えぬ理無しと慰めつゝ、月は鎖したるに、折から風來りて竹を動かせば、幹の撓むにつれて異しき響のするを、あれ啼くと、奥様は通足になり給ひて、環、其聲ぞ。あれならば竹の揺る音なるにと申せど、音給はず。其音賑めば、啼聲も響りたりと仰せらるゝに就けて、之をこそ聞僻めたまふなれど、正體知れては我心に何の恐怖もあらずなりで、慄きたまふ奥様をば百方申宥めて御床に入れ、我も枕に就きける後も、折々風吹きて竹の鳴る度に、奥様は切に怖れさせ給ふ風情なりしが、我には再び何とも仰せられざりき。此睡に三時を聞きて、有繫に睡氣催したりしが、竟に夜の明けたるも知らざりけり。

此朝我は一目に奥様の疲果て給ひたる體に驚けり。わづか一夜の中に恁く變らせらるゝこともあるものか。赤子の啼聲に怖れたまひし昨夜の空耳、御正氣にしては有るまじう異しく、御夢とは猶受取り難けれども、

御正氣にても、御夢にても、御正氣にも、御夢にもあらざるにても、所詮は御體の健全ならざるが爲せし業ならむ。此二三日は雨降續けて鬱陶しければ、其が爲に例の御思憶の募りける餘に、取亂し給ひしならむ。今朝御氣の重く、病苦の姿に見えさせ給ふにても、御心の疲勞の程を想ふべし。然るべき折には、根も無き事、思の外の事など、振舞も口走もすること、夢見るにも同じければ、御意識あらぬ現の間の事を尤もるにはあらざれども、赤子の啼聲と、聲無き聲を聞付けたまふのみならず、太く驚き怖れさせ給ひしは何故ぞや。不善は是なり。

奥様の愛思に沈ませ給ふと、御間の不和なるとは、關係の密着したるに疑無く、其事の起因は奥様の過にあらむとも、かねてぞ我は見定めたる。然りながら過とは如何なる咎ならむ、それまで推量るべくもあらで過ぎたりしが、昨夜の事を思合すれば、その黒き秘密の裡には赤子を憂ふたるにはあらざるか。

秘密の陰に赤子は眠れり！然れども、我には聞えざりし啼聲の主は、奥様の生ませたまひし御子か、但は他の子か。それだに知るべくもあらざれば、深き事は闇を覗くに似たる心地もすれど、昨日までの疑惑に較べては、一點の燈火微に見えたらむやうにて、今は些か頼もしき所あり。

不言不語

不言不語

申さば御心を悪くせむと差扣へて、昨夜の事は忘れたるやうに申しも出さざりしに、彼方より、昨夜は睡き所を騒がして迷惑懸けたりと御挨拶ありけり。夢をや御覽あそばしたると申せば、夢とも就かず、寤とも就かず、赤子の聲の聞えしが今思へば其方が辭に差はず、風の竹をば鳴せし音なり。

赤子の此邊に啼くべき所以は無きに、其と聞きしは正しく夢にてやありけむ。我は幼きより夢に覺はれ、驚き覺めて立騒ぐ癖あり。心地悪く、頭の重き折などは、今も發りてと仰せられぬ。

然りとば昨夜の御辭と違へり。いかほど竹の音と申しても、御聞入はあらざりし其時の御意氣込、今朝となりて恠く卒に折れて、御合點あそばさるべしとも見えざりしに、何とやら事を打消し給はむとの御詐のやうに覺えて、得心はならざりけれども、彼此申さむも異なるものと、唯順しう仰せらるるまゝを承はりて濟しぬ。疑へば限無なければ、之に就けても、秘密の陰に赤子は睡れり！

(五)

風呂は隔日に立ちて、我は毎も奥様と御一所にて、御背を流し參らするなり。はや旦那様の濟ませられしとて、お増の來りければ、我は湯好の待兼ねて、召しませと申せしに、少く風邪の心地と覺ゆれば、今日は罷

めむ、と仰せらるる奥様は、一昨日の夜の寤の御物、駭より以來、御食事も抄々しからず、目立ちて憂き思に風し給ふなりけり。

恠くて我一人にて湯殿に在りければ、お増は背を流さむとて入來れり。

はや此に三月にもなりけれども、奥様の御側を離し給はず、起臥も同一にて、臺所に出づるも稀なれば、其後染々とお増に會ひて、物語るべき折もあらざりしに、今日こそはと思ひて、何氣無き體にて、奥様の御子供衆の有無を訊ねけるに、悉しき事は知らざれども、御子様はお一人も有たせ給はざりしと聞きしが、と渠も何氣無く答へたり。

近き御親類などには、と重ねて問ひしに、されば、今は別に是と申して御親類もあらざるやうなり。御本家とて、旦那様の御兄様の赤坂溜池に在せしが、御夫婦ともに三年前に亡くならせ給ひて後、間も無く此方に引移り給ひてよりは、御親類らしき御方の出入も無く、御血風と申しては、なるほど御一人あり。其方は旦那様の弟御様に、今神戶とやらに居らせらるる由。

その御本家に御子様は無かりしか、と我は訊ねたり。男の御子様の御二歳なるが在しけれど、それも亡くな

不言不語

不言不語

らせ給ひしとかや。私の御奉公に参りしは、赤坂より此方に御轉宅遊ばされてよりなれば、其頃の事ども能くは存じませす。正助と申する老僕わいふの彼方より隨いて参りて、當座働きておたりし者より、小耳に挟みたるのみ。

其頃より御二方おまたかたの御様子今の通りかと聞きしに、些も違はずと言ひつゝ、お増の眼色は有聲こゑに御身も其を訝いぶかりたまふべし、と語るが如く我を見たり。

些も違はず！と我は思はず渠かれの語を反覆くりかへせば、お増も反覆くりかへして、些も違はずと、其疑惑そのうたがはしに堪へざらむ氣色なり。

是には定めて深き仔細のあるべしと、渠こゝろの意を聞かまほしげに、語るともなく眩くらくともなく言ひければ、必ず深き仔細あるべし。然は念ひつゝ、年來としごう疑惑うたがひに疑惑うたがひを累ぬるのみにて、何を是ぞと見出せし廉かたも無く、唯不思議なる御家と呆るとばかり。世間は廣くとも、恚いかる御夫婦間なごの亦あるべきか、と膽潰きもつぶしたる顔色なり。我も毎々訝つねしきは其事。いかに御間の睦なごみしからずとて、三年も四年も彼様にて續くものにあらず。實に御夫婦は名のみと申しながら、不見不知みずしらずの他人よりも疎とく々々、さりとして奥様の御意は、些も旦那様を憎ませた

不言不語

まふにはあらざるやうなるにと言へば、赤坂に在せし頃の御間の睦なごみしさは、謂ふにも謂はれざりしことなり。元もとを糺ただせば奥様は戀女房こひにようばう。御縁組あそばさるゝまでの旦那様の御執心ごしんやら御骨折ごこしは、一通や二通ならざりし由。其頃は人に羨ませらるゝほどの御相惚あひほれの間なりしとは、老僕わいふの毎々申して、卒にはかに變かはらせられたる唯今の御様子には、白首しらがたまを挿さりたりしがとお増は語りぬ。

聞けば御縁組の當時を知りたる老僕わいふさへ知らぬ事を、如何にしてか中年ちゅうねん者のお増が知るべき。三年も故参のお増さへ知らぬものを、今日此頃の環の知るべき事かは。お増にはあらねども、實に唯不思議なるは笠原家なり。

秘密の鍵かたはしの片端かたはしと頼たのみたりしお増なれども、抵あたりて見れば想の外にて、不思議の裏は知らざるなりけり。然れども渠こゝろの語ことばに由りて、赤子の啼聲なきごゑの有所ありかは脆氣あやうげながら知れたり。今は草葉の陰に睡すらるゝとあるほど、御方の寤うづに聞かせたまひし御夜啼よななの凄すたかりしも理ことと思合あされて、多分は其ならむ、と我心は鎮しづきけり。

事の次手と思ひて、正月松立てず、餅搗もちかぬ御家例ごけいの由來ゆきありやと訊たずねしに、これは近頃の御家例にて、此御家に附つきたる習俗ならひにはあらず。赤坂に在せし頃には、御門ごもんに削竹そぎたけ、鏡餅かがみもちなども美々みみしく飾かせられし由な

不言不語

るが、此方に御移轉ひきこしのありてより、ふつと罷めさせ給ひて、見られし如く最佳いそわいしう春を迎へさせ給はぬ年も無し。來年おほも在して見たまへかし。此御家の一年中最悲しく、最も物凄く、最も沈みたる、最も忌はしき時は、世間の最も賑しき、最も樂き、最も長閑のほやかなる初春ぞと覺えたまふべし。それは松立てず、餅搗かず、屠蘇その香無く、御年始客のあらざるゆるにもあらで、何と無けれど御家内の有様水を打ちたらむやうに俄に濕めること、因縁のありげなり。三年が間試しに、例年變らざるのみならず、年毎にいとしく成増るやうなるが、この正月をば如何に見給ひけむと、思ふほどの事名殘無く一度に打出さむする勢にて、お増は息も繼つぎ敢ず語りぬ。

我身も實じつに怖しく物凄く、牢らうなどに入れられなば恚いかる心地や爲らむと覺えしまでに、初奉公の正月の果敢なかりしが、聞けば聞くほど之にも因縁あるべしと言ひければ、此事は例の老僕ぢやうぶも何とも語らざりしが、三箇日か七種ななくさの内に、誰やらむ歿なくなられし人のありしやうなり。御本家の御夫婦にもあらず、御子様にもあらず。さては御親類の數にはあらざるまじけれど、何とか御家に縁ゆかりある人に疑無し。其故か、あらぬか。左にも右にも希有けうなる事の塊かたまりたる御家と語りて、湯を汲まむとて風呂の中の微温ぬるまに驚き、火を消したり、と慌

てと走出づる時、廊下に足音の聞えければ、お増は後戻して、奥様の御出と知らせて行きぬ。

頓とんて奥様湯殿の戸を啓あけ給ひて、環未だか。餘り長さに案じられて、篋かぶつ持つて態々迎に來たり、と御顔を差入れ給ふ。

此太よそこりたる體すくを抄すくはせ給はむほどの篋、御臺所には無き理はすなるにと笑へば、奥様御返おかへしつに塞ふりたまひて、唯打笑ませ給ひけるに、隣の焚口よりお増が聲して、奥様、御物置に用心籠こごりがとざりまする、と囁はさすが如く笑立てぬ。

我も笑へば、奥様も希めづらめづしう快心的こころよげに笑はせたまひつゝ、増は面白き事言ふ。その苦勞無げなるが、我は何より羨うらやましと、何かに就けて二言目には御可憐おんこゝろきことのみ。

御心おんこころに其苑結わたかまりありとせば、また何日か折に觸れて、赤子の啼聲おなうに駭おどろかせ給ふべしと候ひけるに、其後幾度も風吹き、雨降りて、庭にわの梢こすねの響こき、窓の竹も鳴りしに、竟に變からせられし御様子も見えずして、四月となり、五月に入りて、一日俄に暑く、今日は浴衣ゆかたと人々喚さわぎし日の暮、宵月の影おもしろく庭に風情添ひて、螢も出でたり。其珍めづらしく、内よりは、外の陽氣なるに誘はれて、千里竹ちりぞの露つゆに分入り、戯あそびに苔蒸こけむしたる燈籠に

不言不語

不言不語

火を入れ、雑裁を潜りて裏なる池の頭に出づれば、茂初めたる水草の陰に魚躍りて、汀の蛙好声音を啼立つる。面を回らせば、由々しく立てる御二階の木間陰に燈の影射したるなど、此等の趣取集めて、田舎源氏の繪を見る想せり。其處に扁平の石のあるに手帕を敷きて腰懸け、何を見るにもあらで、唯此邊心の清むに任せて涼みたりしに、御座敷の方にて、環、環と聞ゆるは奥様の御聲なり。我は衝と起ちて、雑裁を走出で、築山の側より其方を見れば、團扇持ちて椽端に立たせ給へり。御内は暑苦しきに、少し納涼に出させ給へと申せば、庭は蚊蚊の多くてと、動き給はず。蚊は想の外少くて、多きは螢なり。御池の四面は花火を揚げたるやうなればと申せしに、やうく我側に來給ひければ、打連れて再び池の頭に出たり。橋向なる淡竹の大藪の上に月ありて、池水黒く、魚のみ鱗ねて、埋火ほどの螢も見えざりければ、奥様は呆れ給ひて、何處に花火のやうに、と仰せられつゝ、我顔を御覽じて、言ひし事の餘に空々しと思ひしかど、形の無きとも思はざりしに、此人は、と團扇取直して、我肩を拵ちたまひぬ。嘘にはあらず。我見し時は花火のやうに飛交ひしが、御出の遅かりしゆゑ、はや消えにし迹なり。暫時御辛抱あらば御目にも懸くべし、と言ひも訖らぬ後の方より、珍しくも大きなるが唯一つ、浮波浮波と飛來りて、池の上を徘徊ひたり。

それ御覽じませ。花火ほど數の參らぬ代に、あの大き千正掛、子供の人魂のやうなりと申せば、悚然と身顛あそばされて、思はしき言を、と御聲も曇かに叱らせ給ひけり。螢は飄揚と水の上を遊びて、又引返して此方に来りければ、我は奥様の團扇を拜借して、撲てば外して、逐回すを、止めよくと制し給ふ奥様の御顔近く飛行けば、あれよと驚き、身を退き給ひつゝ、見返る後の一目に復聲立て、環といひさま縋らせ給ふ。不意を打たれて我れも心懸かして、如何遊ばしたると、やうやう申せば、あの石の蔭に赤子がと、益々縋りて離れたまはず。

さては例のと合點しても、何とやら底氣味悪く、御肩越に竊と覗けば、そこら聞くて見分かねど、向者まで我の越ひし石なり。其蔭に赤子の卒に湧出づべきやう無しと、心を鎮めて立寄りしに、我も有繋に慄然せしは、赤子のやうなる物の臥したるなりけり。

されどもと思返して瞳を定むれば、草の上に産衣を着せたりと見しは、腰懸けし時石に藉きて忘れたる桃色絹の手帕の、いつしか江落ちたるなり。今更可笑く、拾取りて、私の遣せし手帕と持行けば、奥様も始めて不言不語

不言不語

得心あそばされたる御機嫌にて、人魂などと其方が威せしゆるなり。此所は冷ゆる、内へ入らむ、と我手を執り給へば、御座敷へ歸る。

(六)

何が日にも此御座敷に御出は無き旦那様の、何とか遊ばしけむ、日和の晴期なる午前、ふと御心の向かせられたる風情にて、御庭傳に入らせられけり。

我は御奉公の内に一度は恚る御有様を見むものと冀ひたりしが、今日明日とは夢にも思懸けざりしなり。

奥様の御喜のほどは幾許と思へば、不覺心になりて、手に持つ物打捨てて御出迎申せば、何して居るぞ、と温顔に仰せられつゝ御座敷に入らせたまふ。

奥様は御嬉くてか、例の御恐しくてか、太く狼狽へ給ひたる體にて御挨拶ありけるを、旦那様は沮色に見遣り給ひて、民之助より手紙の來たりと、懐より取出したる一通をば、奥様の前に投げさせ給ひぬ。

民様よりの御文とは、變らせられたる事もや、と奥様の仰せられければ、二三日の内に歸るとの事なり。それはと奥様は手紙を御覽じ給ひ、はや明後日は御着なるか。久しうく御目に懸からねば御懐しう、貴様も

御樂の事なるべし。此家も益賑しうなるが嬉しと、繰返して手紙を御覽じたまふ。賑しうなるは可けれど、と旦那様は俯きて、太息を吐き給へば、少時御勢付かせられし奥様は、霜に沸湯を瀧ぎたるやうに、忽ち有し氣色は失せて、いとと濕々とならせ給ひぬ。渠の歸りなば、心を着けて鹿忽の無きやうにと、猶仰せられたき事を御胸に納めて、目顔に其と言はせ給へば、懐みますると、奥様も故と御言敷し。

善矣と旦那様は屹と頷き、やがて徐に我を見向きたまひて、二三日の内に神戸に在りし我弟の歸來らば、また其方の世話になることとありければ、御家の賑しうなるは何よりの事なり。御世話と申して、私の届くことにはあらず。今までは樂過ぎて、勿體なけれど退屈いたしますれば、御遠慮無う以來は御役ひたて遊ばさるゝやうにと申せば、驅役は此方の勝手なれど、其方のやうに華車に生れたるものを、むざむざ骨太に、圓くして、疵物にするが餘とや可憐に、と旦那様の笑はせ給へば、此御機嫌を奥様も嬉しく、環は妾の好きに飽きて、少しは醜うなりて見たまなるべし。榮耀の餅の皮とやら、さまざまの人心かな、と打笑み給ひけり。恚る折は又有るまじ。一分も長く此に旦那様を御留申して、御間の復るべき便とはならずとも、少時も奥様

不言不語

不言不語

の御心 寛を思へば、旦那様の有紫に起ちかね給はむやう、御茶よ、御菓子よと排へて、鏡日の御返報なれば、是非とも此にて私の差上げます酒一盞と申せしに、免せと仰せられて、容易に承引き給はざるを、種々御勧め申し、葡萄酒三盞まで御酌して、御話を始めければ、稍興に入り給ひて、御腰も落着き給ひたるに、奥様は左右に引込思案にて、冴々と物仰せられれば、我は獨り遣りて、御間に橋を渡せど、旦那様も亦、適に話懸けさせ給ふ奥様には生返辭のみ遊ばせば、我も竟には飽倦果て、御幹旋も其迄は續かず、御飯をもと思ひし目算も外れて、旦那様は衝と起ちたまひ、首尾好く敵は撃たれしぞ、覺えてをれど、御庭傳に逃げさせ給ひけり。

之を奥様に怨ずれば、其方が心遣を知らぬにはあらねど、旦那様の前の謂ふばかり無く氣遣にて、申したまふ事もありながら打出されず。又彼方とても、我身には御心易う物は仰せられぬを。然ども今日は什麼なる吉日か、此にて御酒召上るだに嬉しきに、御機嫌の御顔を見しも久しぶりなり。是皆其方が働と、徒には思はず。其にて我も一盞戴かむ、と玻璃盞をば把り給へり。御氣遣には之に増すもの無し。一盞と仰せられず、ちと浮々めそぼろめとまで召上りませ。唯今御肴も種々、

不言不語

日本一の増が庖丁と侘むれば、一つ受けさせ給ひて、日本一の増が庖丁に、世界一の環が御酌、成る口ならば此一瓶をも盡すべきに、萬國一の生下戸なればと、玻璃盞に半分ほどを十口ばかりに空け給ひて、かねて妹とは言ひたれども、未だ固の盃は濟まざりけり。改めて姉より、と差し給へり。姉様も下戸なれば妹も下戸なり。御盃ははかりにして、黄くば後に固の御茶をこそと、我も何と無く今日の愉快に、おもしろく酒飲みて、種々仇口を申せば、奥様も櫻色にならせ給ひて、平素よりは御口も軽く、時々若き事仰せられて、實に此日ほどの吉日はあらざりしなり。

先の程の御手紙の話になりて、神戸なる弟御様の事伺ひけるに、悉う御物語あり。旦那様は三十六にならせ給ひ、民之助様は丁度となり。二十四の歳商業學校を卒業あそばし、翌年實地を見習の爲上海へ、二年は其所に、浦鹽斯德に三年、去年の秋御歸早々神戸の一商會に重く用おられて在したりしが、かねぐの御計畫ありて、その運びも着きたれば、旦那様と御相談のありて、此度歸らせらるゝなり。さては御商人なるかと申せしを、奥様は何とか聞取らせ給ひけむ、商人なれども書生風の物に構はず、旦那様をば御友達のやうに少しも御遠慮無く、我身にも持餘すほどの我儘仰せられて、可愛き御方ぞかし。久し

不言不語

う見ざれば、有繫あやうがに纏まとせられたる所もあるべきなれど、折々の御手紙は始より終まで御冗談ばかりにて、はや三十になり給ひたる心地はせず。拵ひしやけたる學校帽子を横斜よこたに冠りて、土曜日毎に御馳走せよと亂入あはれみ給ひたるか、一日も早く御目に懸かるが樂たのしくて。

旦那様に肯うけさせ給ひてかと申せば、衆ひびは有繫あやうがに兄弟なりと言へど、我眼には然しかまでにも見えぬ。聲音の似たるばかりは陰にては別け難たがきまでなり。外國より送られし寫眞のあれば、紹介ひきあせむとて、手匣てばこの中より中判の半身取出して見せ給ひぬ。なるほど旦那様に肯うけたる所あり。眉屹まゆぎとして、御眼色おんめいしよく慧かう、頬の邊あたり豊満ほうまんと、口吻くちふんの可憐かわい、可愛かわいさを仰うせられしは此ならむ。渦毛うづげの巻きたる上衣うわぎを召して、厚太あつふとき外套がいとうを抱かかり、少しく身を擦りて、物に倚よらせ給へり。

眞まことに稟りん々りんしう、御目鼻ごめばな立揃たひて、一言に申せば、才子さいしらしき御杆ごかん鏡かみ。身の舉止とりななど軽く、應接ひごう好よくて、誰をも送おくし給はぬやうに見ゆると申せば、其通そのとなり。御氣風は旦那様に似て、今一息いま送おくなる所あり。此人歸來きらい給はぬ、花の咲きたるやうに此家も賑にぎしうなるべし。さもあらば我身われみもと言罷いひなして、奥様おくさまは卒にはに案あじ入りさせ給ひぬ。

せ給ひぬ。

賑にぎしうなるは可たけれど、と旦那様の大意吐たいいかせ給ひしも是なるべし。何故にかあらむ。
(七)

御客おんきやく様を容ゆるるべき御座敷は書院しよゐんに定め、我も半日なつか禪掛ぜんかけになりて働はたらき、掃除そうじも届とどき、飾付かざりもして、唯御出ごいでを待つばかり。

此は御庭ごていの眺望みはらしも曠朗はれやに、明取あかり宜よく、風も通して、御普請ごふしんも見事みことなれば、御座敷中にての御座敷と、今始めて見直みなおしたり。昨日までは微黯うすくらく閉切しめきりて、用無もちければ覬のぞきもせず。雨の日などは戸も啓あけぬまでありに有効あり無く扱あひたりしに、恚いかくなりて見れば、旦那様の御居間ごいまよりも、奥様の御部屋ごへいよりも、結構けいこうなるは倍あり、謂いふに謂いはれぬ好き所は、胸むねの開ひらくやうに此御座敷ござしきの陽氣やうきなるなり。

此度弟御様の歸かへらせらるるも、眷屬うなぐらのやうに思おもひし御家に恚いかる御座敷ござしきの出來たるも、やがて御問ごもんの和ならぎて笑わらうて暮くし給ふべき前兆まへしるしにはあらざるか。左にも右にも其御方の歸來きらいたまひなば、必ず此御家の爲、御二方の爲ためとなるべし。旦那様にも御遠慮ごえんりよ無く、奥様にも我儘われごん仰うせらるると聞くほど頼たのしく、此御方の唯一言ごひごひは、我

不言不語

不言不語

等の千言萬言にも優りて、大方の事ならば、御間は無理にも一日の内に復るべしと、待ちに待ちたる御歸もいよく今日となりぬ。

三時頃の御着と知りながら、午過ぐればはや落着かれず、幾度か書院に出入りて、挿花を正し、書幅も見飽きて、茶道具、煙草盆に手を付け、なほ持餘したる身を庭に出して、木陰傳ひに行けば、垣根に茂れる野薔薇の花の白きと紅きが唯二つ咲きたり。虹を逐ひて二つともに摘みて、奥様の御覽に入れけるに、近う寄れと仰せられて、紅きをば我髪の根に挿し給ひ、我にもとありければ、白きを挿して參らせけり。奥様も我も夜會結にしたるなり。

今日ばかりは稍御心の晴れたる御機嫌にて、彼此御饗應の噂の内二時も打ち、今鳴るは三時、最早御出と云ふ程も無く、支關に聲して、お増は近來りぬ。

打揃ひて御座敷を出で、階子側を過ぐれば、旦那様の下りて來たまへるに會ひぬ。連立て御出迎に出づれば、人力車三臺、二臺には骨柳、靴を溢るゝばかり積みたるを、汗水漬になれる車夫どもの解下すを、式臺に立ちて指圖したまふ御客様は、霜降の脊廣に同じ胴衣を召して、蒲納戸地の袴綿の窄袴をいと華車に穿敷

し給ひ、鐔濁の兜帽を召したるまゝなれば、御顔は眩と見えぬと、寫眞とは變り給ひて、想ひしよりは大人びて、かくては商會の重役をも務めさせたまふべき御容體なり。

荷物を其に置きて、車夫は歸れり。御客様は始めて帽子を取り給ひ、まづ旦那様に御挨拶ありて、奥様を見らるゝより打笑みたまひしが、其隣に見知らぬ我顔を、訝しく一目見遣りたまひて、御機嫌よろしう、と帽子を脱ぎ給へば、御歳よりは若く、御語氣を聞けば、なほ若く、我儘も仰せらるべく、御遠慮もあるまじく、いかにも爽愜なる御方のやうなり。御二方と連立ちて書院に通らせられる跡に、お増は御荷物の始末してゐたりければ、我は御風呂の加減見に行きて、其事申しに御座敷の口まで來りけるに、お客様の高く透る御聲にて、あの美しきは何者、姉様と並べて同胞のやうなりと、折から我噂なるに、遠慮して姑く小陰に忍びたり。

あのものは我身の妹なりと奥様は仰せられぬ。貴方の妹にして慙しからず。昔の娘風に當世の愛嬌を持たせ、陰柔なれども寂しからず、引立ちたる相貌にて、多く獲難き美人なり、と聞くに胸騒ぎ、顔熱りて立竦みぬ。餘に愛められたるは嬉しからず、辱しめられたる心地のするものなりけり。

不言不語

不言不語

續きて御客の訊ぬらるゝまゝに、奥様は我身の上を語らせ給へり。それも御賛辭の多く、いつまでも我噂にて立顯るべき機無ければ、抵觸のあらぬ御話の隙を見て入らむ、と今姑く待ちしに、やがて御辭の切れたればわざと咳してやうく入りぬ。

御風呂に召しましてはと申せば、御客様は氣輕に、それは辱しと御會釋ありける側より、且那樣は片笑み給ひて、環、噫は出ざりしか、一つか但しは三つばかり。如何にくと我顔を覗き給ひつ。其事と胸に覺れば、赧む顔を打背けて、此に得堪ず起たむとせしを、且那樣の引住めたまひて、噫の數を言へとて肯き給はず。爲む無くて、何も出ずと申せしに、奥様、彼分にては一つにはあらじ、三つなるべし。之は民様に何はむとありければ、御客様は頭を撫で、未だ三つまでにはあらねど、一つにてはあらじ。一つ半くとて立たせ給ひければ、一つ半にては寧ろ二つに近しとて、且那樣は大笑あそばしけり。我は獨り玩弄になれる想して、在るにも有らず、身を竦めて俯きたるに、御風呂に御案内せよと奥様の御意ありければ、立つより早く駈出せしを、お客様に呼止められ、徐に御案内頼む、と笑はれて彌面目無く、やがて書院に返せば、御酒の支度と、奥様も御手を下し給ひて、御料理の數々卓に排べて、御酌は我役なり。

此上に御酒の始りなば、いかに羞しき憂目や見るらむ、と我は切に胸を騒がせしが、さまでの事は無く、折々且那樣の軽く誦らせ給ふと、御客様の可笑き事のみ仰せらるゝとにて、御座敷は浮立ち、奥様も始終笑ましげに見えさせ給ひ。且那樣へも親みて物仰せらるれば、彼方よりも十言に十言の御答ありて、如何に見參せても御別條のあらざる御間なり。

御銚子の代に立ちし時、お増は唯呆れて、此御家始りて以來今日のやうなる日はあらずと言へり。此後は日毎に今日のやうなるべしと聞かせければ、如何にしてかと渠は問へり。我は唯打笑みて、語らざりしが、噫、嬉しくも我推量は差はざりけり。

名句なりとて、叔父の毎々聞かせし「五月雨や一夜ひそかに松の月」とは、實に今日の事なり。あはれ松の月の長く此御庭を照して、五月雨の全く霽れ、春雨の窓に音無く、正月の雪再び降ることなかれ。

翌日は二階の御居間にて御客様は朝御飯を召上りて、そのまゝ正午まで下りさせ給はず、暮に御話のありけむやうにて、折々笑はせらるゝが聞えたりき。

御晝飯は書院にて、昨日の如く、卓を圍みて睦しう。晝間は熱ければとて、御酒は無かりけれども、御客様は不言不語

不言不語

御元氣にて、奥様の沈みがちな御氣も恠くしては引立ち給ふべく、人笑はせに強ひて興をさせ給ふにはあらで、仰せらるる事に自然の愛嬌あり、御話の得も謂はれず面白くて、姑くも坐を起ち難く覺ゆるまでなり。御物語も途絶えて、奥様の少しく俯きて御飯を食へさせ給ふ御顔の、如何なる故にかありけむ、細々と御氣の太く目立ちて見はたるを、御客様の噴めて在したりしが、卒に姉様と呼び給ひぬ。

奥様は慌てたる風情にて見向かせ給ひしが、今まで何やらを思案してゐたまへりしを、忽ち舌に復りたるやうに見えたり。御思案とは例のなるべし。

御色澤も悪く、瘦せ給ひたるは又格別なり。確に御病氣の御顔色。如何爲たまひたる、と御客様は眉を聳め給へり。

奥様の惑ひ給へる氣色より、旦那様の此時の御顔こそ、御胸の内の苦惱を盡きたるは一層と、我は思はず見参らせけれども、御客様には御目に入らざりければ、其色見せじと旦那様は、頬などの脱け、體の細りて、膏氣の脱けたるは、寄る年の加減にて是非無し、と笑ひ給ふも故とらしく、さりとは御心苦しげなり。然るまでに瘦てかど、奥様は兩の頬を撫で給ひぬ。瘦せたり、太く羸れたり。神戸へ参る前、赤坂にて見参ら

せし頃などは、瘦せず、太らず、中肉にして玉の如く、別けて口吻より頬の邊の好さには、恐多けれど此民之助忍びて焦れ参らせしがとありければ、さては其方の執念にて瘦せたるならむなど、旦那様までも仰せらるるに、奥様は彌々迷惑して、顔の事言ひ給ふな、昔の事も言ひ給ふな。過ぎにし佛に焦れさせ給ふとならば、寫眞なりとも参らすべし。婆をば苛み給ふな、と言はせも果てず、苛むにはあらず、御心配申すなり。可憐ものを残ひたるよ。我もやがて女房もつならば彼口吻、彼頬の如きをどこそ念ひたるなれ。それより三年になりぬれども、未だ瓜八分ほども肖たるに邂逅はず。邂逅はぬも其理かな。本家さへ恠くなりぬるを。願はくは笠原家の爲、兄者人の爲御自愛專一ぞと、御戯言の中にも實あり。

御飯も濟み、御茶となりて、御客様は猶奥様を視たまひて、必ず御病氣なるべしと、前後三度ばかりも異しみて問はせ給ひけるに、御心に懸けさせ給ふな。然る事無しと、飽くまでも憂ませ給ひけり。

之に由り觀れば、御間の事民之助様は全く知り給はざるならむ。假奥様の瘦せ給はず、或は物を思はせ給はずとも、抑も御二方の御様子に眉の撃むべき不思議あり。恠く昨日今日を欺き了せたまふとも、遠からず穉に出ても、民之助様の御目には留るべし。現に三度異しまれたまひし後の奥様の御機嫌は、はや御胸の曇り

不言不語